

清は黙つて聞いて居た。

三十三

清はさびしく暮した。

霜解の道を拾ひながら、日毎に社へ通つて行つた。日影に彩られて霧が美しく見える朝もあつた。丘から丘へ通ふ路には西風が寒く吹いた。

『當人も是非先生に御目にかゝりて御禮申し上げねばならぬには候へども、感情の昂り居候際としてこれは今少時御ゆるし下されたく幾重にも御察しのほど願上候。』

山田から來た手紙にはこんなことが書いてあつた。

『あゝいふ體で貴方に逢ふのが厭なんですよ、屹度。』

かう細君はその手紙を見て言つた。

敏子はまだ體を産婆に見せて居なかつた。餘り臨月に近づいてからでは、産婆は萬一を氣遣つて、成だけ責任を遁れたがるものであつた。中にはさうした産婦を謝絶するものも尠くなかつた。

『本當に若い人達は暢氣ですなえー』
それを聞いた細君はかう言つて笑つた。

牛込に居る頃、細君のたのみつけて居た産婆があつた。總領の娘も、次の男の兒も皆なその人の世話になつた。『あのお婆さんは何うでせう、』と細君は言つた。しかしそれよりも簡單に話の出来る産婆が其の近所に居た。それはお三輪の稚友達で、長い間苦勞した夫と別れて、つい此頃この近くに産婆の札を掲げた。お三輪がある日其處を通ると、豫ねて知つて居る其女の名が書いてあつて、丁度其處から出かけて來た人は、十五六年も逢はない昔の友達であつた。『マア、貴方お桂さんぢやなくつて？』『マア、貴方お三輪さん？』それから其産婆はお三輪の家に入出入するやうになつた。

『あの人に頼んで下さいよ。新店だからお禮なんぞはいくらだつて構ひやしないんぢやがね。』

清が年始に出かけて行つた時、お三輪はかう言つて、その産婆を勧めた。

籍は細君の行つた翌日、山田が持つて來て、早速役場の届けをすました。『いゝ大きな娘さんが出來たんぢやつてねえ……。まア、お目出度いことぢやね。』お三輪はこんな風に清に言つた。

其夜は月が薄い暈を被て居た。お三輪の家と姉の未亡人の家で飲ませられた酒に清はかなり酔つて居た。かれは要垣と柴垣との間の細い巷路を歩いて行つた。其處にある二階屋は、かれの三番目の男の兒の生れたところで、敏子が父親に連れられて始めて遣つて來たのも其家であつた。其家の立關の窓からは灯が明るく見えて居た。

推移といふことは、其前の桐島や菜畑が大きな二階建の下宿屋になつたのでも知れた。其頃は深い樹

の影の中に、清の家の軒燈がほつとり一つ點いて居るばかりで、夜は女などの出て歩けないほど暗くさびしかつた。それが今では其處にも此處にも笑聲がして、下宿屋の室からは琵琶歌などが洩れて聞えた。敏子の家は其處から遠くはなかつた。元、藪地であつた處に新道が出来て、寺の傍から真直に原町の通りに入るやうになつて居る。清は餘所ながら其家を見て行く氣になつて、其方へ出て行つた。

近頃のないやうな暖かい夜であつた。歩いて行く清の影が薄く地上に落ちて居た。正月の夜は何處の家も賑かで、笑聲が其處にも此處にもした。歌牌を読む若い女の聲のする家もあつた。

電燈の明るい湯屋からは、夜目にも見えるほど真白に白粉をつけた女が石鹼と手拭とを持って出て来た。

それと覺しき家の前に来た時、丁度向うから歩いて来る男があつた。それが馬橋か山田かで、向うから聲を懸けられるやうなことはありはせぬかと清は恐れた。わざと左側の垣根の方に添つて、用のある人のやうに急いで歩いた。

摩違つてからも、足を留めなかつた。突當ると、路は右に曲つて、向うは廣い原になつて居た。薄い霧が茫と夢のやうにあたりを籠めて、向うの兵營の窓の灯が其中にほんやりと見えた。

清は今一度引返した。

其家の格子戸は雨戸が一枚引いてあつて、一枚明けたところから、中の入口の障子が明るく見えた。

耳を敏くても話聲は聞えなかつた。人の居るやうな氣勢もしなかつた。

敏子が一人留守番をして居る光景がそれと想像された。

馬橋は去年の暮から『報知』に入ることになつた。三面の外交は、まだ世の中に深い經驗もない若い身に取つては餘り容易な仕事ではなかつた。それに新參では一週に一度の休暇も取ることも出来なかつた。此頃では夜勤の方に廻されて、夜は一時過に歸つて来ることもあつた。

清には其夜のことの後まで忘れなかつた。打消しても打消しても何うすることも出来ないある一種の力——そこに離れ難い不思議な縁があつた。

敏子と清との間は、長い間平行線で續いて来た。時にはその平行線が觸れようとする處まで近づいて行つたこともあつた。しかし其平行線は容易に觸れることが出来ないやうな運命を持つて居た。

この平行線は、何時まで續くんだらう？ 『永久に觸れることの出来ない平行線——』かう思ひながら、かれは寺があつたり幼稚園があつたりする裏道を、灯の多い通りの方へと歩いて行つた。

暗い三疊の間！ それも幾度となくかれの眼の前に歴々と見えた。三疊の暗い一間に寢て居る女、腹の大きい女、蒼いやつれた顔をした女——さうした想像は悪魔のやうな暗い影をいつもかれの頭に蔽ひかぶせた。時には神経的になつて頭を石に打ちつけて了ひたいと思ふことなどもあつた。またピストルを額に當てたいと思ふこともあつた。清は人間の心の複雑した現象に驚いたり恐れたり嘆いたりする

人であつた。

三十四

若い人達は自由な、しかし困難な生活を送つて居た。移轉をするに就いての費用、今まで溜つて居た下宿屋の勘定、それを拂ふために、行李に残された衣裳や書籍や純金の指環や、さうしたものは總て賣屋に運ばれた。敏子が買ったツルゲネエフの全集も馬橋がある夜風呂敷に包んで持つて行つて金に代へて來た。

室は随分亂雑にしてあつた。三疊には馬橋と敏子が寝た。六疊には山田が蒲團を敷いた。夜が遅いので、朝、十時過ぎまで、雨戸が明けられずにあることもめづらしくはなかつた。

朝夕の炊事、それがまた一方ならぬ辛苦であつた。お嬢さん育ち、寄宿舎育ちのかよわい敏子には、山の手の深い井戸の凍つた釣瓶繩は容易に手繰られなかつた。初めは新らしい興味と新しい勇氣を抱いて、甲斐々々しく襷などをかけて、勝手元へ出て働いても見たが、それも長くは續かなかつた。辛うじて汲上げたバケツの水を持つて來ようとして、霜解の悪い道に足を取られて、危く大きい腹を打たうとしてから、近所の上さん達は、若い鹿髪の女の代りに今度は男達の姿を井戸端に見るやうになつた。

朝遅く女の赤い八つ口の附いた汚れた綿入の寝巻を着て、脊の低い眼の下つた男が水を汲んで、こそ、

そと歸つて行くのを見ることもあつた。又ある時は脊の高い頭を分けた今一人の方の男が、タオルをだらしなく肩にかけてブリキの洗面器を持つて來て、頻りに顔を洗つて居るのを見ることもあつた。

飯も敏子には満足に炊けなかつた。火の燃えないのが第一に困つた。コツバの焚附を燻べても容易に薪に火が移らなかつた。煙が座敷まで入つて來るので、山田が行つて見ると、敏子は煙に咽んで眼から涙を出して、其中にまご／＼して居た。

飯も半熱の時が多かつた。

『何うも困つた奥さんだね。』

かう山田は戲談を言つて、いつも火を燃してやつた。

それに挿木も充分には廻らなかつた。芝居にある落魄れたお姫様と言つたやうな風をして辛うじて朝毎の味噌を磨つた。『今に、上手になりますよ。今に、立派なお上さんになつて見せますから。』敏子はこんなことを言つて、釜や茶碗などを洗つた。

正月の寒い日が幾日かついた。日影の當らない勝手元は殊に寒かつた。敏子の細い華奢な手は荒い山の手の井戸の水に赤くなつて、リスリンをつけてもつけても細い痛い皸が切れた。敏子は勝手を片附けると、いつも一しきり火鉢の傍に坐つて、赤くなつた両手のうら表を押附けて見て居た。

『皸がきれいでしたね?』

縁

かう山田が同情して言ふと、

『水が荒いのね。』

敏子は恨めしさうに手の裏を返して見た。

寒い日には、釜にわざ／＼湯を沸かしてそれで米を磨いだりなどした。

『僕が細君を貰ふ時は、飯の満足に炊ける女を貰ふんだ。』

若い友達の一人はこんなことをわざと言つて笑つた。

後には、敏子は染々と勝手元が厭になつて來た。清の家に居る頃には、細君が婢を相手に煮炊などをして居るのを見て、何だか自分も手を出して見たい様な氣もしたが、いざ自分がそれをするとなると、面倒な、厭な、骨の折れるものだといふことが段々解つて來た。加減に馴れないで、水鏡のやうな薄い汁が出來たり、口の曲るやうな鹹い煮附が出來たりした。

それでも馬橋はまづいとも言はずに黙つて食つた。

さういふ時には、山田が屹度後で、『今日のお料理のせるですよ、こんなに咽喉の乾くのは、』などと軽い皮肉を言ふのが例であつた。

馬橋も炊事には不馴であつた。矢張飯を炊いたことはなかつた。で、大抵は稚さい時分から苦勞をし

た山田が勝手へ出て、敏子の知らぬことを深切に教へて遣つた。朝など、馬橋のまだ寝て居る間を、二人でせつせと勝手に働いて居ることなどもあつた。

山田は二人の爲めには——寧ろ敏子の爲めには、いかなる勞をも厭はないといふ風に見えた。産前の注意もしてやれば、經濟のことにも力を添へて遣つた。いつも二人で仲よささうに働いて居るので、近所では何方が御亭主でせうなどと噂し合つた。

『勝手元をする位なら、原稿を書いて、誰か婢を一人頼んだ方が得よ……私、原稿を書いてお給金を出すわ。』

終には敏子はかういふことを口にするやうになつた。敏子は女の雑誌や少年少女の雑誌に、女學校の寄宿舎の實驗談だの、お伽話だのを書いて出した。一時間に三四枚は書ける筆を持つて居た。

『たうとう本音が出ましたね。』

山田はかう言つて笑つた。

若い友達によく遊びに來た。有名なヒロインを見てやれなどと好奇に遣つて來るものも多かつた。中にはロシアの虛無主義にかぶれて居るものもあれば、自からデカダンを標榜して、酒と女を生命のやうにして居るものもあつた。

三人も寄ると、一間は嵐の様であつた。議論をしたり皮肉の言ひ合ひをしたりした。髪を長く、汚れ

た布子を着た男だの、顔の四角な脊の高い紺緋の羽織を着た男だの、蒼い神経性の顔をして常にイライラして居る青年などの間に、髪の亂れた蒼いやつれた顔をした敏子の姿が常に見られた。

『かうして居ると、『Virgin soil』の中の一章のやうな気がしますねえ。』

ある一人はかう言つて得意さうに敏子の方を見た。

センチメントにあくがれた清や西や田邊の時代とは、若い人達の心持が著しく違つて居た。理想の影を追ふなどといふやうな處は少しもなかつた。戀の仕方でも大膽であつた。人々は其處此處から、女を捜して來ては、勝手に同棲した。早稲田の奥に、あやしげな女を妻にして居るものもあつた。女學生を懷妊させて、女の親から誘拐の告訴をされて居るものもあつた。女に遁けられて深い絶望に陥つて居るものもあつた。

同じ社に出る仲間も一人二人はその近所に居た。いづれも學校を出たばかりの若い人達で、夜勤の時など、窓の處から、

『おい、馬橋君。』

かう聲を懸けて行つた。

馬橋は動くと共に學ばなければならなかつた。二面記者などといつまでも甘んじては居られなかつた。

敏子の爲めにも豪くならなければならなかつた。かれは筆を執つたり書を読んだりする時間の少いのを憾んだ。體も強い方ではなかつた。

机の上にはそれでも西洋の新しい小説や評論の書籍が常に載せられてあつた。

馬橋は敏子のことを『敏さん、敏さん』と呼んで居た。年齢が同じなので、戀人同士と言ふ一方には何處か友達といふやうなところもあつた。をり／＼衝突することがあつても、馬橋はいつも折れて出た。

社に出る時に、

『敏さん、金を持つてないか。』

かう馬橋が言つて、敏子の財布から五十錢銀貨を貰つて行くこともあつた。

近所にしる粉屋があつた。客があると、敏子はよくそれを買つた。清の細君の二度目に行つた時こそれを取つて御馳走した。婢がそのアキを取りに來た時、敏子は自分の財布を先づさがして見て『貴方、少のお錢を出して下さいな。』かう机の傍で何か書いてゐる馬橋に言つた。

清は細君に成るだけ度々見舞に出懸けるやうにさせた。『普通に結婚さへすれば、あんな生活を送らなくつても好かつたのだ。自分で遣つたこととは言ひながら、憎むべきことでも何でもない。里といふほどのことは出來なくとも、子を産んで了ふまでは、度々行つて慰めてやれ。親に離れて、知らない土地で、あゝして身重になつて居るのは可哀相だから。』かう清は細君に言つた。

細君の出かけて行く時は、いつも大抵馬橋が居た。敏子と二人ぎり、いろいろな話を細君はして見たかつた。しかし、さうした機會は遂になかつた。出かける支度をして居る時でも、細君が歸るまでは決して出懸けなかつた。其處まで出かけた途上で細君に逢つた時などは、わざわざ馬橋は其處から引返して來た。

平生でさへ感情的な敏子は、身重になつてから、益々神経が過敏になつた。黙つて三疊の暗い處に引込んで居ることが多かつた。かと思ふと顔を赤くして、若い人達と一緒にゐて賑かに笑つて居ることもあつた。馬橋の行爲に少しでも不眞面目な不熱心なところがあつたりすると、すぐ『私のことも考へて下さい』といふ風に出て來た。

多くの世間的犠牲、さういふものは何うでも好い。男さへしつかりしてゐて貰へばそれで好い。今に成功させて見せる。笑つた人々を見返すやうにして見せる。敏子は其の力で自分の選んだ男を立派に成功させることが出來ると信じて居る女の一人であつた。田舎に歸つて居る間にも、男が自分の爲めに絶望して其一生を犠牲にしてしひはしないかといふことが、戀そのものよりも大きな問題であつた。それほど敏子は自己の力を信じて居た。敏子に取つては馬橋から不眞面目な不熱心な態度を見せられるのが一番辛かつた。

敏子はいつてもかう言つた。

馬橋に取つては、それが何だか自由を束縛されるやうな氣がして厭であつた。そんなことは言はれなくつても遣つて行くといふ腹もあつた。『貴方の爲めにこれほど犠牲になつて居る』といふ敏子の態度や言葉にも段々嫌らなくなつて來た。

『だつて、そんなこと言つたつて仕方がないぢやないか。』
後にはかう云つて、女に反抗の語氣を見せることもあつた。

過去の快樂が歴々と振返られる頃には、二人の前には重い苦しい現實の錘が既にその束縛を確實にして居た。二人は戀の爲めに大きな犠牲を拂つて居たことを思はぬ譯には行かなかつた。

其頃、馬橋は社で『暗黒の東京』と言つたやうな外交方面を預けられて、二三人の同僚と一緒に、日比谷公園だの、招魂社だの、濱町河岸だのといふやうな處を夜中にぐる／＼廻つて歩いた。女と男とがベンチに凭つて何か密々話して居るのを樹の間の闇から覗いて見たり、夜目にもそれと解るほど白粉をつけた若い女が軒燈のほんやり點いた細い露路に入つて行くのをつけて行つたり、時には評判の女學生の祕密を探るために、二時間も其家の周圍をぶらついて居たことなどもあつた。

ある有名な音楽家の弟子で且つ情婦であつた一女學生を訪問した夜は面白かつた。女は新聞記者だと聞いて容易に逢はなかつた。風邪を引いて臥て居るとか何とか言つて、逢はない算段を頻りにした。そ

れを威嚇したり賺したりして、漸く十分ほどの約束で戸外に連れ出した。くつきりと抜出るやうな色の白い美しい女であつた。馬橋はそれと並んで歩きながら、兼ねて探つて知つて居る其女の秘密を少しづつ話して、それに對する返答の中から更に深い秘密の真相をさぐり出さうとした。女はそれを新聞に出させまいとして、泣いたり頼んだり訴へたりした。墮落の道に陥ちて行つた經歷なども哀れつほく同情を惹くやうに話して聞かせた。しかしそれも甲斐がないといふことが解ると、今度は柔かい體をすり寄せかり、わざと手を握つたりして、頻りに色仕懸で持ちかけて來るのが馬橋にも解つた。

女は今では音楽家と手を切つて、今居る家の男に身を任せて居た。女に取つては、新聞に書かれるのが非常に辛かつた。十分と言つたのが三十分ほど経つても、二人は猶闇の中に立つて話して居た。其處に、其家から出て來た太いステッキを持つた大きい男が、ヅカ／＼遣つて來て、『貴様は何だ!』と突然誰何した。馬橋はその太いステッキの一撃を覺悟しない譯には行かなかつた。男は『人の家の娘を二十分も三十分も戸外に引張り出して居る奴があるか、いくら新聞記者だつて用捨がならん。』かう凄じい語氣を見せたが、それでも別段ステッキを振廻しもしなかつた。やがて女を伴れて家に入つて行つた。時には早稻田の新開町の曖昧屋に、職人の服装をして、探檢に出かけて行くことなどもあつた。夜の東京には、思ひがけない暗黒なことや猥褻なことが數限りなく行はれて居た。

らなければならぬやうなことも度々あつた。かれは毎夜刺戟された頭と疲れた體とを抱いて山の手の自分の家に歸つて來た。

三十五

『手が要るやうなことがあつたら、お三輪嫂さんの處へすぐ頼みに入らつしやい。宅で、さう話して置いた筈ですから——』かう細君は敏子に言つた。

敏子の出産の時の世話をある時清がお三輪に頼むと、

『私で出来ることなら何でもするがね、お易い御用ぢやともねえ……。近いからいつでも出懸けて行つて上げますとも。』

かうお三輪は氣輕に承知して、

『本當にまア……立派な家のお嬢さんが、見ず知らずの人の中に来て、一人でお産をするつて言ふのは大抵なことぢやないがね。』

かう同情もした。

『辨天町の家に來る時分には、綺麗な別嬪さんぢやつたがね。』
こんなことをも意味ありさうに言つてわざと清に笑ひ懸けた。

二月の末のある寒い夜であつた。産婆のお桂さんが鳥渡お三輪の家に寄つて、

『今夜あたりお産がありさうですよ。今、迎へに来て、これから行く處ですの。』かう知らせに行つた。寢巻も着替へずに心待に待つて起きて居たが、十二時が過ぎてもその迎への者は來なかつた。さうした處を見られるのが流石に恥かしいのだらうと思つてお三輪は寢たが、不圖眼が覺めると、誰か、低く戸を叩いて居た。

もう夜は明け放れて居た。寒いく朝であつた。戸外には山田が汚れた襟巻をぐる／＼巻附けて寒さうにして立つて居た。山田も馬橋も一二度此家に訪ねて來て、お三輪とはもう懇意の間柄であつた。

『何うしたね?』

『生れましたよ、女の兒が——』

『安産かね?』

『え、二人とも達者なやうです。』

『それは結構ぢやつたね? 私、今これからすぐ行くがねえ。』

『え、……何うぞ……男二人だものですから、何にも解らなくて困つて了つたのです。……お氣の毒ですけど、お差支がなければ、鳥渡入らしつて戴きたいんですが……』

『え、今、すぐ行きまますよ。』鳥渡お三輪を慰めて、産婆さん、まだに居るんでせう?』

『え、今まで居ましたけれど、急に又一つ出かゝつて居るのがあるつて、跡を片附けるとすぐ行きましました。』

『さうかね、忙しいこつちやね。』かう言つて、『それぢや後からすぐ行きますから。』

山田が歸つて行つて間もなく、お三輪は支度をして出懸けた。丁度其時隣の秀子がねむさうな顔をして、入口の格子の雨戸を明けて居た。お三輪の姿を見て、

『をばさん、何處へ行くの? こんなに早く。』

『何處だか、當て、御覽よ、好い處よ。』

と笑つて立留る。

『好い處つて、何處?』

『好い女の兒が生れたんだつて。』

『女の兒?』秀子は鳥渡考へて、手を打つて、『敏子さんの?』

『さうさね。』

『女の兒? 今、生れたの?』と、秀子は眼を睜る。

『好い兒だつて、……今、知らせに來たのよ。』

『さう……私も見に行かうかしら。』

『お出でよ、さア。』

とお三輪は相變らず戲談を言つて通つて行つた。

お三輪が行つて見ると、暗い三疊に白い顔を見せて、敏子は寢て居た。傍には生れた兒が寢かしてあつた。

『お目出度う御座いましたねえ。』

覗くやうにしてお三輪が言ふと、敏子は莞爾と笑つて見せた。

馬橋はまご／＼して居た。汚れた女の綿入を着て、袖の長いのを捲りながら、頻りに勝手元を出たり入つたりして居た。『何うもお呼立てして濟みませんでした。男には何にも分らないものですから。』かう言つて、角火鉢の前にお三輪を坐らせた。

『好いお兒ぢやね、馬橋さん。』

例の頓狂な調子で言つて、

『それでも輕かつたんですか？』

『え、重い方ぢやなかつたんです。』

『結構でしたねえ。』

馬橋は笑つて、『それでも生れた時はまご／＼つきましたよ。……湯が沸いて居なかつたものですから。』

『それはさうでせうねえ……男の手ではねえ。』

『昨夜、僕の歸つて來たのは、二時過なんぞでせう。それからゴタ／＼して、たうとう寢る間はなかつた。』かう言つて馬橋は充血した眼を摩つた。

『そんなことを言ふけど、一番苦しんで居た時分は、君はグウ／＼寢て居たぢやないか。』
勝手から入つて來た山田は、それを聞いて、其處に立つたまゝかう言つた。

『さうかな……そんなことはありやしまい。』

『だつて、生れた時は君は寢てたぢやないか。』

『さうかな、少しウト／＼したかな……お産の時の唸聲といふものは、餘り心地の好いものぢやない。』
産れるまでの苦痛、産婆に頼まれて、山田は敏子の腰の處を強く押し遣つた。産婆の來ない前にも苦しんで居る女の下腹を摩つてやつた。

『山田君は男性と女性とを兼ねたやうな重寶な處があるよ。君が居て呉れたんで僕は大幅助かつた。』
馬橋はこんなことをも言つた。

何の氣なしに勝手へ入つて行くと、足を踏み立てられないやうな亂雑な光景が先づお三輪の眼に映つた。産湯を使はせた盥がまだ其儘にしてあつた。四邊にはコツバダの焚きつけだのが一面に散らばつて居る。釜には柄杓が入れられたまゝに蓋が取つてあつて、其處から湯氣が白く立つて居る。

バケツや炭俵やお膳や——滴した水はそのまゝに凍つて、歩くと板の間がツル／＼滑る。七輪にはから火が活々と起つて居た。

『まア——これは大變ぢやね。』

お三輪は思はず聲を立てた。

竈一つ、釜一つ、棚の上のビールの空罐が二三本ころがつて居る他には、何もないといふやうな貧しい生活の中で、あの學問の出来る美しい敏子が、かうしてお産をするといふことは、お三輪には可哀相のやうでもあり、不思議なやうでもあつた。

『さア、片づけませう、餘り散らかつてゐるぢやないかね。』

お三輪はかう言つて、持つて來た襷をかけに懸つた。

産婦の爲めにお粥を煮たり、汚れたものを片附けたり、紅絹の片を丸くして生れた兒に砂糖水を飲ませたり、幾度もかういふ世話に馴れたお三輪は、別にそれを苦にするでもなかつた。

『奥さん、まア、お茶でもお上がんさい。』

産室に居るお三輪を山田が座敷で呼ぶので、暫くして行つて見ると、口の缺けた土瓶に番茶が淹れてあつて、茶湯臺の上には、食麵麩がころ／＼轉がつて居た。

『今朝は御飯は炊かないのかね。』

かうお三輪が訊くと、

『え、これで間に合せて置きました。』

『それぢや、家で炊かせて持つて來て上げれば好かつたねえ。』

『いや、僕等はこれで澤山……平生でも面倒臭いと、よくこれで間に合せて置くことがあるんです。』

『簡單でせう、僕等の生活は。』

馬橋は傍からかう言つて、食ひかけた麵麩をムシヤ／＼食つた。

『奥さん、一つ何うです？』

馬橋が笑つて言ふと、

『私は麵麩はまつびら。』

とお三輪は手を振つて見せた。

お三輪はまだ朝飯前であつた。昨日の飯も残つて居なかつた。

『御飯が無くつちや何かにつけて困るでせう。私、炊いて上げようかね。』かう言つて、お三輪は勝手元へ行つた。米櫃には一度炊く位の米しか残つて居なかつた。

それでも若い人達は楽しさうであつた。馬橋は産室へ入つて長い間何か睦しさに話をして居た。笑

ふ聲もをりく、其處から洩れて来た。例の『敏さん、敏さん』と呼ぶ調子も異様に聞えた。

お三輪の今まで見て来た家庭では、かうした主婦は餘りなかつた。難かしい姑に虐待される嫁さん、鹿爪らしい顔をして居る旦那さん——男が他人の前で女に白い歯を見せるやうな習慣は餘り見たことがなかつた。表面は従順に見せかけて、眼色や態度で男の心を奪ふのが、由來お三輪達の見たり遣つたりして来た世の中の状態であつた。何んなに仲が好くてもそれを表面に表はせない處に面白味があつた。お三輪には何も彼も目新しく見えた。

『若い人達は若い人達さねえ。』

かうお三輪は、其日の午後に報知を受けて見舞に來た清の細君に言つた。

細君は水飴の罐を見舞に持つて來た。馬橋は出勤してもう居なかつた。山田も晝飯をすますと、用事があるとして出かけて行つた。

『好い兒ね、似てますね、敏子さんに。』

細君はかう言つて、傍に寝かしてある兒を見た。

『先生はお留守ですつてね。』

敏子は暫くしてから細君を見て言つた。

『何うして知つて居て？』

『何かに出て居たと見えて、宅で、さう言つて居ましたから。』

『さう。』

清は二三日前から友人二三名と田舎へ小旅行をして居た。

三十六

兎に角七夜までは、お三輪が泊つて世話をして遣ることになる。で、日が暮れてから、山田が出懸けて行つて、其家の少年と一緒にお三輪の寢道具をかついで運んで來た。

『や、生れたな、どれ見せる。』

こんなことを言つて、づかく三疊へ入つて行く友達もあつた。

『何うも生れ立ての赤坊つて言ふものは汚ないもんだな……。それでも愛情なんて言ふものが起るかえ？』

ある友達がかう言ふと、馬橋は、

『愛情なんて、起るつて言へば起るとも言へるんだらうが、それほど際立つたもんぢやないねえ。何うも矢張汚いよ。肉の塊のやうな氣がするよ。』

『これが大騒ぎをやつたラブの塊だと思ふと厭になるねえ。』

『まア、さう言へばさうさな。』
と馬橋は笑つた。

『兎に角、これで一安心だねえ。名を何と附けたえ？ 僕がつけてやらうか。』
かう言つて歸つて行く人もあつた。

お目出度いなどと言つて行くものは一人もなかつた。それに、産婦が隣の間で寝て居るのにも頓着なく、大きな聲を立て、議論らしいことを長い間饒舌つて行つた。お三輪が挨拶をしても碌々それに調子を合はせるやうな人もなかつた。

お三輪は満更書生生活を知らぬ譯ではない。死んだ夫が免職になつて困つて居る時分には、其家の一間に早稻田へ通ふ書生を置いたこともある。それから清が細君を貰つた當座によく訪ねて來た書生さんの群も知つて居る。矢張解らぬ議論は常にしたが、しかしこんな風ではなかつた。

『随分いろ／＼なお友達がお有んなさるね。』
わざとかう馬橋に言ふと、

『暢氣な男ばかり居るでせう？ あれで綺麗な鼻を持つて居る奴もあるんですぜ。』
かう平氣で馬橋は言つた。

つて話などをして居ることは稀である。それに話も合はぬらしかつた。

乳が何うも思つたやうに出なかつた。翌日産湯をつかはせに來た時、産婆は觸つて見て、『こんなに張つて居るんですから、乳がないつて言ふ譯ぢやないんですねえ、かうやつて……』と揉む眞似をして見せて、『成るだけ、自分で揉むやうにして御覽なさい。それに誰か男の方に吸つて貰ふと好う御座んすよ。道が開くと、ズン／＼出て來ますから。』

夕飯の時に其話が出て、

『何うだ、僕が一つ吸つてやらうか。』

笑ひながら、山田が言ふと、

『いかん、いかん、君など吸つちやいかん。』

馬橋はかう言つて笑つた。

『しかし亭主に吸つて貰つたんぢや駄目だつて言ふぜ。』

『そんなことがあるもんか。』

『本當だよ、産婆がさう言つて居ましたねえ、奥さん。』

かう言ひかけられてお三輪はわざと、

『え、え、さうですつて。』

「だつて、君なんぞ吸つちやいかん。」

馬橋が大真面目なので、山田も終にはくすくす笑ひ出した。

「何うちやね、まア。本氣にしてるがね！」

お三輪もふき出して笑つた。

三十七

四月のある晴れた日に、清が社から歸つて來ると、立關の靴ぬぎに、見馴れない二枚草履と桐柱の駒下駄とが並べて置いてあつて、座敷で話聲が聞えて居た。

障子を明けて細君が迎へに出たが、

「おや、貴方ですか。」

と言つて聲を低くして、「敏子さん、馬橋さんも一緒に。」

「フム。」

わざと平氣な調子で清は言つた。しかし一種の鼓動を心に覺えない譯には行かなかつた。彼は其儘居間へ入つて、洋服をぬいだり、ネクタイを外したりして居たが、後から和服の不斷着を被せかけた細君は、

「餘程前から來たか？」

「一時間ばかり前。」

かう言つて、顔を寄せて、

「子供も連れて來たのよ。」

「フム。」

清は帶をしめて、靴下をぬいで、箆笥の上に置いてある足袋を穿いた。何處となく氣が落附かないといふ風で——座敷へ入つて行くのが何だか心を讀まれるやうな氣がするといふ風で、暫し其處にまご／＼して居たが、やがて煙草箱と煙管と吸ひかけた敷島の袋とを一緒につかんで、わざと勢好く裏の縁側に足音を立て、座敷へ入つて行つた。

襖を後にして、敏子は子供を抱いて坐つて居たが、其眼と清の眼とは電氣のやうに忽ち相觸れた。

敏子はすぐ低頭して了つた。

「や。」

と清は聲を懸けると、馬橋は少し席をいざつて、丁寧に挨拶をかへした。

「よく遣つて來ましたね。」

馬橋に言ふでもなく敏子に言ふでもなく、間の抜けた異様な調子で、清はかう續けて言つたが、其儘

わざと敏子の方へ視線を向けた。

其顔の赧いのを敏子は見た。

いろ／＼な思ひの胸に集つて来るのを抑へて、『大變大きい丈夫さうな兒だね、どれ、此方を向けて見せ給へ！』

かう清が言ふと、敏子は顔を赧くして例の表情のある眼をちらと清の方へ閃めかしたが、やがて微笑を頬に浮べながら、子供の顔を此方へ向けて見せた。

敏子の頬の著しく痩せたのを見て、清は悲しいやうな氣がしたが、『おゝ、いゝ子だ。肥つてる。貴方によく似てる。』

かう言つて、俄かに話頭を馬橋の方へ向けて、

『それでも好く出て來られたね。——此頃は社が忙しいんだらう。』

『え、忙しいつて言へば忙しいんですけど、さう言つてると、いつまで経つても來られませんから。』

『それでもちつとは馴れたでせう？』

『え、此頃は夜勤の方は人にやつて貰ふことにしましたから。』

『夜勤は辛いだらうねえ。』

男達の話して居る間に、敏子は少しく心の餘裕を得たといふやうに、子供を抱きかへて居住ひを直した。袖の着物に銘仙の羽織を着て、縞子と縮緬の腹合はせの帯をしめて居た。髪は薄くなつたのや、肩の痩せたのなどが著しく眼に立つた。眼の周圍にも、濃い深い影が生じた。

其處へ入つて來た細君は、

『頂戴物をしましたから。』かう言つて床の間の方を清に見せた。其處には、此間祝つて遣つたおかへのしのもりのお目出糖一箱と紅い頬のやうな林檎を入れた籠とが置かれてあつた。

『そんな心配はしなれば好いのに。』

『いゝえ、もつと早く上らなければならんでした。』

馬橋はかう挨拶をした。

新聞社の話や、文壇の話や、初めて家を持つた時の經驗話や、さういふ話を男達にして居る間を、敏子と細君とは女同士にするやうな話を何彼と話した。やがて細君は敏子の腕から子を抱き取つて、

『ほら、御覽なさい。こんな可愛い顔をしてゐる。貴方のお孫さんですよ。』

わざと戯談にこんなことを言つて、清の方へ向けて見せた。

お孫さん！ この一語は餘り一座の心持に伴つたやうにも見えなかつた。清は苦笑するより他に仕方がなかつた。敏子は眞面目な顔をして黙つて居た。

『随分、子供を育てるのは大變でせう？』

その沈黙を破る爲めにかう清が敏子に言ふと、

『えゝ。』

と言つたきりで、敏子は眼を下に落して了つた。

『何うしても初めては大變ですよ。』細君は傍から言つて、『それでも、敏子さんの乳が澤山に出るから、そんなにお困りぢやないでせうが、私の總領の時などは、それは大變でしたよ。夜半でも、枕元に湯を沸かして置いて、泣き出すと、宅で起きてミルクを溶くといふ騒でしたから。』

前に幾度も聞いて知つて居ることを細君は言ひ出した。

流石にいろ／＼なことが思ひ出されるといふ風で、敏子は何となく沈み勝にして居た。藝術にあくがれた若い心が僅かな年月の間に、かうした運命の途を取つて行つたといふことが、敏子にも清にも深いある意味と感慨とを齎らさずには置かなかつた。清の言葉も兎角途絶え勝であつた。

敏子は馬橋に歸る目配せをした。

『まア、好う御座んすよ。何うせ、田舎で何も無いですけど、今、支度をさせましたから。』

かう言つて、二人の暇を告げようとするのを、細君は達つて留めて、其儘茶の間の方へ行つた。

清は言葉を変めて、馬橋に言つた。

『それで、何うしました、結婚の届は？』

『まだ、國から何とも言つて來ません。面倒なものですから、投つて置くと見えるんです。』

『困るねえ！』

馬橋の籍はある田舎の寺の戸籍に入つて居た。幼い頃父を亡つたかれは、其寺で大きくなるやうな不仕合せな運命を持つて居た。母親は再縁して大阪に居た。僧籍から離れなければ、公けの結婚届は出せなかつた。

『早く、誰れかに頼んで、届が出せるやうにして貰はないといかんねえ。放つて置くと、役場の方は好いとしても、子供が學齡になつても、學校に上がれないやうなことになるからねえ。』清はかう言つて考へて、『君達には、まだ子供の問題などさう重大に考へられないでせうけれど、さういふ事情で、あとで困つてゐる人は随分居るよ。』

『早速運ぶやうにします。』

馬橋はかう早口に言つた。

一緒にするなら終生の恨、かう敏子の父は書いて寄越した。清の身にしても、結婚をさせるのは餘り好い心持ではなかつた。それに、馬橋の性格もまだよく飲込めないやうなところがある。正式の結婚を延

して居るのも、何か他に理由があるのではないかといふ疑ひもあつた。

しかし清はそれを顔には現はさなかつた。『本當に、一つしつかり遣つてくれたまへ。過失は過失で、過去は問はないことにして、これから大に眞面目にやつて貰はなくつては……』かう言つて清は若い人達の方を見た。

馬橋は笑ひながら、

『遣れる丈は遣つて見る積です。』

かう言つて、すぐ言葉を續いで、

『けれど何うも貧乏で困ります。働くだけで體が疲れて了ひますから……何うも矢張體が丈夫でないと駄目ですな。』

『まア、然し、そんなにあせつたつて仕方がないがね。』

『まア、遣るだけは遣つて見ます。』

馬橋はかう繰返して言つた。

やがて細君はお膳を運んで來た。さし身に吸物に鹽焼。わざ／＼引留めたほどの御馳走もなかつた。それでも麥酒のコップは添へてあつた。

清は立つて櫛の栓を抜いた。馬橋のコップにも、清のにも聽て彼々と注がれる。辭退する敏子のコップ

プにも半分ほど細君が注いだ。

敏子は子供の襦袢の濡れたのを先程から氣にして居たが、思ひ切つて、『奥さん、濟みませんが、乾いた襦袢の空いたのがないでせうか。』かう言つて、細君が持つて來て呉れたのを借りて、其儘立つて玄關の三疊へ行きにかゝると、

『そこで好う御座んすよ、敏子さん。』

『でも。』

顔を赧くして、馴れない子供を扱ふのを見られるのがきまりが悪いといふやうに、其儘三疊の方へ行つた。

子の泣聲が其處から聞えた。

暫くして襦袢を取換へて出て來たが、子が猶泣き止まぬので、今度は胸を少しひろけて、張つた乳房を恥かしさうに出して、それを子供の小さい口に當て、やつた。子は容易に吸ひつかかなかつた。

『何うも、その位の中が一番取扱が面倒なものですよ。何だか潰れやしないかと思ふやうでせう。』

『本當ねえ、奥さん。』

敏子は細君の方を見て言つた。

敏子の箸を取る間、細君は其子を婢に抱かせた。と、家の子供達は、赤坊をめづらしがつて、庭の方

へ抱いて行く婢の後を跟いて行つた。總領の女の兒は『敏子さんの赤ちゃん！ まア可愛い、』などと言つて、引込ませてゐる手などを弄つて見る。

一重ざくらはもう盛りを過ぎて居た。彼岸に近い日は暖かで、芝草の若い緑は既に美しく萌え出して居た。萬兩の赤い實の鈴生に生つた鉢や萬年青の生々した鉢などが踏石の上に置いてあつた。藍の模様の鮮かに出てゐる手水鉢の水に日の影が綾をなして光つた。庭には小鳥が囀つて居た。

三十八

封筒に杉山常と書いてあつた。誰だか鳥渡思ひ出せなかつた。それが昨年まで沼のある故郷の町に居た小照で、今度漸く此地からてるといふ名でひろめをしたといふことが解つた時には、清は不思議な氣がした。

四五日してから、清は橋があつたり運漕店があつたり問屋があつたりする下町の狭い賑かな通りを歩いて行つた。其處には入口は狭いが大きな座敷のいくつもある土地で有名な料理屋があつた。女中は伴れのないのを聞いて、氣をきかせて、奥深い世離れた六疊の一間に清を通した。

『てる？ 聞いたやうで御座いますけれど……』女中は首を傾けて客の顔を見た。

『まだ、先月出たばかりだつて言ふんだからな。』

『一つ聞いて見ませう。』

かう言つて女中は二階を下りて行つた。

手紙の中にも、『誰一人知る人もない土地とて、心細く暮し居候ま』と書いてあつた。容色だつて好いではなし、年だつて若いのではなし、藝だつて出来るのではなし、かうした東京の場所に來ては、賣れるなどといふことは望まれないことであつた。清は東京の下町の何不足ない商人の家に生れて、娘の時代を零落の運命に遭つた不合せな女のことを考へながら、ほつねんとして獨り巻煙草をふかして居た。てるは芝の家へ午後から出懸けて行つて留守であつた。しかし行つた先の近所に電話があるから、『大急ぎで來るやうに言つてやりました、』と女中は知らせて來た。『お名ざしのお客さんなら、是非待つて戴いて下さいな、』と兼ねて懇意な其の藝妓屋の姐さんは電話口に出て言つた。

電燈が點いて段々日が暮れて行く間を清は退屈して、欄干の處に立つて四邊を眺めたり、廊下を彼方此方と往來したりして居た。瓦葺と物干臺との上に廣く見渡される夕照の空の色は、見る間に段々薄くなつて、近くを通る電車の線の鳴る音が唸るやうにをり／＼聞えて來た。すぐ下には板塀で圍まれた町家の裏の廣場が見えた。

風呂場は花崗石が敷き詰めてあつた。越後訛の風呂番の男が、熱い湯をうめたり脊中を流して呉れたりした。清が久し振りで好い心持になつて上つて來た時には膳がもうちやんと茶湯臺の上に出來て居た。

やがて銚子を持つて入つて來た女中は、清の手にした盃に酌をしながら、

『もう、ぢき参りますよ。』

かう笑ひながら言つた。

小照がその顔を小屏風の蔭から見せて挨拶したのは、それからまだいくらも経たぬほどであつた。『服部さん……私、屹度、さうだと思つた。』かう言つて、入つて來て、女中の傍に坐つた。

女中は席を譲りながら、見ぬ振をして二人の様子を見た。藝者も餘り好い女ではなかつた。それにくりも衣裳も時の流行に後れて居る。はやらない藝者だといふことはすぐ解つた。

二人の間が妙くとも異様に女中の眼に映つた。關係があるやうにもあれば無いやうにもある。別れてからの挨拶などを聞くと、時々改まり過ぎたと思はれるやうな處がある。

『知らせて上げて好いか悪いかと餘程考へたんですよ。でも、あの時あゝお約束をしたからと思つて……でも、本當によく來て下すつたのねえ。』かう言つて、『あの方はお變りなくつて……そら、あのお寺のお方?』

『ウム、達者で居るよ。』

『此頃、彼方に入らつしやることがあつて?』

『昨年の秋、一月ばかり行つて居た。』

『彼處に?』

『いや、寺にさ。』

『其時、彼處にいらしつて?』

『行つたけれど、君は居ないし、病氣だつたから、酒も飲まずに、午飯を食つて歸つて來た。』

『病氣つて? 何うなすつて?』

『少し脚氣で。』

『さう、それはいけませんねえ。』

かう言つて、客の出した盃に酌をする。客は、

『今日は随分待つた……』

『本當にねえ、私、これでも大急ぎで來たんですよ。……屹度、何方か向うでお目にかゝつた人だと思ひましたから……本當に初めての土地で、知つてる方にかうして聘んで戴く位難有いことはありませんねえ。』かう小照は女中に言つた。

女中が下へ行つてから、

『何うだえ、はやるかねえ?』

客がかう訊くと、『實は今日もそれで相談に行つて居たのですがね。』小照は客の方を見て、『何うも此の

土地は方角が私の性に合はないんですつて……折角出たんだし、姐さんも今少し辛抱すればつて言つて呉れますから、せめて半年位居て見ようと思つたんですけれどね、長く居れば居るほど損になるばかりだつて、上手な易を見る人が言ふんですもの。』

『ぢや、もうやめるのかえ？』

『これは内所よ、……田舎に行つてもそんなことを言つては厭ですよ。……公園に出ようと思ふの。』
『公園？……公園よりは此處の方が好いだらうがな。』かう言つた客は、場所に居られずにさうした所に住替をして行くはやらない藝者を氣の毒にもあはれにも思つた。

小説が好きで、『不如歸』や『己が罪』などの話をよくする女であつた。『私のことを書くと、それは可哀相な小説になりますよ。』こんなことを常に言つた。

田舎では掃溜の中に下りた鶴のやうに一時は騒がれたものであつたが、かうした東京の料理屋では、粧飾も態度も著しく見劣りがされて見えた。

田舎に居る時分、商賣上競争する女があつて、一時非常に苦勞をしたことがあつた、神経過敏になつたのを、『氣が變だ』などと噂に立てられたこともあつた。『照ちやんのお座敷は氣が詰つて』などと茶屋の女中も言つた。しかし清は藝者の型にはまらないやうな眞面目な靜かな處が好きだつた。
二人の間には不思議な友情といふやうなものが出来て居た。

『今になつて見ると矢張田舎に居た方が好かつたと思ひますよ。』かう言つて小照は考へて、『彼方に居れば、扇屋の小照で澄まして居られたんですものねえ。』

『それに誰かも居たしねえ。』

客が兼ねて聞いて知つて居る相惚の旦那の話を匂はせて笑ふと、

『服部さん……もうあの事は言はないで下さいよ。若い盛りを田舎に埋れて了つて、そして今時分こんなさまごうして居るのも、皆なあの爲めですもの。』

『其時分だつたね、君を口説いたことがあつたね。』

客は少し酔つて來たので、こんなことを云つて笑つた。

『さうでしたね。』

と小照も思ひ出して笑つて、『普通ならあの時ぎりお目に懸かれなかつたお客さんね、貴郎は。』かう言つて間を置いて、『だつて、あの頃は私、鬚の生えた人が大嫌ひだつたんですもの。それに私、かういふ商賣をして居ても、その時分は氣が小さくつて、それや仕方がなかつたんですからねえ。鬚の生えた男を見ると、それこそ戦慄ひがする位でしたもの。……町の金毘羅様に願をかけて、夜中にお参りに行つて、金毘羅藝者と言はれたのもあの頃でしたねえ。』

『考へると、滑稽さね。あの時分はあれで大眞面目だつたんだからねえ。』

客が笑ふと、

『私も困りましたよ、本當に、あの時は。』

小照も笑つた。

『不思議なもんさね、縁といふものは。』

『本當ねえ。』

かう小照は染々言つた。

『けれども今ぢや駄目だね、もうさういふ氣は起したくつたつて起らない。』

わざとこんなことを清が言ふと、

『随分御挨拶ね。』

と小照は笑つて、『今度は私が振られる番?』

『困らせられる役は僕は御免だ。』

客は盃を小照にさした。

女はそれを干して、

『服部さん、貴郎もおのろけなさいよ。少しは種を持つてるでせう?』

『お聞かせなさいよ。一體、何處なの、貴方のは?』

『そんなことは何うでも好い。』

『何うでも好くはないのよ、聞きたいのよ。』

『まア好いよ、そんなことは、』と笑つて、『いづれ其中つれて行つて、ぢかに會はせてやる。』

『さう、屹度。』

と小照は笑を含んだ顔で客の方を見る。

女中が再び銚子を持つて入つて來た時には、客は酒に酔つた赤い顔をして、茶湯臺の傍に横になつて居た。藝者が頻りに熱心に何か話して居ると、客は面白さうにフム／＼言つて餘念なく聞いて居た。

『……照つていふ字だけ、それでも感心に覺えて居たんですつて。それで先月出た藝者にさういふ名の女があるんだらうつて、彼方此方大騒ぎをして搜したんですつて。私、ある所に出てたんですけれど、貰つて行つて見ると、禿頭が二人。私が入ると『ヤ、小照』と言ふんでせう。一人は松原の金持のお爺さんで、一人は製粉會社の重役なのよ。それから、半玉を二人聘んで、カッボレを踊らしたり、何かして、それは大騒ぎよ。あんなお爺さんになつても、あゝいふことが面白いんだと思ふと、私、可笑くなつて了つた……』

煙草を一服とんと叩いて、

『それでも難有いわねえ、忘れないで、さうしてまで聘んで下さるんだから。』

小照はそれからそれへと話した。田舎に居る時分のことが一番多かつた。田舎の新聞に競争して居た女は悪く書かれたが、自分だけは賞められて出たといふことや、料理屋のお袋さんに惜まれて、泣きの涙で別れて来たことや、此間も土地で評判の紳士にある料理屋で聘ばれて、いろ／＼田舎の話をしたことや、話は中々盡きようとしなかつた。後には段々身の上話にまでなつて行つた。

かれの悲しい閱歴は十四歳頃から始まつて居た。十歳の時に父に死なれ、商賣上の必要から、好まぬながら母は後夫を持つことになつたが、その後夫が何うしても十分に信用が出来ないので、母は財産を皆な自分の名義にして、決してその自由には出来ぬやうにして置いた。繼父と母と幼い娘と、その感情の長い間の衝突は、母が死の病床に就くに至つて、破裂するといふやうな悲しい運命をかれは持つて居た。十四になつたばかりの娘は、死の床にある母親を強ひて説いて、財産書替の書類に調印させようとする繼父の恐ろしい劍幕を見た。また、母が一人娘の爲めに頑固に最後までそれを拒んだ時の凄ましい表情をも見た。

『其時私の心に染込んだ人間の淺ましさといふことが何うしても抜けませんの……』

小照はかう昔を語つて聞かせた。

思ひのまゝにならぬライフはかうした女の社會にも随分多かつた。父の爲め母の爲め、家の爲め

かう思つて金毘羅にお百度を踏んだり、豊川稻荷に斷物をしたりする群は尠くなかつた。ある女は弟が氣が狂つて病院に入つて居るのを、毎月二度づつ車に乗つて新宿の郊外まで見舞に行つた。ある女は力にした兄の肺病で死んだ電報を電燈の明るい賑かな座敷で受取つた。ある女の父親は朝から酒を飲んで管を巻くのを毎日の職業のやうにして居た。

『贅澤はさせなくつても、親に不自由だけはさせたくない。時には旨い酒も飲ませて遣り度い。一年に二二度は温泉にでもやつて保養をさせてやりたい』さうした望もかれ等には達せられなかつた。

時々歸つて行く家は、大抵狭い通りの細い巷路の中にあつた。家と家との間に挟まつた室は暗く鬱陶しかつた。簷には風鈴が音を立て、居たり籠で鈴虫が啼いてゐたりした。土藏の間から射し込む夕日は暑かつた。

さうした家の一軒を清は知つて居た。それは氣の勝つた母親と弱々しい人の好い父親とを持つた女であつた。『私の十三の時よ、父さんと母さんと仲違ひをするのを見るのが厭で、それからかういふものにならうつて言ふ氣を起したのよ。』其女はかう清に話して聞かせた。

其家を出て、少し行つた處に橋があつた。其處から見ると、川には荷を積んだ船が幾艘となく往つたり來たりして居て、汐時の黒い水はたぶ／＼と黄ろい夕日の影を揺かして居た。夕暮の色彩の多い雲が町の通りを派手に見せた。

角に醫師の家があつた。其前を此處等でなければ見られないやうな島田に結つた若い娘が通つて行つた。物を賣る店には、子供等が五六人も集まつて何かガヤ／＼言つて騒いで居た。近所の工場で時間の汽笛が鋭く鳴つた……

ふと氣がつくと、小照は三味線の調子を合せて居た。

例の喧しい流行唄を少し弾いて居たが、客が横になつたまゝそれを聞かうともしないので、三味線を傍に置いて、小聲で獨り唄をうたつた。

『藝者なんて、駄目なもんだな。今少し暢氣な氣分になつてもよさ／＼なもんだ。藝者になつた甲斐に、思ふ存分、男を玩弄にして見るといふ氣分にはなれないものかな。』こんなことを言つて客は笑つて、『何もそんなにクヨ／＼思はないたつて好いちやないか。一體、親だとか、家だとか、兄弟だとか、さういふことは考へないで、今少しハキ／＼することは出来ないものかね。』

『随分ですなえ、服部さんは……人がこんな眞面目な話をしてるのに……』

小照はかう言つて笑つた。

暫くして、二人は一緒に料理屋を出た。二人は並んで平氣で歩いて行つた。小照はキントンの鹽焼だのを入れた折を、『これ、私、頂戴してよ、』と言つて、ハンケチに包んで持つて居た。月の明るい夜であつた。角に電車の停留場があつた。

二人はやがて別れた。

十分後には、清は電車の中で、さうした女のことを考へたり、故郷の沼の畔の家を思つたりする人であつた。

三十九

氣の勝つた母親と人の好い父親とを持つた女は、いつも橋の傍から電車を下りて、細い荖路の奥にある深川の家へ出懸けて行つた。

それは富岡前の自働電話で京都行の禮を清に言つた女であつた。清がその女に再び逢つたのは、まだ風寒い二月の頃で、椎の葉を透して夕日のキラ／＼川に映るのを見るといふやうな一間であつた。をりをり波を立て、小蒸汽の通つて行くのが、繪のやうに其處から見えた。

旦那との手が切れて、再びさうした商賣をしなければならなくなつたその女は、軒燈の並んだ、細い通りの、格子造の家の二階に朝夕を送ることゝなつた。其二階は八疊で、欄干からは、廣い空地を隔て、場末でなければ見られないやうなトタン屋根だの小さい工場の煙突だのが見えた。新しい胴かけを當てた三味線が壁に一挺かけてあつて、大きな鏡臺には、時々丸顔の額の廣い女の顔が映つた。

清元や常盤津を浚ふ三味線の音が其處にも此處にも聞えて、夕方になると、突當りの湯屋から白粉を

眞白につけて毛すぢを長く挿したまゝの女が、だらしなない風をして、ぞろ／＼と出て来る。やがて角の玉突場に明るい電燈がつくと、あたりの料理店や待合に出かけて行く女を載せた車がその細い通りを幾臺も通つて行つた。

其女の居る家には、他に藝者といふものはなかつた。姐さんも居なかつた。主人といふのは年を取つた爺さんで、親類の婆さんが、糞焚や洗濯の世話に来て居た。晝間は爺さんは植木鉢などを弄つて日を暮した。

清は自から自己の心の状態を翻つて見る事が度々あつた。『何うなつて行く心か解らない。』いつもかう思つて、自己の心のかうした徑路を取つて来たことを考へて見た。

『これから何うなつて行くんだらう?』

かうも考へて見た。

かれ自身に取つても、實に驚かるゝ變遷であつた。そして其變遷が極端から極端へと走つて居るやうに見えながら、しかも其の徑路が自づからたどられるやうになつてゐるのが不思議であつた。

『敏子さんが来てから、貴方は丸で變つてお了ひなすつた——』

何ぞと言ふと、いつも細君はかう言ふのが例である。

「かの人が出来てから、家庭が丸で前の家庭とは違つて了つた。それを考へると、私はかうして居られ

ないやうな氣になりますよ。』こんなことも言つた。

『だつて、仕方がないさ。』

いつも清はかう言つて笑つた。決して細君の言葉を否定しなかつた。しかしこの變遷は果して敏子の爲めだらうか。かれはかう一步を進めて考へて見ることもある。寧ろ——寧ろそれよりも、さうした變遷の時に際して、丁度敏子が来たといふ方が正しいやうに思はれた。

其女は何處か敏子に似たところがあつた。眼と眼の間が矢張遠かつた。

昨年清が九州に行つた時、その旅鞆の中に、敏子の其頃の寫眞が一枚入れられてあつた。鹿髪に袴、風呂敷を横に抱へて、スツキリとした風を見せて立つて居た。

何うした機會か、京都の旅舎で、其の寫眞を女が手に取つて見て居たことがあつた。四邊には鞆の中から取出した種々なものが散らばつて居て、簾を透して、暑い鮮かな朝日が晴れやかにさし込んで居た。

『何方の寫眞?』

ちつと見て居た女は、やがて清の方を見て訊いた。

清は黙つて、手を延して、それを取らうとすると、女は、『まア、見せたつて好いちやありませんか。』向うむきになつて、今一度見て、『奥さんのお若い時?……さうぢやないわねえ。奥さんぢやないわねえ、

誰でせう？」

考へる眞似をして、

『本當に何方？』

『まア、好いから……』

『教へて下さつたつて好いちやありませんか。』かう言つたが急に、『解つた、解つた、』と手を打つて、

『女のお弟子さん？』

『まア、好いよ。』

『さうよ、さうよ、それに違ひない。』體を自烈度さうに動かして、向うに居る年増の女の方に向いて、

『お上さん、御覽なさいよ。ほら、これが先生のお弟子さん。』

言ひ懸けた處を、清は手を延して、それを引たくつて了つた。

『随分よ。』女は清の方を見て、『そんなものを持つて歩いて先生も随分甘い方ね……およしなさいよ。

見つともないぢやありませんか。』

『大きなお世話だよ……』

清はかう言つて、笑ひながら、それを書籍の中に挟んで了つた。

フラシテンのその手靴は、途中で雨に濡れたり汗にぬれたりして、歸る頃には、その寫眞にもと、ころ

ところ黄ろい黒い斑点が出来て居た。

深川の女の寫眞も一二枚は貰つて、清は持つて居た。

それは敏子が身を隠す前後であつた。ある日、敏子は清の留守にその書齋に入つて行つた。何氣なく

見ると、其處にカビネ形の女の寫眞が一枚放り出されてあつた。

其女が普通の女でないといふことはそのつくりやら態度やらですぐ解つた。

髪を銀杏返しにして、少し低頭き加減に横向の頬を見せて、手に持つた花を見詰めるといふ姿勢をし

て居た。

敏子は不思議な氣がせずには居られなかつた。今までこの書齋にかうした寫眞などはつひぞ見た例が

なかつた。

敏子はぢつとそれに見入つた。

其處に入つて來た細君は、

『そんな寫眞を内に呉れた女があるんですつて……』かう言つて笑つて、『何うしても、素人とは違ひ

ますねえ。』

眼と眼の間の遠い表情のある敏子は、矢張眼と眼の間の遠い表情のある女の寫眞にぢつと見入つた。

そしてそれを靜かに机の上に置いた。

水が灰色に見える曇つた日もあつた。帆が風を孕んで幾箇となく上流に浜つて行く晴れた日もあつた。水に落ちる河沿ひの家々の灯影の美しい夜もあつた。

橋の袂からは、烟突のある大きな赤煉瓦の建物が正面に見えて、長い橋を渡つて行く車や馬車や人の足音が遠雷のやうに轟き渡つて聞えた。大河を往來する小蒸気は、集る客を載せては、鼠色の烟を立てて其橋の袂の發着所から出て行つた。

汐の満ちたたぶ／＼する鐵納戸色をした水は、始めは岸に並んだ二階家の欄干だの、白壁の土藏だの、瓦屋根の上の物干臺だの、大きな字を書いた穀物問屋の倉庫だのを映して居たが、それが段々騒がしい町の雜鬧から離れて行つて、やがてはトタン屋根や、煙筒や、岸に沿つた路や、船宿の裏窓などを映すやうになつた。

此方の岸から彼方の岸へ漕いで行く渡船には、派手な蝙蝠傘を日にかゝやかせて居る若い女もあつた。白いペンキ塗の腹を見せて勇ましく水を切つて行く短艇もあつた。

小蒸気の中は夕日に明るかつた。其處にはいろ／＼な人が、或は相並んで、或は脊を合せて腰をかけて居た。工女らしいものもあれば場末の商人の細君らしいものもある。腹がけをした職人もあれば島田に

結つた娘もある。其處に大きな靴を待つて乗込んだ男が、俄かに立上つて、「今度皆さんに御披露いたすものは——」と言つて、廉い繪葉書の説明を早口で饒舌り出した。其男の横顔から手にひろげた繪葉書に夕日が赤くさした。

塔や瓦葺や煙突や、それが晴れた明るい空にクツキリと浮出すやうに見える。

長い土手の方に小蒸気が浜つて行くにつれて、後にして來た都の雜鬧が一層明かに其の餘響を傳へて來るやうにも思はれた。

ある發着所から土手に上る路が斜について居た、名物の團子を賣る大きな家の二階の欄干には、女客が二三人此方を見て居た。

小蒸気は其處からまた左の岸に近く浜つて行つた。川は都會を離れて段々趣が變つて行つた。岸には蘆荻や藺や蘆などの緑も見えた。

富んだ人々の別荘が今度は岸から岸へと續いた。大きな立派な二階があつたり、しやれたつくりの離屋があつたり、川に臨んだ小さな亭があつたりした。充分に手の入つた裁込は何處の家も綺麗で、低い扇骨木の垣は見事に刈込まれてあつた。初夏の緑の中に薔薇の紅いのが特に際立つて鮮かに見えた。石垣の下には何の家にも船が一隻づつ繋がれてあつた。

此方の發着所から次の發着所が小さく見えた、その棧橋から、路は田があつたり蘆の生えた川があつ

たりする郊外へと通じて居た。

川に臨んで一軒瀟洒な水樓があつた。其一間から三味線の音が聞えた。

清の姿はをりく其處に見えた。

四十一

馬橋は時々郊外の清の家を訪ねて來た。

『何うも家庭といふものは難かしい面倒なものですな。』

こんなことをよく言つた。

子が生れてから一月と経たない中に、若い人達はもう喧嘩をした。馬橋も敏子も成たけその内輪を知らさぬやうにして居るけれど、それでも何處からとなくさうした話がちよいく耳に入った。『これは私の子ですから私の自由にします。殺すなり何うするなり私の勝手です。』其家の前を通つた或人が、かう敏子の癪癪を立て、居たのを聞いて來て清に話した。

馬橋が來る度に、

『何うだね、此頃は少しは家庭が緒に就いたかね。』

かう清が訊くと、

『まア、何うやら彼うやら遣つて居ます。』

いつも馬橋はかう答へた。

月の明るい夜などそれでも二人して子をつれて遣つて來ることもあつた。清が夜遅く停車場からの暗い道を歸つて來ると、向うから來て摩違はうとした二人連が突然、

『先生。』

と聲を懸けて、

『今までお邪魔して居ましたのよ、……闇に顔を白く見せた敏子は清の顔を覗くやうにして、『先生、酔つて入らしつてね。』』

『どうだ、今一度行かないか。』

『もう遅いですから。』

かう言つて、蛙の鳴く野道を二人は睦じさうに行き過ぎた。その後姿を清は闇に見送つた。

ある時、馬橋は、

『何うも山田君と一緒に居ると、好いこともあるが、面白くないこともありますから、今少し狭くつても、家賃の安い家に引越して別にならうと思ふんですが——』

『何うも面白くないかね?』

『いろんなことがあるんです……』
かう言つて馬橋は笑つた。

『でも、山田君には、君達は随分世話になつたぢやないか。』

『さう思つて、大抵なことは我慢して居たんですけども……喧嘩つて言ふほどのこともないんですけども、此頃少し感情の面白くないことがあるんです。』

『何うしたんだ？』

『何あに、詰らんことです……』

清は笑ひながら、

『矢張、夫婦者の處に獨身者が一人居ては何かにつけて具合が悪いんだらう？』

『さうかも知れません。』

馬橋は苦笑した。

暫くしてから、清は、

『世話になる時はなつても、その事件が一段落がつくと、世話する方でも今までの熱心の度が薄くなるし、此方でもまア不用といふやうな形になるからねえ。何うも一緒に居ては、さういふことが起り易いねえ。』

『何うも困るんです。』

馬橋はかう言つて、少し躊躇して、『何うも面倒臭くつて困るんです。私が社に行つてる間、可怪しなことがあるんですから困つて了ふんです。』

『可怪しいつて、何んなこと？』

『詰らんことです……私の留守の間は、一緒に午飯を食ふにも、何か言ひ出されやしないかと具合が悪くつて仕方がないつて言ふもんですから。』

『何かそんなことがあつたのかえ。』

『別に口に出して言つたといふ譯でもないんですけれど……』

清は山田と敏子との間を考へぬ譯には行かなかつた。

やがて馬橋は山田と別れて移轉した。

『これから新しいライフに入るつもりです。』

其の移轉を知らせて來た時、馬橋はかう眞面目に言つた。

元氣な顔色をして居る時もあれば、非常に沈鬱に陥つて居る時もあつた。その時々状態に由つて、清は若い人達の動搖の多い細かい心理を察することが出來た。

若い人達に取つては、新しいライフは決して楽しい生活ではなかつた。

『先生などでも矢張ライフが辛いことがありますか。』

ある日、馬橋はかう清に言つた。

『それはあるともねえ……』

『何うも私などには刺戟が多過ぎて困るんです……』清の方を見て、『今少しかう落附いて居たい、暢氣にして居たいと思ひますが、何うもそれが出来ない。』

『しかし、さういふ處は誰でも通つて来るんだから。』

『何うもいけません。今少し動搖しないやうになると好いですけれど、』かう言つて、『先生なども矢張さうでしたかしら。』

『それはさうとも……或は君などよりもつと烈しかつたかも知れない。今と違つて、時代がもつと非常に壓制的だつたからねえ。』

『それはさうでしたらうな……』少し考へて、『然し、今の若い者はさういふ壓制的なものが上にないだけに、猶辛いでせうな、自覺して居るだけ猶辛い、何でも勝手なことが出来るだけに、その報酬とか責任とか言ふものはすべて受けなければなりませんから。』

『それは仕方がないねえ。』

清はかう笑つて言つたが、それにしても僕等の若い時代は君方の時代とはもう餘程の差違があるねえ。時々君方の話を聞いたり、することを見て居たりしても、僕等にはもう鳥渡呑込めない處がある。

たとへばラブをするにしても決して君達の遣つたやうなラブはしなかつた。』

『さうですかア……何んな處が違ふんですか。』

『それは鳥渡説明しにくいけれど……感情一方で、消極的で、好く言へば忍耐、悪く言へば今の青年よりぐづぐづしたやうなところがあつた。……その代り感情の綺麗な長所はあつたがねえ。』

『さう、』と馬橋は考へるやうな眼色をして、『さういふ處がありませんね、島崎さんの『春』を讀んでも、さういふ處が見えますからねえ……』急に、『私達若い者の生活を先生にお目にかけたいやうな氣がする。』

『しかし、それはさうなくちやならん譯だ。時代が違ふんだからねえ。』

馬橋も段々調子に乗つて來た。『我々の生活はそれや御目にかけたいやうです。それは随分思切つた、セツバ詰つた生活を送つて居ますからね……此間なども酔拂つて喜劇を遣りましたよ。』

『何う？』

『夕方社に三四人友達が遊びに來て、これから酒を飲みに行かうつて言ふんです。好からうつて言ふので、銀座の正宗ホール——御存じでせう、獨歩が『號外』に書いたところ、あそこに行つたんです。何

でも一時間、二時間位居ましたから餘程飲んだんでせう。ひどく酔つてすっかり感激して了つて、盃を合せたり、一緒に抱き着いたり、泣いたり喚いたりするつていふ騒ぎなんです。……それは随分騒ぎでしたよ、と馬橋は其時を思ひ出して笑つて、『それから何處かへ行かうつて皆で言ひ出して、へ、れけに酔つて居ながら銀座の通りに出たんです。處が其中の一人が夫婦づれに戯談を言つたとか何うとかで、何かぐづく言ひ合つて居ましたが、段々周圍に人立ちがして、あとでは何でも巡査が來たやうでした。私なども酔つて居ましたけれど、無理に其男を引張つて、それでも何うやら彼うやら尾張町の角に來て、電車に乗つたんです。處が乗客の邪魔になるなんて言ふことは眼中にない。貴様は可愛い奴だ』とか「貴様とこれから兄弟にならう」とか何とか言つて、無闇に抱きついて感激するつて言ふ始末なんです。あの時は僕も酔つて居ましたけれど、弱りましたよ、歌よみの園田が、接吻するんだつて、僕に矢鱈に鬚の生えた頬を押附けるんですからな。』

『それは滑稽だつた。』清には若い人達の荒んだ心持がはつきりと判るやうな氣がした。

『皆な困つて居るんでせうな？』

暫くして清はかう訊いた。

『相應に働いては居るんですけれど……皆な貧乏してます。』

『耽溺するからでせう？』

『随分盛に遣つてるやうです。』かう言つて笑つて、『餘り刺戟が強いもんだから、更に強い刺戟を女や酒に求めるつて言ふことになるんでせうねえ……病氣を遣らない奴は一人だつて無いでせう。』

『フム。』

清は頭を振つた。

『それでも眞面目に物を考へる時もあるんだらうねえ。』

『それはあるんでせう……あり過ぎるんでせう。それで却つてさういふことになるんだらうと思ふんですがね。』

『つまり、眞面目なんて言ふことがもう何だか甘過ぎるつていふ風に思はれて來たんだね。』

『さういふ處もあるやうです。それに孤獨の寂しさといふ風な處が、若い者にいろ／＼な業をさせるやうですな。』

『フム。』

清はまた頭を振つたが、『しかし何うも、私などの今の考から言ふと、消極的に過ぎるやうな氣がする。デカダンといふ思想にも、いろ／＼な形式があつて、其人々に由つて其の「あらはれ」が違ふだらうけれど、今少し積極的のデカダンの方式を取つて行けないだらうか。さういへば私達の若い頃のセンチメンタリズム、あれも一方から言ふと、デカダンと言つたやうな處がないでもないからねえ。肉體の損傷

と神経の疲労と感情の誇張と……』

『さうですな……しかし底を割つたやうな處があるにはありますね、今の若い者の思想には——』

『其處が私達のやつたセンチメンタリズムと違ふ所かも知れない。』

其日は何うした機会か、さうした話がそれからそれへと續いた。六月の暑い日がキラ／＼して、縁にかけた青簾に梧桐の緑が揺れた。二人はビールを飲みながら話した。

『何うも私の性質には矛盾した處があつて誤解されて困るんです。』かう言つた馬橋は清の方を見て、

『何處かかうわざと反抗するやうな處があるつて、よく友達からも言はれるんですが、そんな處があるでせうか。』

『さうさね……さう言つたところが少しはあるね。』

『何うも困るんです……自分ではそんな氣はないんですけれど。』

『遠慮なく僕に言はせると、君は鳥渡何處かすます癖がある。今、はやつてる言葉で言ふと、底が抜けて居ない。すつかり自己の真相を人の前に顯はすと言ふやうな處がない。』少し考へて、『しかし自己の真相を其儘に顯はすといふことは餘程難かしいことだがね。』

『さうですか、』とかう物を深く考へるやうな眼色をして、『矢張、幼い頃からの境遇で、知らず識らずの中にさうなつたんですな。』

『境遇つて言へば、今一つかういふ處がある。矢張宗教界で育つた人だといふやうな處がある。君は自分では宗教を捨てたと言つて居るけれど、まだ餘程理想的な處がある。』

『何ういふ風にでせう？』

『さう訊かれると困るがね……行ふといふ氣分よりも欲するといふ念の方が盛んのやうだ。行ふといふ方面では非常に消極的な傾向があると思ふね。』

『何ういふことですか、一寸よく解りませんけれど、』と馬橋は眼を瞬いて、『何うも一體エゴイスチックで困るんです。總ていろ／＼な誤解が其處から來ると思ふんです。』俄かに感激したやうに頭を振つて、

『何うも弱者で困るんです。色々なことを考へるだけ、それだけ弱者だといつも思ふんですけど……これでも年を取れば何うかなるでせうか。』

清はそれには答へずに、

『僕の今までの經驗によると、自脈を取つていろ／＼に懊惱煩悶する人と、自分のことは丸で放つて置いて、外部で生活して行く人と二通りあるやうだね。自脈を取る人に限つて、實行と内部精神と丸で違つた方向を取るのを僕はよく見る。』

『私などは自脈を取つてばかり居て仕方がない方ですな。』

馬橋はわざとらしく笑つた。

話は絶えたり續いたりした。時々清はビールを馬橋のコップに注いでやつた。

『少し眞面目に遣らなければや仕方がないですな。』

突然馬橋はかう獨りで言つて、ビールをグツと飲み干した。

また時には、祈禱をする時のやうに、顔を上に眼を細く深く物を思ふといふ風をして、

『何うも満足が出来ない……矢張底は懷疑に落ちて了ひますな……』少し考へて、『何うも矢張自脈を取つても何でも自分で出て、網を編んで行くより他に仕方がないと思ふと、つくづく厭になつて了ひますな。』

家庭に關しては、

『此頃ではもうつくづく家庭といふことに愛想が盡きました。平凡なことですけれども、ラブと結婚といふ良も解つて來ました。』

理に落ちて話がなくなつて了つても、馬橋はぐづくして居た。ビールを飲むでもなく、話をするでもなく、縁側に置いてある藤椅子に腰をかけたたり、床の間に近い柱に凭りかゝつて見たり、身の置き場に困るといふやうな風をして長く清と相對して居た。そして時々思ひ附いたやうに人生上の議論やら思想上の疑惑やらを提出した。

四十二

馬橋の移轉した家は、四谷から市ヶ谷へ行かうとする坂の上にあつた。三間位の簷の低い家が細い通りに面して幾軒も續いて居る。腰辨や會社員や電話交換局に勤める女などが、毎日朝早く其處から出懸けて行つた。

其家からは子の泣く聲が常に聞えた。

『本當にまア、何うしたつて言ふんでせう。あんなに泣かせて？』近所ではかう言つてよく其噂をした。役所に勤める人の家の品の好いお婆さんは、『でもねえ、母さんがあんなにお若いんだから、お氣の毒のやうでもありますよ。』かう隣の會社員の細君に話した。

婢を慶庵から頼んで置いて見たが、腰を落附けて居るやうなものもなかつた。それに經濟の方にも餘裕がないので、家事は總て敏子一人でしなければならなかつた。飯の炊き方や勝手元は、それでも段々覺えて來たが、襦袢の洗濯から家の掃除、跡仕舞——片時も手から離れない子の世話が中でも一番骨が折れた。時には勇氣を起して、結付におぶつて、洗濯などを遣つて見ることもあるが、お嬢さん育ちの弱い體には、僅かの間でも紐が肩に滅入込みさうになつた。

『少し見て下さいな、餘り泣くから。』

かう突きつけて頼んで見ても、馬橋は長くそれを抱いて居なかつた。

『子供が泣くのを氣にして居たら仕方がない。泣かせて置く方が運動になつて好いつて言ふぢやないか。』

かう馬橋は平氣で言つた。

昔のやうに机に向つて書を読む暇などもなかつた。筆などはもう何日にも持つたことはない。世話女房——女はさうした運命だとはかねて聞いても居り覺悟もして居たが、しかし過ぎ去つた昔が考へられずには居られなかつた。再び繼ぎ合せることも出来ないほどに粉微塵に碎けて行つた二三年前の夢の跡も悲しかつた。

『奥さん……女つて言ふものは皆なかうしたものでせうね。』

思ひあぐんだといふ調子で、かう清の細君に言ふことなどもあつた。

郊外の清の家には、この頃女の弟子が田舎から一人來て居た。敏子も兼ねて其名を雑誌などで見て知つて居た。『非常にうまい處がある。田舎に居て、あれだけ書けるのは珍らしい。』かう清が褒めて居たのを聞いたこともあつた。

名はお國さんと言つた。

『今度來たお國さんは、しつかりした處があるつて、宅でも感心して居ますよ。何、うかがう行くやう

にしたいつて言つて居ますよ。』

細君は其の人のことをかう話して聞かせた。黙つて居る方だが物のよく解る性質の好い人だなどとも言つた。

敏子はそれを黙つて聞いて居た。

毎日、新聞社へ通つて行く馬橋の姿もこの頃では何だか頼み甲斐がないやうに見えて來た。それに、集つて來る友達の無遠慮な話、卑しい女の心理を材料にして、一般の女にまで當て箝めたやうな話——さうした話を得意さうに面白さうに話して居る男が淺ましかつた。

四十三

お國さんがある日その坂の下の家を訪ねて行つた。

敏子の眼には、肥つた、中脊の、まだ田舎言葉の取れない二十一二の女が映つた。馬橋の出勤した跡を、獨り茶の間で添乳をして居ると、表に案内を乞ふ人があつて、顔を出して見ると、まだ逢つたことはないが、其人だとすぐに知れた。

『まア、好く……』

かう言つて迎へた敏子の顔は赤かつた。

縁側にはまだ洗はない襦袢が山をなして置いてあつた。座敷には玩具やら子供の衣類やら新聞雑誌やらが一面に散らばつて居た。勝手元もまだ片づけてなかつた。

『まだこんなに散らしたまゝで、掃除もしないんですから……坐るところもないやうですけど……』
兎に角敏子は座蒲團を勧めた。

兼ねて聞いて居た其人とは思へぬほど違つて居る敏子をお國さんも見た。

髪は亂れて居た。顔は蒼白く、笑を含んだうちにも、何處か神経性の苛々するやうなところがあつた。

寝かゝつて居た子が客が來たので眼を大きく明いて了つたので、敏子はそれを抱き起して、一度かき合せた胸の乳房を含ませながら話した。初めて逢つた人のやうな氣は二人ともしなかつた。

『まア、可愛い、もう笑ひますのね。』

かう言つて、お國さんはあやした。

『本當に仕方がないんですよ。鳥渡も手を離れないんですからねえ。』客の方を見て、『子供つて言ふものは、それは世話なものね……かうして居るばかりで、一日何にも出來やしませんのよ。』

『でも可愛いでせう。』

『可愛いにはそれは可愛いけれど、それよりも手がかゝる方が大變ですから……』

『それはさうでせうね。』

思つたより打解けた客の風に、敏子は段々氣が置けなくなつて來た。文學の話も出れば、近頃ある雑誌に出たお國さんの小説の話も出た。國に居て投書して居た頃の物語は二人を笑はせた。

『私などもう駄目よ。』

敏子は暫くしてかう言つた。

『そんなことがあるもんですか。何かお書きになつて居るんでせう？』

『本當に駄目よ。子供があつては筆など執つてゐる暇はないんですもの……それでも、困つて來るものだから、お伽噺などを書きますけれどね、本當に駄目なのよ。私など一體小説は書けない方の質かも知れません。』

『そんなことはありませんよ。』

『でも、よく言はれるんですもの。』

かうは言ふものゝ、敏子は藝術を捨てる氣はなかつた。女の好奇心から藝術などを志して失敗したと言はれるのがいかにも辛かつた。それに、自分より後に出て來たお國さんの小説が、ズン／＼世に紹介されて行くのも妬ましかつた。

『實際の人になつては本當に駄目よ。』

敏子はこんなことをわざと言つて笑つて、『私、それや何んなに先生から脇に離れなくつちやいけない

つて言はれたか知れなかつたんですけど……矢張さうした心地には却々なれないもんですね。女には出来ないことも知れないわ。』

お國さんは點頭いて見せた。

話に聞いて居ては解らなかつたことがすつかり解つたやうな気がしてお國さんは歸つて來た。別れる時、『本當にこれから一生懸命に勉強しませうねえ。一緒にね、本當にね、一緒にしませうね。』かう言つて堅く手を握つた敏子の眼には涙が閃いて居た。綺麗な感情と暖かい心とはお國さんの胸を動かさずには置かなかつた。お國さんは別れて來た人のことを考へながら、あふちの花の白く咲いた坂を町の通りの方へと出て行つた。

四十四

『一度入らしつて下さい。』

馬橋は幾度もかう清に言つた。

しかし清は行く氣にはなれなかつた。放つて置く方が好いと思つた。『自分達で蒔いた種は自分達で刈るが好い。』かうも思つた。生中にその生活に觸れて行くのは却つて若い人達の平和を破る基にならぬとも限らぬやうな處もあつた。

結んで解けない紛糾をも、時の力は段々に解いて行つた。清はちつとそれを見て居る人であつた。

『今日は大變な處に行きましてね。』

ある日、細君は社から歸つて來た清にかう話しかけた。

『運悪く二人で物言ひをして居る處に邂逅しましてね、今日は。本當に今日位困つたことはない。』かう言つて細君は笑つて、『敏子さんも、あゝなると、随分負けない氣ですからねえ。』

『一體、何うしたんだ？』

『私が行つて見ると、何うも變なのよ。……馬橋さんは奥に蒲團を被つて寝てるし、敏子さんは、蒼い顔をして苛々してゐるんでせう。それに、茶の間には徳利だのお膳だのが一杯に散らばつて居るんですの……。變だと思つたけれど、私、何うしたの？』つて訊くと、奥さん、何方が無理か聞いて下さいつて、かうなんでせう。敏子さん、平生はやさしい聲をして居るけれど、あゝなると、それは随分大變ですかねえ。何處が私が悪いの？ そんなこと言つたつて、酒を飲んで酔拂つて、悪友と一緒になつて遊んで歩くのが貴方の能ですかつて、かうなんですもの。』

『神経が強い方だからな。』

『本當ですよ。何うかしてやしないかと思ふ位でした。かう眼が吊し上つて居るんですもの。』

『そして馬橋は何うして居た？』

『私が行つたもんだから、起きて來ましたがねえ。矢張蒼い顔をして居ました。それでも怒つても居られないものだから、「大變な處を奥さんに見せた」なんて言つて笑つて居ましたがねえ、敏子さんの方は、中々さうさせて置かないつて言ふ風なんですの。何うかして、馬橋さんが一體敏さんは理想家だから駄目だつて言ふと、生意氣を仰有い、先生の口眞似なんかをして、貴方こそ若い年をして、勉強もしないで、酒ばかり飲んで、デカダンの眞似なんか大きらひですつて、かうなんでせう。あれぢや、馬橋さんも黙つては居られませんからねえ。』

『困つたもんだな。』

『本當にねえ——あれほど大騒ぎをして一緒になつて……』間を置いて、『で、仕方がないから、私は中に入つて、いろ／＼なだめて……成るだけ馬橋さんに口をきかせないやうにして、何うやら彼うやら笑つて話をするやうにして來ましたがね……よくあゝいふことをすると見えるんですよ。』少し考へて、

『馬橋さん、泊つて來ることなんぞあるんだと見えますねえ。』

『それはあるかも知れん。新聞に居る人はその位のことは仕方がない。』

『でもねえ、敏子さんにはそれが口惜しいんでせう。これほど盡して居るのに……といふ腹がありませんからねえ。』

『それはさうだらう……』

『それから貴方にも來て見て呉れつて、敏子さんが言つて居ましたよ。先生に一度來て見て貰ひたい。馬橋の遣つてゐる生活は好い生活か悪い生活か見て貰ひ度いつて言つて居ましたよ。』

敏子は何ぞと言ふと、『では先生の處に行つて、何方が悪いか訊いて見ませう。』かう口癖のやうに言つた。馬橋にはそれが不愉快であつた。馬橋に取つては、清や清の細君は遂に親しみ難い人であつた。

『勝手に一人で行つて饒舌つて來るが好いさ。僕と一緒に行く必要なんかあるもんか。』馬橋は面白くないので、つい友達處に行つて酒を飲んだり夜を更かしたりした。

夜遅く歸つて來ると、敏子は長い手紙を書いて居ることなどもあつた。『何處に遣るんだ？』何處に遣つたつて好いぢやありませんか。』こんなことを二人は常に言ひ合つた。

故郷の母の許にやる手紙を敏子は此頃よく書いた。

ある日、馬橋が歸つて來ると、戸緊りが堅くしてあつて、鍵は隣の細君に預けてあつた。

國の母親が上京したので、小石川に出かけて行くといふことが、敏子の置手紙に書いてあつた。

敏子は流石に子を伴れて小石川に行く氣にはなれなかつた。しかし馬橋の歸つて來るのを待つても居られなかつた。敏子はお三輪の許に出懸けて行つて、途中で買つて來た牛乳一合とミルクの饅頭を添へて、『成だけ早く歸つて來ますから、それぢや何うかお頼みます。』と幼兒を頼んで行つた。

搔き上げても搔き上げても髪は亂れ勝であつた。敏子は張り氣味の乳房を氣にしながら、電車の終點から程もない路を、急いでその兄の家へと行つた。

玄關の戸を靜かに明けて、音のしないやうに茶の間に入つて行くと、其處には國から一緒に伴れて來た婢が居て、

『まアお嬢さん。』

と聲を立てた。

母親は二階で嫂と話して居た。婢が知らせに行かうとするのを手で制して、敏子は苦しさに先づ呼吸を吐いた。

母親のなつかしい聲がをり／＼二階から洩れて來た。

それを敏子は暫し黙つて聞いて居た。胸の躍るのが餘所目にもそれと見えた。

肥つた、莞爾した、眼に一種言はれないやさし味のある五十位の母親と、色の蒼白い神經性の亂れた扮装をした娘とはやがて相對して坐つた。いつもなら『母さん！』と懐かしさうに聲をかけずには居られないのだが、今日はさうした氣分にもなれなかつた。敏子は唯低頭き勝に黙つて坐つて居た。髪は薄くなつたのが一番先に母親の眼についた。

「髪は此頃は好いのかえ？」

暫くしてかう母親が訊いた。

「えい。」

敏子は唯點頭いて見せた。

眼には涙が見えた。

庭の松では蟬が啼いて居た。

「置いて入らつしたの？」

傍からかう嫂が訊くと、

「え、」と矢張點頭いて見せた。

「連れて居らつしやれや好いのに、お困りでせう、乳が張つて？」

「い、え。」

嫂はやがて下りて行つた。暫くして上つて來た時には、敏子は眞赤に眼を泣腫して居た。

馬橋に取つては、敏子の母親が東京に來て居りながら、其身が普通の女婚の取扱ひを受けることが出來ないのが不愉快であつた。それは望まれないことだとは初めから知つて居る。さうされては困るから、敏子の籍を清の家に移したのだといふことも知つて居る。しかし今になつては、自分等二人の事件に傍

から物好きに入つて来た清夫妻の心持が異様にも不思議にも思はれて来た。

『勝手にしろ。』

思ひ詰めた揚句、自分からかう投げ出して了ふこともあつた。

『もう、十分に糟まで嘗めて了つたんだ。今になつて何うしようが、そんなことは構ふことはない。』
かう自暴自棄に思ふこともあつた。

其頃、國の方から戸籍に就いての話が出来かゝつて来て居た。金の五六圓も出せば、裁判所の手續もすまることが出来た。馬橋はいつそ結婚届を出して了はうかとも思つた。さうしたら新しい意味が出て来るかも知れぬと思つた。しかしもう二人ともさうした気分にはなれなかつた。

『しかしこれの籍だけは貴方の方に入れて下さい。私の方には持つて行くところがないんですから。』
子に就いては、敏子はいつもかう言つた。

母親の滞在は二月以上に亘つた。敏子は暇を見てはよく出懸けた。後には子を抱いて戸緊りをして行くことなどもあつた。

馬橋はいつも夜遅く酔つて歸つて来た。

新聞社の前借が段々溜つて行つて、其月の俸給は米の代にすら足らなくなつて居た。机の上の硯は塵に埋れて、原稿紙は其處にひろけたまゝになつて居た。

清も敏子の母親には三度逢つた。初めは清が小石川の家へ出懸けて行つた。其時母親は、いろいろ禮を述べた末に、『何うも我儘で仕方が御座いません。まア、何うか今度は御迷惑をかけないやうにと呉々も申しつけて置きましたけれど……旨く参りますことやら、何うやら、危ないもので御座います。』かう言つて笑つた。

敏子と馬橋との此頃の心持も其内段々清にも知れて来た。

二度目には、母親が清の家へ訪ねて来た。其時は敏子も一緒に子を抱いて来た。

清が母親に、

『何だか、馬橋君、此頃非常に煩悶して居るやうですが、母さんが入らつしやつたといふことが何か關係してゐるんぢやないでせうか。』

かう言ふと、母親はしつかりした調子で、

『いゝえそんなことは御座いません……私がこれを何うかしようなどと思つてゐるやうにお考へかも知れませんが、私はそんなことは決して致しませんですから、……私の方では、何うかさういふお世話を二度とおかけ申したくないと、かう思つて呉々もこれに申して居るやうな譯ですから。』調子を和けて、
『所が、何うもあの男が邪推深いさうで……いろく、なことを申すさうで御座いますけれど、此方をさしおいてそんなことは決して申しませんですから。』鳥渡笑ひかけて、『どうも此頃では、不真面目で困る

んださうです。何うも長く續けば好う御座んすけれど。』

かう言つて清の方を見た。

『矢張お父さんは先見の明があつたといふ譯ですね。』

わざと清は軽くこんなことを言つた。

三度目に逢つたのは、母親が今夜六時の汽車で立たうとする日の午後であつた。母親より一足先に、敏子は子をおぶつたり大きな包を持つたりして遣つて来て、

『まだ、母さん来なくつて?』と泣きさうな顔をして居た。やがて母親は來た。

『もう、敏子さん、歸らぬ積で來たんですつて。』かう細君は書齋から出て來た清に言つた。

清は座敷へ行つた。

『一體何うしたんです?』

やがて入つて來る敏子の方を向いて、笑を含みながら清は訊いた。

『だつて、先生、到底駄目なんですもの。』

かう言つて敏子は清の方を見た。

『駄目つて、何ういふ風に駄目なんです?』

『先生は御覽にならないから、よくお解りにならないでせうけれど、此頃はそれは酷いんですよ。家だの、子供などは丸で構ひつけないのですから。』

『面白くないから、馬橋君はわざとさうするんでせう?』

『けれど——』敏子は激して、『わざとそんなことをするつていふ法があるでせうか、一家の主人ぢやありませんか。』

清は笑ひながら、

『それはさうだけれど、さう一概にばかりも言はれないよ。矢張、男の心持つて言ふやうなものがあるからね……』間を置いて、『僕には馬橋がさうする心持がよく解るね。』

『何うしてせう?』

『母様が入らしたつたことなども原因になつて居るんだらうがね……』かう言つて少し考へる風をして、『一體、夫婦とか家庭とか言ふものはさう好いもんぢやないからねえ。忍耐といふことが無くつちや一時だつて成立つて行きやしないよ。』

『先生は御覽なさらないから、さう仰しやるけれど——』

敏子は言ひ懸けて低頭して了つた。

『母様——何うでせう。私はさう思ふんですがね……』清は母親に向つて、『何うも感情に支配さ

れ過ぎると思ふんですがね。『辯解しかける母親を遮つて、『それはさうでせう。間を割く……さういふことはなさらんでせうけれど、何うしても、今の境遇で、時々逢つたり何かすると、何うしてもさういふ邪推は起りますからな……それに、私なども経験がありますけれど、馬橋位の若さで一軒やつて行くといふことは、物質上から言つても大抵ぢやないんです。馬橋君などは年から言へばよく遣つて行く方です。』

『何うもこれも我儘者ですから。』

母親はかう言つて、いろ／＼細かい話をした。

『まア、先生も居らつしやることですから、……いよく仕方がなければ、それは何うにもなりますから、私が歸つてから、今少し容子を見る方が好う御座んせう。』母親は沈着いた調子で言つた。

『とても駄目なんですけど。』

母親が暇を告げて歸つて行つてから、敏子は獨語のやうに言つた。

『でも、餘り早過ぎるからね。』

かう清が笑ふと、

『先生はすぐあ、仰しやるけれど——』考へる様子をして、『だけど、仕方がない。私もさう言はれるわけがあるんですから……けども先生、先生も是非一度来て見て下さい、馬橋が何んな生活をしてる

るか、御覽になればすぐ解りますから。』

『その中行つて見よう。』

しかし清は行く氣はなかつた。

四十五

愈々馬橋と離別したいと存じます。その譯は、とても、私共二人は一緒になつて居られさうもないからです。馬橋は何時でも貴様なんぞに藝術家の心が解つて堪るもんかと口癖のやうに申しますが、馬橋の心では、つまり藝術家の家族は犠牲にならなければならぬと言ふのです。如何にも犠牲にもなりません。しかし馬橋のやうな間違つたものゝ犠牲になるのは私は厭です。まだ今日までこんなことを申上げたことは御座いませんが、その無責任たら、お話にも何にもなりません。

いつでしたかどう無責任なんだねと先生から訊かれたことが御座いましたつけ。どうつて一々は申上げられません。朝から晩まで私達の生活を御覽なすつて始めてわかることゝ存じます。

家族が何んなに困つても、藝術家たる良人自身は仕度い三昧のことをして好いのでせうか。酒を飲んで酔拂ひ、酔に乗じて遊び歩く、其金はあつても、子供の薬價は出すのが馬鹿々々しいと言ふやうなことを言つても好いものでせうか。

そんなのが藝術家ではありませんまい。貧乏するのは私は構ひません。しかし藝術々とそれを口實に不真面目な真似をして歩いて、借金の申譯をさせられて、犠牲呼ばはりをされるのは私は厭です。こんなことは申上げたことはありませんけれど、今月は二圓しか俸給を持つて歸らないのです。そして社に前借が十五六圓もあるといふ事です。友達にも迷惑をかけて居るばかりではなく、子供の病氣の時にも、ヤツと私の本を賣つて診察料や藥代を拵へるやうな始末、——そのまた金を、やれ車代を出せの、やれ酒を買つて來いの、敷島を買へのと皆な遣はせられて了ひました。何しろ質屋へ行く時でも車に乗らうといふ人なんですもの。

馬橋の身を立てたいと思へばこそ私も苦勞をしたのです。それがこんなことでは失望するより他に仕方が御座いません。

序ですから申しますが、馬橋は今度社をやめました。それにもいろいろ事情が御座います。私は酒や女を買ふことばかり覺えて碌々讀書することも出来ない今の境遇よりも、結局浪人しても、質實な生活を送りたいと思つて居ましたから、社をやめることは不賛成では御座いませんでした。しかし女記者を困らせない爲めに犠牲になつて退社すると言ふことが男の意氣地でせうか。

借金をして、人の厄介になつてゐて、そして人の世話をする氣が私には解りません。
今月ももう五日になりますが、馬橋は何うして居りますことやら。

昨日はたまさか家に歸つて居りました。其處へ友達が來ましたが、午後から行く處があるといふのを無理に引留めて酒を出して酔拂ふといふ始末なんです。私も子供も病氣して、ことに私は發熱して苦しんで居りますのに、これから金策に行くから質屋へ持つて行くものを出せと申すんでせう。これまでの經驗で、こんな時に出して無事に歸つた例がないんですから、今日はやめたら好いでせう。私も苦しいから家に居て下さいとかう申しても、言ふことをきかず出て行かうとするのを、無理に追かけて行つて、歸つて貰つて、夕方までそれでも寢ました。三十分ほど子供を見て貰つたら、何んなに苦情を申されましたことか。

で、馬橋も夕方まで前後不覺に寢て居ました。私は少し樂になつたので、朝の中は客で出來なかつた襦袢の洗濯をしたり、晩飯の支度などをして居ますと、其處へ平生親しくしてゐる友達がやつて來ましたから、私は馬橋を起しました。と、何うしたんですか、突然私を打つちや御座いませんか。灯をつけるんですか、それでも私はこらへてかう申しますと、當り前だ！ぬけつ毛のおたんちん！かうなんです。

今から考へて見れば、馬鹿々々しい、怒ることもないんですけれど、突然に打たれては居ますし、それに此頃は何ぞと云へばおかめだの、おたんちんだのと悪口されるので、口惜しくなつてつい言争ひました。と、又外出して金策するといふではありませんか。私はかういふ時には出してはならんと知つ

て居ますから、いろいろ引留めたり争つたりして、終に離別を申し出しましたけれどそれは取合つて呉れません。終には私も焦れ出して、家も何も焼いて了ひたいやうな氣になり、盛にマッチを擦つたり何ぞしたもんです。

でも漸くいろ／＼に申して、一緒に先生のお宅に伺ふことにし、戸外に出て戸緊りを致し、いざ出かけようとする、もう居ないので。通りに出て見ましたが其處にも居りません。引返して又其處等をたづね廻りましたけれど遂に見當らず、止むなく其晩は家に引返しました。さて其翌朝、差迫つた用事の爲め質屋に行かなければならないので、其序に心當りの友達の下宿に行つて見ますと、思つた通り、馬橋は友達と一緒に居ました。

そして京橋に行つて金策して午後一時頃には家に歸るから質屋の方をよくして家に歸つて居ろ、先生の家に行くことは？ と聞きますと、それは歸つた上でよくすると申しますから、私は歸つて参りました。

所が今、夜の四時ですが終に歸りません。此頃は金さへ持てば、何うしても酒を飲まなければ承知しないので、京橋へ行つて、いくらか原稿料を前借して、例の銀座に行き、酔ふと例の感興を仕舞まで追はなければやまれない質ですから、馬鹿な眞似をして歩いてゐる事せう。家族を犠牲にするといふ意味を、そんな氣に思つて居るんですから、とても駄目だと思ひます。

馬橋と別れて後、幸福であらうとも思ひません。何うなることが、私にも解りませんが、今のやうな有様では、私忍びきれません。ヒステリーになつて狂氣するかも知れないと思ひます。

馬橋だつて別れることに不賛成ではないと思ひますから誠に御迷惑ですが、御盡力下さるやうに願ひ上げます。子供の籍のことは私には解りませんから、これも何分よろしく御考へ下さい。先生！ 何か今一度先生と呼ばせて下さい。

十一月六日夜

敏 子

先生おもと

この長い手紙は新聞社の原稿用紙に薄墨で走り書に書いてあつた。處々字が脱けて居たりした。

初冬の晴れた朝であつた。日影が半明けた窓障子から明るくさし込んで、机の上に取りひろけられたこの手紙を鮮かに照した。庭の垣の縁にある茶の花や、紅白の山茶花や、薄霜にぬれた椿の葉や、處々紅葉した楓や、それがすべてくつきりと晴れた空氣の中に見えて居た。

書齋にも庭にも人は居なかつた。

四十六

『新しい女だとか何とか言つても、矢張平凡な幕を打つたね。』何時か西さんがかう敏子することに就い

て言つたことがあつた。清は愈々平凡になつて行く長い物語を読むやうな気がした。

馬橋から清へ宛てた手紙が来たのは、其翌日の夕暮であつた。それには二人は結局別れる方が好いと思ふから、自分から身を引くといふことが二三行簡単に書いてあつた。そして他は萬事敏子から聞いて呉れとしてある。敏子へ宛てた方には、家を疊むに就いての處分がザツとしてあつて、末に、卿等の健康を祈ると大きく書いてあつた。

かうなつては、もう放つて置けなかつた。敏子が病氣の身で子供を抱いて、暗い一間に、懊惱して居るさまも眼に見えるやうに思はれた。あの神經過敏の女は何んなことをするか解らなかつた。

『お國さん、一つ行つて見て下さい。』

かう手紙を見せて清は頼んだ。

『別れて了ふ方が結局二人の爲めにも好いんでせう……とてもあんな風にしていつ迄も暮しては居られないでせうから。』其後度々訪ねて行つたお國さんは、かう言つてすぐ出懸ける支度をした。

風の寒い晩であつた。

お國さんの出懸けて行つた後を、清は一人書齋で机に向つて筆を執つて居た。家の周圍をガサ／＼ところがる落葉の音が絶えずさびしくあたりに聞えた。清はいろ／＼なことを考へずには居られなかつた。かれは書きかけた筆を惜いては幾度か長大息を吐いた。時には筆を持つたまま、頷散をして、ちのちと

ブの灯を見詰めて居たりした。

子供を一人抱へてかうして男に別れて来る敏子も可哀相であつた。此寒い夜を家を捨て職を捨て女を捨て、何處ともなく彷徨つて居る馬橋も可哀相であつた。この二人の間に入つて、進むことも退くことも出来ずに、かうしてランプの灯を見詰めて居る自分の身も可哀相であつた。かれは過去と將來とをつくづく考へた。

『自分が敏子を愛したといふことが、かうした三人の運命をつくる基となつたのは、それは事實だ。自分にも無論責任はある……それは自分も知つてゐる。しかし自分だつてこれに對して、随分多くの犠牲を拂つた。家庭の荒廢、心の荒廢、醫すことの出来ない精神の荒廢……』

かう思つたかれは黯然たらざるを得なかつた。

『誰が悪い？ 自分が敏子を愛したのが悪いのか？』かう自問自答して、『普通の道德——多くの人の常識から見れば、かうして女弟子を愛するといふことが悪いと言ふに違ひない。しかし實際愛したのが呪ふべきことであらうか。愛したのが呪はれるといふよりも、寧ろ愛するに至つた事情——自分と敏子とが偶然相逢ふに至つた縁が呪はるべきではないだらうか。……それに自分は尠くとも馬橋の爲めに盡した。又盡す考へでもあつた。二人の戀人の爲に犠牲になることを敢て辭さなかつた。しかし三人の間にはこれさへ實行が出来なかつたのである。自分と馬橋との間にはかうした犠牲が行はれ得る餘地すらな

かつたのである。』

それからそれへと考へが容易に盡きようともしなかつた。かれは終には筆を捨て、ぢつとして坐つて居た。

落葉の夜はさびしく更けた。

四十七

丘を越えて行つた處に、松林やら畠やら田舎道やらに圍まれて一軒空いた長家があつた。それについて曲つた細徑は落葉に埋れて、踏むとガサ／＼と音を立てた。お國さんと敏子との並んだ姿は、ある朝其處から竹藪や樺や檜の木などの中に低く見える茅葺屋根の百姓の家へと下りて行つた。貸家は其百姓の持家であつた。

『私の家に置くと云ふ譯にも行かない。何處か好い處があるなら、二人で一緒に家を持つのも面白からう。』

かう清が二人に言つた。

『ぢやさういふことにしませうね。』かうお國さんに言つた敏子の顔には新しいライフでも展けたかのやうに生々した色が上つた。

『ぢや、さうしませう。一緒にやりませうねえ。』

お國さんも嬉しさうであつた。

『まア、少しさうして靜かに落附いて、ゆつくり保養するさ……』

清は瘦せた蒼白い敏子の顔を見た。

お國さんは、近郊を散歩した時に、其の松林の中にかし家札の白く浮出すやうなのを見て置いた。かういふ靜かな處に住んだら好いだらうとも思つた。で、二人は一番先に其處に出懸けた。

大家の百姓の入口は、此處等の農家によく見るやうな廣い土間になつて居た。髪を箒のやうにした上さんが、此處等には見馴れない若い庇髪の二人の女を訝かしさうに迎へたが、やがて駒下駄を突かけ、畠に居る主人を迎へに行つた。

大家は三十四五の莞爾した人の好き、うな男であつた。筒袖に股引といふ畠姿で、其儘二人を貸家の方へと連れて來て、裏口から戸を明けて見せた。六疊に四疊半の二間。冬の朝日が窓からさして、松の風に鳴る音が微かにした。

『好いわねえ。』

かう敏子は言つた。

お國さんは井戸の水を汲み上げて見たり、隣に住んで居る人の生活を覗いて見たりした。其處には、

朝日を受けたところに暢氣さうに坐つて、三十近い男が頻りに竹を細かく割る仕事をしてゐた。三毛猫が日向に寝て居たが、お國さんが覗くと、延びをして立上つて、ぢつと此方を見て、そして向うへ行つた。竹を割る鉈の音が絶えず聞えた。

『少し遠いけれど好いわねえ。』

二人はかう話し合つた。家賃の廉いのも好都合であつた。

午後には清がお國さんにつれられて其處へ行つて見た。

『成ほどこれは好い。物を書いたり何かするには持つて来いだ。……僕が借りた位だ。』四邊を見廻して、『かういふ處に居れば、敏子さんの爲にも氣が落附いて好いだらう。まア、子供の處分が定まるまで、此處にぢつとして居るんだね。……貴方は大變だけど、少し世話をしてやつて下さい。』

田舎の町家に育つたお國さんは、勝手元でも裁縫でも何でも出来た。

小石川の兄の家に行つて金を拵へたり何かして、成るべく必要な物は賣らぬやうにして、馬橋と住んで居た家を疊むことに其日は暮れた。

箆寄や火鉢を載せた一臺の荷車は、あくる日の午前、丘から丘をこえて、さびしい松の林の中へと行つた。破れた四目垣を繕つて居る筒袖の大家さんの姿は、車から荷を卸す車力や、襷がけになつて働いて居るお國さんや、常磐木の葉にチラ／＼する日影などの間に繪のやうに見えて居た。

四十八

『コンヤノキウコウデカヘル』

馬橋がかう大阪から電報を打つて寄越したので、人々は今更のやうに周圍を振返つて見た。『今更そんなことを言つて寄越したつて仕方ありませんわねえ。』かう言つた敏子の顔にも動搖が見えた。折角始めた新しい生活がその爲めに破れはしないかとお國さんは心配した。清も二人の羈絆が容易に離れられないのを思はない譯には行かなかつた。

清は一面馬橋の心事を解すると共に、一面これに對する處置の方法を考へる人であつた。乗り出した船はもう行く處まで行かなければならなくなつて居た。

『折角出て来たんだから、後戻りするの愚だ。新しいライフを開くやうにしなければいけないからねえ。』

清はかういふ意見であつた。

清は馬橋の訪問を豫期した。一日は一日と過ぎた。しかし其姿は遂に郊外の家に見えなかつた。『馬橋さん、歸つて来て見て、家が疊んであるもんだから、もう駄目だと思つたと見えますねえ。』暢氣な細石はこんなことを言つた。

肥つた可愛い子を負つたり抱いたりして並んで歩いて行く二人づれの底髪姿は、電車の停留場に行く丘の上やら屋敷町やらに常に見られた。霜の白い朝もあつた。風の林を鳴らす夕もあつた。里川を堰ぎ留めた路傍の物洗場には、大根の白いのが際立つて見える日もあつた。十二月の晴れた日はよく續いた。

別れて来て、一番先に子供のことが心配になつた。子供といふ羈絆を離すことが、敏子に取つては、新しいライフに入る第一歩であつた。馬橋から電報を受取つた當座には、殊にそれが必要なの人々を感じた。敏子は一生懸命になつて、近い田舎に里子にやる口をさがしに行つたり、學校に居た頃親友であつた女に一伍一什を打明けて力を借りようとしたりした。汽車の中で乗合せた子を亡くしたといふ女が、預つて上げて好いと言ふのを頼りにして、本所の場末までわざわざ出かけて行つたことなどもあつた。一時馬橋と一緒に身を隠して居た九十九里の濱の主婦にそれを預けることになつてつれて行つたが、四五日して、泣いてくともお世話が出来ないからと返して來た。

子供は若い母親の膝に抱かつて、莞爾と常に可愛い顔をして居た。「静ちゃん、静ちゃん、」とお國さんがあやすと、躍り上るやうにして高笑ひをした。清の家に抱かれて來ては子供等の大勢集つて騒いで居るのをめづらしさうに見て居ることなどもあつた。

「まあ、そんなに大騒ぎをして里子にやらなくつても好いぢやないか。その中、何處か好い處がある

だらうから。」

かう清は敏子に言つた。

丘の上の家の生活は、二人に取つて珍らしく自由な生活であつた。世を遠くかけ離れたやうな氣になつて女達は暮した。茶湯臺に長火鉢に筆筒。お國さんは机を四疊半の窓障子に向けて据ゑて、其處で雜誌の小説を読んだり、書きかけた原稿の筆を續けたりしてゐた。敏子は片時も傍を離れない子供を相手に、茶湯臺の上に硯を持つて來て、國の母親に遣る長い手紙などを書いた。

四十九

敏子は蒼い顔をして居た。

生々と張切れるやうに肥つたお國さんに比べては、かうも違ふかと思はれるほど體も弱々しさうに見えた。何ぞと謂つては、黙つて物を考へた。

朝は二人はいつも遅く起きた。お國さんが筒袖を着て井戸端に出る頃には、隣では竹を割る音がもう聞えて居た。

隣の男は村のもので、兄が嗣いで居る本家が其近くにあつて、白髪の汚ないお婆さんが時々遣つて來るといふことも段々解つて來た。笊を編むのが職業で、豫定の藪が出来上ると、それを車に載せて問屋

へ運んで行くのが時々見えた。尺八を吹くのが好きで、夜は其音が壁を隔て、聞えた。

『そらまた始まつた。暢氣ねえ。』

と女達はいつもかう言つて笑つた。

湯屋はかなり遠かつた。二人は夕日の餘照にか、やいた丘を越して、新開町の中程にある新しく出来た湯によく遣つて來た。そして歸りにはいつも清の家に寄つて行くのを例として居た。二人は湯上りの綺麗な顔を光らせながら、洋燈の明るい茶の間で、遅くまで樂しげに話して行つた。『もう十時よ、』と敏子が心地よけに眠つた子を膝にしたまゝ、柱の時計を見てかう言ふと、『さうね、餘り遅くなると、あの森の處が怖いわねえ、』などと言ひながら、お國さんは猶熱心に話し込んで居た。

『今の若い人は違ひますねえ。こんなに遅く、あの淋しい處を歸つて行くんですね。』かう細君は感心した。

闇の夜にはそれでも提灯を借りて行つた。

大家にも近所の人にも二人の何者か、長い間解らなかつた。通つて來る路傍の人々も、子供をつれた鹿髪の二人づれを訝しさうに見送つた。ある時などは酒屋のお用聞らしい男が、すれ違ひながら、

『あれか、あれは初谷の女だよ、』などといつれの男に言つて居るのを二人は聞いたこともあつた。初谷とは二人の住んで居る土地の小字である。

『初谷の女は面白いねえ。』それを聞いた清はかう言つて笑つた。

それから二人はよく揃つて町へ出かけた。三越に呉服物を見に行つたり、貯へて置く品物を買ひに行つたりした。時には、夕方からわざ／＼寄席に出かけて行くことなどもあつた。義太夫や芝居の話を敏子はかなりよく知つて居た。踊の話などとして聞かせた。

ある日、町の通りを歩いて居た二人は、電燈の笠や器具などを賣つてゐる店の飾付の前に足を停めた。懐中電燈が眼を惹いたのであつた。

『買ひませうか。』

『買ひませう。』

二人はかう言つて、店の中に入つた。番頭から詳しく説明を聞いて、かれ等は懐中電燈を買つた。で、その懐中電燈は停留場から丘の上の家まで、いつも闇の路を照らした。

野は段々寒くなつて行つた。霧の深く籠めた朝は、朝日の影が金色をなして彩られた。木枯の吹く夜は、松の嵐が潮のやうに鳴つた。二人は新しい年をこのさびしい幽棲に迎へた。

五十

その正月には、田舎の寺の山崎が遊びがてら久し振で遣つて來た。敏子が歸つて居るといふ話は妙な

からずその心を動かしたやうであつた。

『まア、左様かねえ……』

深く感じたやうな調子で、『歸つて居るのかね。あれほど思つても、矢張駄目だつたかねえ。』

『皆なきまつた型の中に入つて行くんだねえ、君。……いくら躁いたつて、立派なことを言つたつて、自然には敵はないねえ。』

『本當だねえ。』

山崎は頭を振つた。

『戀だとか何とか言つて、大騒ぎをした處で、それは何にもなりはしないのさ。時は忽ちにして過ぎて行つて了ふのさ……』山崎の顔を見て『僕等の時代だつて、矢張さうだつた。夢中になつて、女の愛を求めて歩いたものだつた。僕等の最初の「詩集」、あれが出来た時分のことを考へると、本當に君、隔世の感どころぢやないねえ。あの詩集を田邊と一緒に瀑神に獻するんだなんて言つて、華嚴の瀑に投げ込んだことがあつたが、その田邊はもう此世の人ではないし、西は西で、此頃では、國家の爲めなどいふことを考へて居るやうになつたんだからね。……』

『不思議なやうな氣がするねえ。』

『不思議！ 本當に不思議と言へば不思議以上だ。それからまたちやんと未來が平凡に定つて居ると

言へば定つて居るのだ。平凡な中の不思議、不思議の中の平凡、さう言つたやうな深い細かい處があるねえ。自然はちやんと其行先を見せて置いて、そして刹那の上では、人間に見すかされないところがあ

る。』

『だから刹那を重んずるといふ考になつて來るんだねえ、君。刹那の快樂なり悲痛なりに意味があるので、それから來る結果などは何うでも好いといふ譯になるんだねえ。僕等にしても、戀とか女とか言ふものには、かなり知識がある積だが、いざとなると盲目だからねえ。』

『それで人間は生きて居られるのさ。禪でもさういふ境を説いて居るよ。』

『敏子などを例に取つても矢張さうだ。行く先はちやんと解つて居る。しかし解つて居るからと言つて、その統一された自然の法則とか何とか言ふやうなものに由つて支配されては居ないからな。いくら經驗したものが口を酸くして言つて聞かしたつて、説いて聞かせたつて、私達も經驗しないでは解らないからと言つて新規時直しをいつもやる。そしてその新規時直しが平凡な、型にはまつた、人間が何千年來巻返しくり返し遣つて來たものであらうが何うだらうが構はない。それが自分の經驗だと言つて、それを唯一の證券にして生きて居る。』

『觀照的になるといふことは、生氣を失ふ最初なんだ。やつて居さへすれば、其處に生々とした火が

燃えてるんだ。』

『さうだ。』

深く冥想するやうな顔をして清は言つた。

二人は暫し黙つた。

『しかし、我々も我々の後に續いて来た「新時代」の人々について、さういふ風に見えるやうになつたんだからな、もう……』清はかう言つて、昔を思ひめぐらすといふ風をした。

『早いものさ、もう我々もまご／＼すると老人の部に打込まれるんだよ。』山崎はかう言つて笑つたが、其處に清の長女の明けて十一歳になるのが入つて来たのを見て、

『もう、此人達の時代もすぐだ！』

『本當だ。親に打明けて言はれないやうなことが出来るのももうすぐだ。』少し考へて『我々はつまり始めもなければ終りもない大きな物の中で、ある力に操られて生存して居るやうなものだねえ。今になつて、過去と將來とを考へて見ると、ライフの無意味の中の意味と謂つたやうなことがいくらか解るやうな氣がするよ。』田邊が死ぬ前にかうして死んで行くと思ふとつく／＼悲哀の情に堪へないと言つたが、僕等もそれを考へると、厭世ならざるを得んねえ。事業だとか戀だとか名譽だとか言つたつて、それこそ砂の上に書いた字だ。』

『それで居て、多くは事業とか戀とかさういふ現實に苦んだり悶えたりして、大抵は居るんだから面白いのさねえ、人間は。』笑つて見せて、『或は人間と言ふものは、思想などといふものを捨て、本能で生きて居る方が眞實なのかも知れない……少くとも、さうした方が、君のいふ自然には近いねえ。何も我は現象に顯はれるものから矛盾だとか不合理だとかを捜し出して、それをぐ／＼言ふには當らない。敏子さんのことだつてさうだ。成るやうにしかかつて行かなかつたぢやないか。君はいろ／＼に先生の爲めに謀つたけれど、少しもそれに影響された形はないぢやないか。』

『本當だ。』

清は黙つて過去を顧みた。暫くして、

『しかし影響されざる影響——何と言つて好いかな、縁と言つて好いかな、運命と言つて好いかな、さうしたものが間接には働いて居ることは事實だねえ。人間と言ふものは糸から糸を引張り出して、それが段々結んで解けなくなるやうなところがある。』

『矢張佛の言ふ煩惱の一つから、因縁が起つて來るんだねえ。』

かう言つたが、山崎は急に、

『それで、何うするんだ、敏子さんは？』

『何うするつて、矢張一人で藝術をやらうつて言ふんだらう！』

『難かしいもんだね。』

『それに、子供が居るからね、それを何うかしなければ何うすることも出来ない。』

『今、一緒に居るのかえ。』

『さうさ。』

『自分で育てるつていふ譯にも行くまいねえ。』かう言つて山崎は考へて、『何んな子だえ？ 女の兒だつたねえ？』

『さうだ……一寸可愛い兒だよ。』

『僕が育て、やらうか。』

突然かう山崎が言ひ出した。

『でも……君が育て、呉れるつて言ふ譯にも行くまい。』

笑ひながら清がかう言ふと、

『何に、構はんさ。今一人位子供がなくつちや淋しくつていけないんだよ。君の子供を一人呉れると好いけれど、君は中々手離しが出来さうにもないからねえ。』

山崎の言ふことは満更戯談でもなかつた。

子供一人しかない山崎夫婦に取つては、田舎の寺の庫裡は餘りに廣く餘りにさびしかつた。此前にも

『何うだ、此次生れたら僕の方に寄越さなくつてはいかんよ。』清の細君は兄からこんなことを度々言はれて居た。

其日の午後清は山崎と一緒に、その丘の上の家を訪ねて行つた。穩かに晴れた日で、赤や青で飾り立てた初荷の馬が、ボツケリボツケリ野の道を通つて行くのが見えた。

五十一

三月のある寒い晩、さびしい田舎の停車場を下りた敏子とお國さんは、其處に一臺あつた車を頼んで行李やら支那鞆やらを載せて貰つて、大通りの方からぐるりと山崎の寺の山門の方へと行つた。

庫裡の戸はもう閉めてあつた。西風は凄じく裏の森を鳴らして、薄暗くなりかけた境内には、ところどころ落葉が吹寄せられて居た。

やがて出て戸を明けた主僧は、其處に夕暮の空氣に白く浮出した二人の女の笑顔を見た。

『おや……』

かう言つて、『大變に早かつたですね……明日かと思つた。』

二人はやがて奥の廣い間に通された。其處にはもう洋燈が薄暗く點いて居た。負つて居た子を敏子が下ろすと、俄かに眼を覺して聲を立て、泣き出した。『よし、靜ちゃん、泣くんぢやない。泣くと怖

いよ。』かう言つて、敏子はそれを抱上げて、胸をひろけて乳を飲ませた。

二人は一月ほど前に東京を出て、お國さんの故郷に近いある温泉場に行つて居た。其處は雪の降り積る寒い／＼處であつた。敏子の神経衰弱、それにお國さんも故郷に少し用事があつた。『そんな寒い處へ風邪を引きに行くやうなもんだ。温泉なら、熱海とか湯河原とかもつと暖かい處がいくらもあるぢやないか。』かう其時清は留めた。しかし二人は何うしても其處に行きたかつた。『雪國の温泉も見たいわ。それに、先生は私は寒い處は嫌ひだと思つて居らつしやるけど、私の故郷の町だつて、冬は矢張雪の中ですもの……』敏子はかうも言つた。二人は其處に一月を過して、歸りには山崎の田舎の寺に寄つて、其處で子供を寺の人達に馴染ませて置いて来ようといふ心組であつた。

子供の籍は、山崎が歸ると、すぐその手續を済して寺の子にしてつた。

二人は世離れた雪の中の温泉場で自由な氣儘なしかし退屈な一月を送つた。其處では快活な面白い中年の筆行商に懇意になつたり、近くの町の富豪の細君と往來をしたりした。女ばかりの旅を怪まれて、刑事につけ狙はれたこともあつた。戸外には雪が深く／＼積つて、川を隔てた向う側の町との交通も全く絶えて了ふ時もあつた。二人は湯に入ること、菓子を食べふことと子供を相手に遊ぶこと、それより他には用事もなかつた。『今、靜ちやんを二人で押へて鬚をかいてやつて居る處です。清に寄越した長い手紙の終にお國さんはこんなことを書いた。』

お國さんは今日汽車の中で、大きい鞆を持つて長い説明をする行商の男から、蛸だの猫だの蜘蛛などの針金細工の玩具を買つて來たが、それを袂から出して、其處に來てきまり悪さうに坐つて居る寺の娘に遣つた。娘は喜んで箱の蓋を明けて、一つそれを手に持つて見たが、蛸の手だの足だのがブル／＼と動くので、氣味悪がつて、すぐそれを疊の上に落した。

『怖くはないのよ。』

敏子が傍から言ふと、其處に火鉢を運んで來た主僧は、『何ですな、それは……。好いものを貰つたね、お前。』かう言つて、自からも手に取つて、『これはめづらしいもんですな、』と動かして見て笑つた。

お國さんは、包の中から温泉土産の煙草箱を續いて出した。

『これは難有う、こんな心配はしない方が好いのに。』火鉢の火を積直して、『寒かつたでせう。お當んなさい。』

『いゝえ、ちつとも寒くありませんの。寒い處から來たんですから。』

『本當ねえ、餘程違ふのねえ、梅があんなに咲いてるんですものねえ。』

かう敏子も言つた。

丁度其處へ出て來た肥つた脊の高い上さんは、田舎訛の言葉で、女達に型のやうな挨拶をしたが、やがて敏子の抱いて居る子供の方を覗くやうにして見て、『お、好いお子さんですことねえ！』

上さんは丸で見違へるやうな敏子を見た。其時分の鮮かなはつきりした眼、房々した髪、人の心を惹かなければ置かないやうな姿はもうなかつた。

夕飯は汽車の中で済して来た。でも、まアと言つて上さんは勝手の方へ行つた。

滅多に點けたことのない五分の臺洋燈に、室は見違へるやうに明るかつた。赤い絨をかけて雑誌や小説を載せた机や、英語の金縁の書籍のすらりと並んで居る本箱などを後にして、主僧は女達の白い顔と相對して坐つた。

『明日は一つ本堂を掃除して、其處に住はれるやうにして上げませう。鳥渡世間離れがして好い處ですよ。……淋しいには少し淋しいけれど。』

主僧がかう言つて笑ふと、

『いゝえ、淋しい方が却つて好いんですよ。……ねえ敏子さん。』

笑ひながらわざとお國さんが言つた。敏子は寺の淋しいのを前から氣にして居た。

『まア、あんなことを。』

敏子はやさしく睨めて見せた。

主僧が笑ひ懸けて手を出して子供を抱かうとすると、靜子は泣き出して母親の方へ體を反した。これに限らず、一度九十九里に遣られてから、片時も母親の膝を離れないやうになつた。お國さんでさへ顔

を反けた。

やがて饅頭を盛つた膳が其處に並んだ。主僧は酒を一本つけさせてそれを女達に勧めた。しかし女達は盃を後へ遣つて注がせなかつた。酒量の無い主僧の顔はやがて赤くなつた。

其處を片附けて、床を敷いて、二人が寝たのはもう十時過であつた。お國さんの丈夫さうな呼吸を聞きながら、敏子は長い間眠られずに居た。裏の森を渡る西風の音が吼るやうに物凄く聞えて、隙間の多い雨戸はガタ／＼と鳴つた。

翌朝、敏子はお國さんに言つた。

『貴方は本當によく寝られるわね。』

『何うして?』

『何うしてつて……床に入るとすぐ眠つて了ふんだもの。本當に苦勞がなささうね。』

『だつて、床に入れば寝るのが當り前ぢやなくつて。』

お國さんが笑つて言ふと、

『だつて、本當に憎らしいやうよ。私、寝られなくつて困つたわ。明方とろ／＼した位よ。貴方と私とでは體からして違ふのね。』

『でも、貴方のやうに苦勞性でも困るわね。』

長い間閉め切になつて居た本堂の一間の戸は、やがて明けられて、明るい朝の日影が流るゝやうに射し込んで来た。其處は六疊で、隣には本尊の如來様が色の褪めた古い幔幕のかけに寂然として立つて居た。賓頭顛や位牌や燭臺や木魚や鉦や——さうした古びた者ばかりの中に、つい此頃檀家から寄進したメリンスの鉦の打敷の色模様だけが新しく鮮かに眼に立つた。女達は其處に夜具だの行李だのを持つて来て、何彼と自炊の支度をした。机だの洋燈だの火鉢などは主僧が自から運んで来て貸して呉れた。さびしい寺が俄かに賑かになつて来た。笑ふ聲や子供をあやす聲などが中庭を隔て、常に聞えた。

五十二

庫裡から本堂に通ずる長い廊下には、時々軽い草履の音がして、庭の常磐木の葉の間に女達の着物の色彩などがチラ／＼した。主僧が朝など行つて見ると、七輪の土瓶からは白い湯気が上つて、お國さんがいつも一生懸命に朝飯の支度をして居た。

『お汁でも上げませうか。』

『いゝえ、拵へましたから。』

お國さんは味噌を澤山磨つて置いて、毎朝二人が用ゆるだけを熱湯に溶かして簡単にそれを拵へて食つた。鹽引、干物なども町から買つて来て置いた。鹽の吹いた朝の目刺は口が歪むほど鹹かつた。

二人はよく出懸けた。停車場前に郵便を出しに行つた次手に野を逍遙つて見たり、湯に行つた歸りにさびしい寒い町を歩いて見たりした。其頃、町の外れの芝居小屋に女役者が乗りこんで來るといふ噂があつた。ある晩、二人が野菜を買ひに八百屋に入つて行くと、其處に居た中年の男が突然、『芝居はいつから始まるんけえ、』と聲を懸けた。二人は始めはそれは自分達に言つたのとは氣がつかかなかつた。

『お前さん方、芝居の衆ぢやねえんけ。』

これで始めて女役者に間違へられたことが解つて、二人は噴飯して笑はずには居られなかつた。溝に沿つた暗い道を歩きながら『女優に間違へられるなぞ本當に日記に特筆大書して置いても好いわねえ。一代の名譽ねえ。』敏子はこんなことを言つて、轉けるやうにして笑つた。

田舎の町の人々には、並んで歩く二人が尠くとも異様に見えたに違ひなかつた。『西洋人！ 西洋人！』などと敏子を指して言つた鼻洩垂しの子守もあつた。

敏子はをり／＼目に立つほど鬱ぎ込むことがあつた。温泉場に居る頃にもそれが度々あつた。お國さんも始めは氣にして、いろ／＼慰めて遣つたり何かしたが、後には例の癖と打捨て、置くやうになつた。お國さんなどの知ることの出來ない苦勞の種が敏子にはあつた。

『もう好いぢやありませんか。そんなに思つたつて仕方がないわ。本當に新しい生活を始めませうよ。』それでもお國さんがをり／＼見かねてかう言つて慰めると、『しかしあつたことはあつたことね。あつた

ことをなくする譯には行かないわね。追恨と言ふことは辛いものねえ。』
かう敏子は言つた。

ある日、夕日のさびしく射した本堂の前の廣場を見ながら、敏子は子供を抱いて立つて居た。蒼白い顔には、例の憂鬱の色が見えた。

葉の無い銀杏の樹の向うに、不動堂の屋根が見えて、其の高い縁には、子守が二三人遊んで居た。其處に、お國さんが来て、

『何うかして?』

『いゝえ……』

敏子は強ひて笑つて見せたが、しかし眼には涙が満ちて居た。やがてしんみりした調子で、

『運命と言ふものは不思議なものねえ。馬橋が小さい時、矢張お寺で育てられたんですつて。この子もかうして此處で育てられるつて言ふのはねえ。』

お國さんも黙つて了つた。野には夕暮の雲が通つた。

五十三

二人が寺に居る間に、清も一度東京から訪ねて行つた。

其時も久喜あたりで乗客は大抵下りて了つて、二等室には清の他に足利あたりの商人らしい男が一人乗つて居るばかりであつた。夕日が車内に一杯にさし通つて、遠くに碧い山を見せた平野は、村やら林やら川やらを段々其前に展いて見せた。其日は何故か清の胸は微かな顫動を感じて居た。敏子に就いての追懐が漣のやうに靜かに綾をなして打寄せて來た。

物語の中の一章を一頁々と翻して居るやうな氣がして仕方がなかつた。かれはこれから先の一章を考へた。また最後の一章のいかに結ばれて行くかをも想像した。青年からの親友で且つ妻の兄なる山崎が、かうして敏子の子を養育することになつたといふことも一種不可思議の縁のやうに思はれた。

その敏子の子が成長した後のことも想像しない譯には行かなかつた。かれは五年後、十年後に此の同じ線路の汽車に乗つて行く自分を頭腦に描いても見た。『誰れか好い配偶者がありさうなものだが……しかし前の男とさういふ風になつて居てはねえ。』こんなことを言つたある友達の言葉も繰返された。

『何うも不思議な縁さね、君。』

清が言はうとしたのを山崎が先づ言つた。

女達が本堂に自炊生活をして居るさまも、清の眼には意味深く映つた。町に使ひに行くお國さんや、子供を抱いて出て來る敏子などを、このさびしい田舎寺の本堂に置いて見ることが、清にはめづらしくもあり面白くもあつた。

『自由にやる方が好いさ。自由といふものは辛いものだが、一方にはまた面白い處があるものだよ。かういふ自由は藝術をやるものにはばかり許されるんだ。普通の女には容易に得たいたつて得られない境でせう。』

山崎に向つては、

『日本にもあゝいふ女の藝術家がドシ／＼出来るやうだと好いねえ。』
などと言つて笑つた。

敏子は成たけ子供を乳から離すことに心を碎いて居た。むづかつて膝に抱かつて来るのをわざと吐つて見たり、乳房に唐辛子をつけて飲ませない工夫をして見たりした。しかし寺の上さんには容易に馴染みさうにも見えなかつた。何方かと言へば主僧には抱かれて行つた。

『子供の好きな人は矢張解るのね。』
お國さんはかう言つた。

しかし寺の娘には段々馴れて行つた。廣い庫裡の玄關で近所の娘達とお手玉などを取つて居ると、其處へお國さんはわざと子を抱いて來て置いて行つたりなどした。後には娘の脊にも負はれて行くやうになつた。

西風の吹く日が多かつた。朝は好い日和で、今日こそ大丈夫と思つたやうな日にも、午後からは大抵

林が潮のやうに鳴つた。夜は敏子は一人では決して本堂の一間に留つては居なかつた。お國さんが庫裡に來ると、いつでもその跡について來た。『だつて怖いんですもの。よく貴方怖くなくつてね。』いつもかうお國さんに言つた。

清が歸るといふ日、二人はこれから利根川へ行つて見るなどと言つて、頻りに辨當を拵へて居た。

五十四

寺の本堂に一月以上も居た女達は、いよ／＼歸る支度をした。子供のすつかり馴染むのを待つて居ては際限がない。別れた當座は少しは難かしくうが、もう物を食ふやうになつて居るから、如何やうにも世話が出来る。主僧も上さんもかう言つて子供を引受けて呉れた。

若い母親と子供との別れは辛さうであつた。毛の薄い坊主頭を撫でて眼を赤くして居ることもあれば、抱いたまゝ柱に凭り懸つて、一人物思はしさうにして居ることもあつた。『矢張、別れるのは辛いものねえ。』わざと平氣な調子で言つても、其言葉の底には深い悲哀が籠つて居た。

お國さんは成るだけ其話をしないやうにして居た。
前の日にすつかり荷物を包んで、それを停車場に運んで行つて、汽車便に託した。歸る時、二人はふとこんなことを語り合つた。

『さうしませう。』

『さうしませう。』

『その方が汽車で唯歸るよりは面白いわねえ。』

『そして矢張一日で行けるんでせう。』

『それはさうよ。』

二人は利根川を汽船で歸るといふことをふと思ひついたのである。此間、散歩に行つた時、土手の上から溶々と流れる利根の流を見て、『いゝわねえ、船で歸ると好いわねえ、』と言つた。二三日前には、此處から一里半位しかない河岸まで汽船が毎日上つて來るといふ廣告の札を町の通りの板塀で二人は見た。

翌日の午前の八時頃には、寺の庫裡の入口の前に車がもう二臺來て待つて居た。一番先にこつそりと本堂の方から廻つて出て來たのは敏子であつた。暫く庫裡の壁の處にその瘦せた姿と白い顔とを見せて聞耳を立て、居たが、家の内から豫期した子供の泣聲も聞えて來ないので、いくらか安心したといふ風でホツと呼吸をついた。

其處にお國さんがソツと出て來た。

『何うして？』

『大丈夫よ。』

『お上さんが連れて行つて？』

『え。』

お國さんは點頭いたが、『行きませう。』かう言つて逸早く車に乗つた。敏子も急いで車に上つたが、其處に主僧は奥から出て來て、『それぢや、心配しないで……』かう言つて別れを告げた。車は朝の晴れた日影を受けて、梅の花の盛を過ぎた垣に添つて山門の方へと出て行つた。敏子は後に子供の泣聲が聞えたやうな氣がした。

一時間後には、二人は利根川のある河岸に立つて居た。其日は水の都合で、汽船は其處まで上つて來なかつた。二人は他の四五人の乗客と一緒に、端舟で一里ほど下の河岸まで下らなければならなかつた。やがて端舟はお納戸の色をした繪のやうな流を靜かに下つて行つた。

行着いた河岸には、一雙の汽船が薄い黄い煙を煙突から出して、白いペンキ塗の船體を四邊に浮出す様に見せて居た。

清が二十五六年前に故郷から都へ出て行つたのも矢張この河岸からであつた。其時分の大きな椎の樹は、今も其河岸の埠頭の傍に濃い深い蔭をつくつて居るが、その下の茶店に、女達は汽船の出るまでの間を、子供の話などをしながら待つて居た。

郊外の丘の家に二人が歸つて來てからまだ一週間も経たないある朝、雨戸を明けたお國さんは吃驚して聲を立てた。其處には馬橋が立つて居た。

『えらい處に居るんですねえ。』

かう言つて、馬橋はヅカ／＼上つて來た。思ひ定めたやうな眼色をして、遁けたつて遁がさないといふ風が明かに見えて居た。お國さんは何うすることも出来なかつた。

暫しは誰も口を開かなかつた。敏子は着物を着替へに四疊半へ行つた。お國さんは蒲團などを疊んで押入に入れた。馬橋は立つて居た。

『何うして、貴方、來たの？』

やがて敏子は四疊半から出て來てかう言つた。眞面目な顔であつた。

『少し話があるんだ。』

馬橋は顔を赤くして笑つて見せた。

『今更、こんな處に來て下すつちや困りますわねえ。』

『だつて、仕方がないさ。』

馬橋はかう言ひながら坐つた。また笑つて見せて、

『それにしてもえらい處に住んで居るんだねえ。誰に言ふでもなくこんなことをまた言つて、『随分捜した——』』

一座はまた黙つた。

『でも、困るわ、……話があつたつて何だつて、こんな處に來て下すつては……』

暫くしてかう言つた敏子の聲はやゝ和かにやさしくなつて居た。

『話があるなら、何故先生の方へ仰しやつて下さらないの？』

『先生に言つたつて仕方がない。二人のことは二人で處分するより他には方法がないから。』

『もう處分したんぢやなくつて？』

『まだしやしないさ……。一時、都合で別居して居たばかりだもの。』

『ぢや、何故あんな手紙を寄越したの？』

馬橋は鳥渡行詰つたが、『だつて、我々の間はあんな片々たる手紙で物事が定まるやうな間ぢやないんだから。』

『ぢや、何故、黙つて今まで放つて置いたの？ 子供のことが決つて了ふまでも何故黙つて放つて置いたの？』

『だつて居る處が解らんし、……それに何處かへ行つてゐたんぢやないか。』

お國さんは何だか二人の對話を聞いて居るに忍びないやうな氣がして、勝手元の方へと行つた。人のことだが、敏子の應對振も何だか甚だ齒痒いやうにも思はれた。あれほど愛想をつかして自分から出て來た徑路とも甚だ伴はなかつた。

飯を炊きながら、障子を隔て、お國さんは二人の對話を聞いて居た。話は絶えたり續いたりした。高い聲が俄かに低い聲になつたりした。『今一度、考へ直して呉れ。』かう言つて間を置いて、『二人の間はこんなことで終つて了ふやうなものぢやなかつたんだから。本當に僕も悪かつた。今度は眞面目に今一度新しい生活に入つて見たいと思ふから。』かうした男の言葉が女の低い聲に交つて聞えた。

かと思ふと、途絶えたやうに二人は黙つて了つた。

『YesかNoか。それを本當に聞かせて呉れ。……今すぐつて言ふ譯ぢやない。二三日の中で好いから。』低い會話の中に、男のかう言つた言葉が際立つて聞かれた。

馬橋は三十分ほどして歸つて行つた。お國さんは支度の出來た朝飯をやがて其處に持出して、茶碗やらお椀やらを茶湯臺の上に並べた。

お國さんも敏子も黙つて居た。

朝飯の中途で、敏子は突然、でもねえ今更ねえ。そんなことは出來はしないわねえ。』

『兎に角、先生の處へ行つて相談をする方が好いわ。』お國さんはかう勧めた。

五十六

『さう度々遣つて來るやうでは、何うか處分しなくつちやいかんね。……今更歸つて行かれる譯ぢやなし、貴方の爲めにも折角新しいライフが展げようとしてゐる矢先なんだから。』

清がかういふのを聞いて、敏子は低頭して黙つて居た。それは馬橋が來たといふ話をしてから三度目の訪問の夜であつた。初めの時は時を移さず、といふ簡単な端書を敏子は出した。すると馬橋は其翌日またすぐ丘の家に遣つて來た。女の心を動かす爲めにかれば總ての力と總ての方法とを用ゐることを辭さなかつた。別れて居た間の日記を持つて來て讀んで聞かせたり、孤獨のさびしさをつぶさに語つて聞かせたりした。NoNoNo三度まで女は端書を書いた。しかしその效は遂になかつた。『いくらNoと言つても決してこの心は捨てない。また假令何んな處に身を隠さうとも、屹度さがし出してあとをつけずには置かない……。一生屹度あとを追廻すから、その積でお出なさい。』後にはかう脅迫がましいことも言つた。かと思ふと、子供の誕生日を下宿屋の二階で泣いて暮したことなどを染々とした調子で話して聞かせた。容易に解け難い二人の間柄を人々は思はない譯には行かなかつた。

『貴方の思つて居らつしやることをすつかり先生に仰しやつて了ふ方が好いわ。』

傍に坐つて居たお國さんはかう言つて敏子の方を見た。
敏子はそれでも黙つて居た。

清はやゝ激した調子で、『だつて、今更そんなことを言つて居られる場合ではないぢやないか。僕は何も考へることもないと思ふがね……』調子を變へて、『それとも貴方に今一度歸らうつて言ふ氣があるんですか。』

『いゝえ、さうぢやないんですけれど……』

『ぢや、何もそんなに考へる必要はない。貴方さへ決心がついて居れば、馬橋が毎日遣つて來たつて差支がない譯だ……。それは本當に貴方の爲めを思つて僕は言ふんだがね、さういふ場合に決斷がつかない爲めに、悲劇に陥つて行く人は世の中にいくらもある。現に僕はいくらもさういふ例を知つて居る。一度決心した以上は、迷はずに、どん／＼先に出て行かなくては仕方がない。』敏子の顔を見て、『それに一體、馬橋もけしからんさ。女の處にすぐに出かけて行くと云ふ法はない。つまりかういふことをするのは本能を利用しようといふ一種の性質がするんだ。僕は馬橋をつく／＼見て居た。最初貴方を誘つたのも、二度目に貴方をつれて身を隠させたのも、皆な今度の遣り口と同じだ。本能——人間の弱點を利用するやうな處が無意識であるかも知らないが、馬橋の性質の何處かにある、貴方もよく考へなくてはならんと思ふね。』

敏子は斜に坐つて、俯向勝にして居た。口は利かないが、時々點頭いて見せた。顔には血が上つて居た。

『本當に、敏子さん、すつかり考へて居ることを言つて了ふ方が好いですよ。』長火鉢の傍に居る細君も傍から口を挿れた。

暫く沈黙が續いた。

『それとも何か譯があるんですか？』

暫くして清はかう訊いた。その話があつてから、清は再び敏子を眞中にして馬橋と並び立つて居るやうな心持がした。子供を離した後にかういふことが湧いて出ようとは全く思ひ懸けなかつた。

『いゝえ、別に——譯つて無いんですけども、』敏子は少し言淀んで、『可哀相に思ふには思ひますの。』

私の爲めに、馬橋が一生を犠牲にするやうなことがありやしないかと思つて。』

『そんなことを考へて居ては駄目だね。』かう言つた清の聲は強かつた。『今更、そんな理想がかつたことを言つてる時ぢやないぢやないか。まだ目が覺めて居ないのですね、貴方は。……一體考へて見てもわかる。子供をあゝいふ風に處分して置いて、そしてそんなことが出来るものですか。』

『それは私も考へて居ますの。』

『一體、貴方は理想家でいかん。今少し冷靜に考へて見なくつては仕方がない。』

かう言つた清の顔には激した感情が歴々と見えた。

また沈黙が続いた。

押寄せて来る種々の感情が一座の人々の胸から胸へと電線のやうに傳はつた。馬橋の細い複雑した心理が敏子を通して強い深い反響を清の胸に與へた。

馬橋は敏子が全く『清の敏子』になるのを見て居るに忍びなかつた。中年に對する青年の反抗といふこともかなり力強く交つて居た。其處に解くべからざる暗闘黙闘があつた。

『第一、不眞面目だ。』やがてかう言つた清の聲は更に一層の鋭さを加へて居た。『子供を育てるのが面倒だからと言つて、生活が充分に出来ないからと言つて、夫婦喧嘩をして一時別れて、子供の處分が附いたから、また一緒になる。こんな暢氣なことはありやしない。これで世の中が渡つて行かれるなら何も心配することがありやしないさ。』わざと冷かに笑つて見せて、『僕には、その了簡が解らない。』

『さういふ譯でもないんでせうけれど。』
お國さんが見兼ねて傍からかう言ふと、

『さういふ譯ぢやない？ それなら、何もそんなに心配することはないぢやないか。馬橋が遣つて来て困れば、それを避ける方法はいくらもあるぢやないか。僕の家に来て居てもよし、一時國に歸つてもよし、國に顔が出せなければ何處か田舎に行つて居てもよし、何も困ることは少しもないぢやないか。』
敏子が黙つて居るのを見て、『兎に角、今一度歸るやうなことがあるならば、僕はもう其巴渦の中に入る

のは御免だ。さうなれば、僕と貴方がたとの間は路頭の人だ！』

敏子は點頭いて見せた。

『本當に、よく考へて見て、すつかり決心した處を話してお了ひなさる方が好いですよ。』

細君がかう言ふと、

『それはねえ、奥さん、私だつて、一緒にならうつて言ふんぢやないんですの。唯、度々遣つて来て困りますもんですからねえ。』

『馬橋さんも困つた人ね。』

一座はまた黙つた。洋燈が明るく一間を照した。敏子の顔には心の動搖が明かに見えた。

『女が男に一度節操を許した以上、それが一生の運命となるものだといふことを私はつくづく考へすには居られないねえ。』

暫くして清はこんなことを言つた。

其夜は十時過まで話して居た。しかし遂に纏つた話もなかつた。兎に角、小石川の兄さんの處へ行つて、今夜のことを話して、相談して見るといふことになつた。清の意見は歸國説であつた。迷つてはいけな。折角出て來た新しいライフを捨て、後戻りするやうな愚は取らない。決斷が肝心だ。かうしたこと
を清は繰返して言つた。

敏子は多く口を開かなかつた。顔も蒼白かつた。歸る時、『それぢや、先生、兎に角明日小石川へ行つて相談して來ますから……。いろ／＼御心配をかけてすみません。』かう言つて、清の顔を見て、そして別れをつけて行つた。夜は暗かつた。

お國さんも敏子も長い間黙つて歩いた。

五十七

一夜、雨が盛に降つて居た。

十一時が打つたので、もう寝ようなどと言つて居ると、垣の外で、

『奥さん、奥さん。』

と呼ぶ聲が雨の音に交つて微かに耳に入つた。

『あれ、お國さんだよ。』

細君は返事をして置いて、直ちに婢に裏門の戸を明けさせた。やがて傘にばら／＼と雨の當る音がして、着物を高く端折上げたお國さんの顔が、一枚明けた雨戸の縁側の處に白く見えた。

『敏子さんが居ないのですがね。』

『敏子が居ない？』

思はずかう反問した清の聲は高かつた。細君も眼を睜つた。

『私、今朝姉の處に行つて、今歸つたんですが……。戸が閉つて、家内が眞暗なんですの。私のあとで敏子さん出かけて行つたにしても、もう十一時ですからね、歸つて居ない譯がないんですが……。それに鍵は敏子さんが持つて居るんですし。』

人々は黙つて四邊を見まはした。

『小石川へでも行つたんぢやないか。』

『何うですか……。それなら、此處に寄つて何とか一寸言つて行きさうなもんですがね。』

『それもさうだな、』と清は考へて、『戸は何處も明いてないのですか。』

『何處か明いて居るかも知れませんが……。私何だか怖くなつて、急いで來ましたの……。そんなことではないでせうけれど。』

死——自殺。かう言ふことが俄に人々の頭に上つた。

『そんなことはないだらう。』かうは打消したもの、矢張清にも多少はその心配があつた。

また暫く黙つた。雨の傘に當る音が耳立つて聞えた。

『まア、お上がんなさいな。』始めて氣が附いたといふやうに細君は闇の中に立つてるお國さんに言つた。

お國さんは雑巾で汚れた足を拭いて、やがて洋燈の明るい室へ上つて來た。其顔は蒼白かつた。

『一體何う言ふんです？』

改めて清から訊かれて、お國さんは一伍一什を繰返して話した。馬橋の處に行くやうな素振は今迄にも更になかつた。『まさか馬橋さんの處に行つたんぢやないでせうと私は思ふんですが……私には何うもさう思はれない。』お國さんはかう言つた。

人々はまた死といふことを考へた。敏子の平生の神経性から推すと、そんなことはないとも斷言されなかつた。

暫くしてから、清は、

『馬橋の處に行つたに相違ない。……それに相違ないと思ふけれど、念の爲め今一度、行つて見て呉れませんか。そして家に鍵がすつかり懸つて居るか何うだか見て來て呉れませんか。家に何うかして居るんなら、鍵がかゝつてゐることはないだらうから。』かう言つて、室の一隅に坐つてゐる婢に向つて、『お前、お國さんと一緒に行つてやれ。』

雨を衝いて二人の出て行つた間を清はぢつとして居られなかつた。立つて見たり坐つて見たりした。敏子の青白い神経性の顔が見えるかと思ふと、眼の下つた馬橋の笑顔が見えた。死ぬことなどはない。それはない。『馬橋の處へ行つたに相違ない。』かう繰返して思つたが、急に、『馬鹿な奴だ！』と口に出して

言つた。

それからぶつつりと口を噤んで、火鉢の縁に肘を立て、頬杖をして、傍からいろ／＼なことを言ひかける細君の言葉も耳に入らないといふ風をしてゐるが、やがて急に立上つて、次の間に敷いてある蒲團の上に長く身を横へた。深い／＼長大息の其處から洩れて來るのを細君は聞いた。

三十分ほどして女共は歸つて來た。清は其の氣勢を聞くや否、すぐ夜着を跳ねのけて立つて行つた。矢張鍵が外からかけてあつたとのことであつた。

『さうですかねえ。矢張馬橋さんの處へ行つたんですかねえ。』人の心の不思議に眼を睜るやうにしてお國さんは言つた、

戸外には雨がザン／＼降つて居た。

五十八

敏子はその日の午前鍵を大屋に預けて、お國さんが歸つたら渡して呉れと言つて、風呂敷包を抱へて出て行つたといふ。

馬橋の下宿に行つて居るといふことも二三日して知れた。

『さうですかねえ、矢張行つたんですかねえ、私などにはさういふ心持がまだ何うしても解りません。』

お國さんはかう繰返して言った。

『何うせ、また、苦勞するのに定つて居るのにねえ、敏子さんも損な人ねえ。』

細君も傍から言った。

『それは、何うせ、苦勞するに定つてゐるのさ……。しかし巴渦の中に入つて居るものには、そんなことは考へて居られないからな、さういふ風に熱して來ると、後のことも何も考へて居られなくなるかな。』少し考へて、『一體敏子の性質がさうなんだ。其處にあの女の一生の悲劇があるんだ！』

清の頭脳には新たに敏子のことの繰返して考へられた。馬橋の遣口に就いては、かれは一時は尠なからず激しても見たが、しかしもう以前のやうな烈しい感情は起つて來なかつた。唯、敏子に對しての深い悲哀と同情とが湧いたばかりであつた。時の力といふものが黙つてしかも有効に人々の上に働いて居るのを染々と清は感じた。

二三日——一週間——かれは戀の燃えたり消えたりするのをつくづく獨り考へて見る人であつた。毎日通ふ路傍の花園には、遅咲の沈丁花がまだ微かに匂つて居た。

かれはまた周圍を振返つて見た。其前に展けられた人生のパノラマ——それがあつた處は分明と見え、ある處はボンヤリと霞に包まれて見えた。ある人の心理とある人の心理とがある場合に相觸れて、其處に一種の空氣が出來て來るといふことも考へた。馬橋が敏子に別れてさびしく暮して居る間の煩悶は、

少なくとも嫉妬憎惡の煩悶であつたことを想像してかれは微笑した。

丘の家に残して行つた道具を馬橋が取りに來たのは、それから十日ほど経つてからであつた。馬橋は例の袴を穿いて、車をつれて來た。『それは貴方がたの道具だから、持つていらつしやるのは好いが、一應先生の方へ斷つて下さい。』お國さんはかう言つて、容易にそれを渡さなかつた。すると、馬橋は、『そんな面倒臭いことを言つたつて仕方がない、私のものだから、私が持つて行くに文句はない。』馬橋は車夫に命じて、無理にもそれを運び出させようとしたので、お國さんはつひにそのするがまゝに任せた。お國さんは汚ないバケツの一箇残つて居たのをもわざと其車に載せて行つて貰つた。

其晩、お國さんは清の家へ來て其話をした。

『愈々最後の幕も濟んだね。』

かう言つて清は笑つた。

しかし三人の間にはまだ一つ問題が残つて居た。それは寺に置いてある子供の問題であつた。

清は其時から其子供に對して一種の憎惡と愛憐とを感じて來た。平行線は猶續いた。

田舍教師

田舎教師

一

四里の道は長かつた。其間に青縞の市の立つ羽生の町があつた。田甫にはけんげが咲き、豪家の垣からは八重櫻が散りみだれた。赤い蹴出を出した田舎の姐さんがをり／＼通つた。

羽生からは俵に乗つた。母親が徹夜して縫つて呉れた木綿の三紋の羽織に新調のメリンスの兵兒帯、俵夫は色の褪せた毛布を袴の上にかけて、梶棒を上げた。何となく胸が躍つた。

清三の前には、新しい生活がひろげられて居た。何んな生活でも新しい生活には意味があり希望があるやうに思はれる。五年間の中學校生活、行田から熊谷まで三里の路を朝早く小倉服着て通つたことももう過去になつた。卒業式、卒業の祝宴、初めて席に侍る藝妓なるもの、嬌態にも接すれば、平生難かしい顔をして居る教員が銅鑼聲を張上げて調子外れの唄をうたつたのを聞いた。一月二月と経つ中に、學校の窓から覗いた人生と實際の人生とは何處となく違つて居るやうな氣が段々して來た。第一に、父

母からして既にさうである。それに周囲の人々の自分に對する言葉の中にもそれが見える。常に往來して居る友人の群の空氣もそれづくに變つた。

ふと思ひ出した。

十日ほど前、親友の加藤郁治と熊谷から歩いて歸つて來る途中で、文學のことやら將來のことやら戀のことやらを話した。二人は一少女に對するある友人の關係に就いて先づ語つた。

『さうして見ると、先生中々御執心なんだねえ。』

『此間まではそんな様子が少しも無かつたから、何でも無いと思つて居たのさ、現に此間も「大いに悟つた」つて言ふから、ラヴの爲めに一身上の希望を捨て、はつまらないと思つて、それであきらめたのかと思つたら、正反對だつたんだね。』

『Fwanno。』

『不思議だねえ。』

『此間、手紙を寄越して、「余も卿等の余のラヴの爲めに力を貸せしを謝す。余は初めて戀の物うきを知れり。しかして今は此ラヴの進み進まんを願へり、Physicalなしに……」なんて言つて來たよ。』

このPhysicalなしにといふ言葉は、清三に一種の刺戟を與へた。郁治も黙つて歩いた。

郁治は突然、

『僕には君、大祕密があるんだがね。』

其調子が輕かつたので、

『僕にもあるさー！』

と清三が笑つて合せた。

調子抜けがして、二人はまた黙つて歩いた。

少時して、

『君はあの「尾花」を知つてるね。』

郁治はかう訊ねた。

『知つてるさ。』

『君は先生にラヴが出来るかね。』

『いや、』と清三は笑つて、『ラヴは出来るか何うか知らんが、單に外形美として見てる事は見てるさ。』

『Aの方は？』

『そんな考はない。』

郁治は躊躇しながら、『ぢや、Art for Art』

清三の胸は少しく躍つた。『さうさね、機會が來れば何うなるかわからんけれど……今の處では、まだ

そんなことを考へて居ないね。』かう言ひかけて急にはしやいだ調子で、

『もし君が Art に行けば、……やうやうな、僕は丁度小畑と Miss N とに對する關係のやうな考で、君と Art に對するやうになると思ふね。』

『ちや僕は其方面に進むぞ。』

郁治は一步を進めた。

清三は今、俾の上で其時のことを思ひ出した。心臓の鼓動の尋常でなかつたことをも思出した。そして其夜日記帳に、『かれ、幸多かれ、願はくば幸多かれ、オ、神よ、神よ、かの友の清きラヴ、美しき無邪氣なるラヴに願はくば幸多からしめよ、涙多き汝の手を以て願はくば幸多からしめよ、神よ、願ふ、親しき友の爲めに願ふ、』と書いて、机の上に打伏したことを思ひ出した。

それから十日ほど経つて、二人は其女の家を出て、士族屋敷のさびしい暗い夜道を通つた。其日は女は居なかつた。女は浦和に師範學校の入學試験を受けに行つて居た。

『何んなことでも人の力を盡せば、出来ないことはないとは思ふけれど……僕は先天的にさういふ資格がないんだからねえ。』

『そんなことはないよ。』

『でもねえ……』

『弱いことを言ふもんぢやないよ。』

『君のやうだと好いけれど……』

『僕が何うしたつていふんだ？』

『僕は君などと違つて、ラヴなどの出来る柄ぢやないからな。』

清三は郁治をいろいろに慰めた。清三は友を憐みまた己を憫んだ。

色々な顔と事件とが眼に映つては消え映つては消えた。路には榛の疎らな並木やら、庚申塚やら、畠やら、百姓家やらが俾の進むまゝに送り迎へた。馬車が一臺、後から來て、砂烟を立て、追越して行つた。

郁治の父親は郡視學であつた。郁治の妹が二人、雪子は十七、しげ子は十五であつた。清三が毎日のやうに遊びに行くと、雪子は常に莞爾として迎へた。繁子はまだほんの子供ではあるが、『少年世界』などをよく読んで居た。

家が貧しく、到底東京に遊學などの出来ぬことが清三にも段々意識されて來たので、遊んで居ても仕方がないから、當分小學校にでも出た方が好いといふ話になつた。今度月給十一圓でいよく羽生在の彌勒の小學校に出ることになつたのは、全く郁治の父親の盡力の結果である。

路の傍に小さな門があつたと思ふと、井泉村役場といふ札が眼に留つた。清三は俾を下りて門に入つ

た。

『頼む。』

と聲を立てると、奥から小使らしい五十男が出て来た。

『助役さんは出て入らつしやいますか。』

『岸野さんかな。』

と小使は眼をしょほく／＼させて反問した。

『あゝ、さうです。』

小使は名刺と視學からの手紙とを受取つて引込んだが、やがて清三は應接室に導かれた。應接室と謂つても卓や椅子があるではなく、がらんとした普通の六疊で、粗末な瀬戸火鉢が中央に置かれてあつた。

助役は肥つた脊の低い男で、縞の羽織を着て居た。視學からの手紙を見て、『さうですか、貴郎が林さんですか。加藤さんから此間其話がありました。紹介状を一つ書いて上げませう。』かう言つて、汚い硯箱を取寄せて、何か頻りに考へながら、長く黙つて、一通の手紙を書いて、上に三田ヶ谷村村長石野榮造様といふ宛名を書いた。

『それぢやこれを彌勒の役場に持つて入らつしやい。』

二

彌勒までは其處からまだ十町ほどある。

三田ヶ谷村と謂つても、一ところに人家が固つて居る譯ではなかつた。其處に一軒、彼處に一軒、杉の森の陰に三四軒、野の畠の向うに一軒といふ風で、町から来て見ると、何だかこれでも村といふ共同の生活をして居るのかと疑はれた。けれど少し行くと、人家が兩側に並び出して、汚い理髪店、だるまでも居さうな料理屋、子供の集つた駄菓子屋などが眼に留つた。ふと見ると平家造の小學校が其の右にあつて、門に三田ヶ谷村彌勒尋常高等小學校と書いた古びた札が懸つてゐる。授業中で、學童の誦讀の聲に交つて、をり／＼教師の甲走つた高い聲が聞える。埃に汚れた硝子窓には日が當つて、處々生徒の並んで居るさまや、黒板やテーブルや洋服姿などが微かに透して見える。出入の時に生徒で一杯になる下駄箱の邊も今はしんとして、廣場には白斑の犬がのそ／＼と餌をあさつて居た。

オルガンの音が微に講堂と覺しき邊から聞えて来る。

學校の門前を俵は通り抜けた。其處に傘屋があつた。家中を油紙やしぶ皿や糸や道具などで散らかして、其中央に五十位の中爺がせつせと、傘を張つて居た。家の周圍には油を布いた傘のまだ乾かないのが幾本となく干しつらねてある。清三は俵を停めて、役場のあるところを此の中爺に訊ねた。

役場は其街道に沿つた一固まりの人家の中にはなかつた。人家が盡きると、昔の城址でもあつたかと思れるやうな土手と濠とがあつて、土手には笹や草が一面に繁り、濠には汚ない錆びた水が椗や椎の大木の影を帯びて、更に暗い寒い色をして居た。其濠に沿つて曲つて一町ほど行つた處が役場だと清三は教へられた。かれは此處で俵代を二十錢拂つて、俵を捨てた。笹藪の傍に茅葺の家が一軒、古びた大和障子に御料理をば切うどん小川屋と書いてあるのがふと眼に留つた。家の周囲は畑で、麥の青い上には雲雀が好い聲で低く囀つて居た。

彌勒には小川屋といふ料理屋があつて、學校の教員が宴會をしたり飲食に行つたりするといふことを兼ねて聞いて居た。當分は其料理屋で賄もして呉れるし、夜具も貸して呉れるとも聞いた。其處にはお種といふ綺麗な評判な娘も居るといふ。清三は四邊に人の居なかつたのを幸ひ、通り懸りの足をとめて、低い垣から庭をのぞいて見た。庭には松が二三本、櫻の葉になつたのが二本、障子の黒いのが殊に際立つて眼についた。

垣の隅には椿と珊瑚樹との厚い緑の葉が日を受けて居た。椿には花がまだ二つ三つ葉がくれに残つて見える。

此邊の名物だといふ赤城おろしも、四月に入ると全く止んで、今は野も緑と黄と赤とで美しく彩られた。麥の畑を貫いた細い道は、向うに見えるひよろ長い榛の並木に通じて、其間から役場らしい藁葺屋

根が水彩畫のやうに見渡される。

應接室は井泉村役場の應接室よりも綺麗であつた。其處からは吏員の事務を執つて居る室が硝子窓を透して分明と見えた。卓の上には戸籍臺帳やら、收税帳やら、願届を一纏めにした書類やらが秩序よく置かれて、頭を分けた瘦削の二十四五の男と、五十位の頭のはけた爺とが何かせつせと書いて居た。助役らしい鬚の生えた中年者と土地の勢力家らしい肥つた百姓とが頻りに何か笑ひながら話してゐるが、をり／＼煙管をトン／＼と拍く。

村長は四十五位で、痘痕面で、頭は半ば白かつた。此處あたりによく見るタイプで、言葉には時々武州訛が交る。井泉村の助役の手紙を讀んで、巻き返して、『私は視學からも助役からもさういふ話は聞かなかつたが……』と頭を傾けた時は、清三は不思議な思ひに打たれた。何だか狐につまゝれたやうな気がした。視學も岸野も餘り無責任に過ぎると思つた。

村長は暫く考へて居たが、やがて、『それぢやもう内々轉任の話も定つたのかも知れない。今居る平田といふ教員が評判が悪いので、變へるつて言ふ話は鳥渡聞いたことがあるから、』と言つて、

『一つ學校へ行つて、校長に逢つて聞いて見る方が好い。』

横柄な口の利き方が先づわいかれの矜持を傷けた。

めての世間への首途、それがかうした冷淡な幕で開かれようとはかれは思ひもかけなかつた。

一時間後、かれは學校へ行つて、校長に逢つた。授業中なので、三十分ほど教員室で待つた。教員室には掛圖や大きな算盤や書籍や植物標本やいろ／＼なものが散らばつて亂れて居た。女教員が一人隅の方で何かせつせと調物をして居たが、始め一寸挨拶した限りで、言葉も懸けてくれなかつた。やがてベルが鳴る。長い廊下を生徒はぞろ／＼と整列して来て、『別れ』を遣ると其儘、蜘蛛の子を散らしたやうに廣場に散つた。今迄の靜謐とは打つて變つて、足音、號令の音、散らばつた生徒の騒ぐ音が校内に満ち渡つた。

校長の脊廣には白いチョウクがついて居た。顔の長い、脊の高い、何方かといへば瘦せた方の體格で、師範校出の特色の一種の『氣取』が其態度に歴々と見えた。知らぬ振りをしたのか、それとも本當に知らぬのか、清三にはその時の校長の心が解らなかつた。

校長はこんなことを言つた。

『ちつとも知りません……しかし加藤さんがさう言つて、岸野さんも御存じなら、いづれ何とか命令があるでせう。少し待つて居て戴きたいのですが……』

時宜によればすぐにも使者を遣つて、よく聞亂して見てもいいから、今夜一晚は不自由でもあらうが役場に泊つて呉れとのことであつた。教員室には、教員が出たり入つたりして居た。五十位の平田とい

ふ老朽と若い脊廣の關といふ准教員とが廊下の柱の處に立つて、久しく何事をか語つて居た。一人は時時此方を見た。

ベルがまた鳴つた。校長も教員も皆出て行つた。生徒はぞろ／＼と潮のやうに集つて入つて來た。女教員は教員室を出ようとして、じろりと清三を見て行つた。

唱歌の時間だと見えて、講堂に生徒が集つて、やがて緩かなオルガンの音が靜かな校内に聞え出した。

三

村役場の一夜はさびしかつた。小使の室にかれは寢ることになつた。日のくれ／＼に、勝手口から井戸の傍に出て、平野をめぐる遠い山々のくらくなるのを眺めてみると、身も引入れられるやうな哀愁がそれとなく心を襲つて來る。父母のことが犇々と思ひ出される。幼い頃は兄弟も多かつた。其頃父は足利の呉服屋をしてゐた。財産もかなり豊であつた。七歳の時没落して熊谷に來た時のことをかれは臚けながら覚えて居る。母親の泣いたのを不思議に思つたのを覚えて居る。今は——兄も弟も死んで了つて自分一人になつた今は、家庭の關係に就いても、他の學友のやうな自由なことは言つて居られない。人の好い父親と弱々しい情愛の深い母親とを持つた此身は、生れながらにして既に薄倖の運命を得て來たのである。かう思ふと、例のセンチメンタルな感情が烈しく胸に迫つて來て、涙がおのづと押すやうに出る。

近い森や道や畑は名残なく暮れても、遠い山々の頂はまだ明るかつた。浅間の煙が刷毛ではいたやうに夕焼の空に靡いて、その末がほかしたやうに廣く擴がり渡つた。蛙の聲が其處にも此處にも聞え出した。處々の農家に灯が點つて、唄をうたつて行く聲が何處か遠くで聞える。かれはぢつと立盡して居た。

ふと前の榛の並木のあたりに、人の來る氣勢がしたと思ふと、華やかに笑ふ聲がして、足音がばたばた聞える。小川屋に辨當と夜具を取りに行つた小使が歸つて來たのだと思つて居ると、夕闇の中から大きな夜具を被いた黒い影が浮き出すやうに動いて來て、其後に女らしい影がちよこく跟いて來た。

小使は室の中にドサリと夜具を置いて、さも重かつたといふやうに呼吸を吐いたが、晝間掃除して置いた三分心の洋燈に火を點した。四邊は急に明るくなつた。

『御苦勞でした。』

かう言つて清三は戸内に入つて來た。

此時、清三は、其處に立つて居る娘の色白の顔を見た。娘は携へて來た辨當を其處に置いて、急に明るくなつた一室を眩しさうに見渡した。

『お種坊、遊んで行くが好いや。』

小使はこんなことを言つた。娘は莞爾と笑つて見せた。評判な美しさといふ程でもないが、眉の處に

人に好かれるやうに艶な處があつて、豊かな肉づきが頬にも腕にも露はに見えた。

『お母、加減が悪いつて聞いたが、何うだい。もう好いかな。』

『あゝ。』

『風邪だんべい。』

『寒い思をしてはいけないくつて言つても、假寝なぞして居るもんだから……風邪を引いちやつたんさ……』

『お母、好い氣だからなア。』

『本當に困るよ。』

『でも、お種坊はかせぎものだから、お母、樂が出來らアな。』

娘は黙つて笑つた。少時して、

『お客様の辨當は、明日も持つて來るだんべいか。』

『さうよ。』

『それぢや、お休み。』

と娘は歸り懸けると、

『まア、好いぢやねえか、遊んで行けやな。』

『遊んでなんか居られねえ、これから跡仕舞しねきやなんねえ……それだらお休み、』と出て行つて了ふ。

辨當には玉子焼に漬物とが入られてあつた。小使は出流れの温い茶をついで呉れた。やがて爺は向うへ行つて、内職の菓を打ち始めた。夜はしんとして居る。蛙の聲に家も身も埋めらるゝやうに感じた。かれは想像にも勞れ、さりとて讀むべき雑誌も持つて來なかつたので、包の中から洋紙を横綴にした手帳を出して、鉛筆で日記をつけ出した。

四月二十五日と前の日に續けて書いて、不圖思ひ附いて鉛筆を倒にして、ゴムでゴシク消した。今日は少くとも一生の中で新しい生活に入る記念の第一日である。小説ならば、編が改まるどころである。で、かれは頁の裏を半分白いまゝにして置いて、次の頁から新に書き始めた。

四月廿五日、(彌勒にて)……

一頁ほど簡単に書終つて、次に今日の費用を數へて見た。新郷で買った天狗煙草が十錢、途中の俵代が三十錢、清心丹が五錢、學校で取つた辨當が四錢五厘、合計四十九錢五厘、持つて來た一圓二十錢の中から差引七十錢五厘がまだ暇臺口の中に残つて居た。續いて今度此處に來るに就いての費用を計算して見た。

25.0……………記 11

22.0……………名 刺
3.5……………齒磨及楊子
8.5……………筆二本
14.0……………硯
1.15.0……………帽子
1.75.0……………羽 織
30.0……………へこ帶
14.5……………下 駄
<hr/> 4.07.5

これに前の七十錢五厘を加へて總計四圓七十八錢也と書いて、そして此金をつくるに就いて、父母の苦心したことを思ひ出した。僅か一圓の金すら容易に出來ない家庭の憐むべきをつくづく味氣なく思つた。夜着の襟は汚れて居た。旅の緩かな悲哀がスイートな涙を誘つた。彼はいつか微かに肝を立てゝ居た。翌日は學校の豫算表の筆記を頼まれて、役場で一日を暮した。それがすんでから、父母に手紙を書いて出した。

夕暮に校長の家から使がある。

田 舎 教 師

校長の家は遠くはなかつた。麥の青い畑の所々に黄い菜の花の一畦が交つた。茅葺屋根の一軒立ではあるが、つくりは總て百姓家の構で、廣い入口、六疊と八疊と續いた室の前に小さな庭があるばかりで、細君のだらしない姿も、子供の泣顔も、茶の間の長火鉢も、疊の汚れて破れたのも、表から來る人の眼に皆映つた。校長の室には學校管理法や心理學や教育時論の赤い表紙などが見えた。

『君には本當に氣の毒でした。實はまだ手筈だけで、表向にしなかつたものだからねえ……』と言つて、細君の運んで來た茶を一杯ついで出して、『君も御存じかも知れないが、平田といふあの年の寄つた教員、あれがもう老朽で仕方がないから、轉校か免職かさせようと言つて居た處へ、丁度加藤さんからさういふ話があるつて岸野君が言ふもんだから、それでお頼みしようつて言ふことにしたのでした。處が少し貴方のお出が早かつたものだから……』

言ひ懸けて笑つた。

『さうでしたか、少しも知りませんものでしたから……』

『それはさうですとも、貴君の知る譯はない。岸野さんが今少し注意して呉れると好いんですけれど、あの人はあゝいふ風で、何事にも無頓着ですからな。』

『それぢや其教員が居たんですね？』

『ええ。』

『それぢやまだ知らずに居りましたのですか。』

『内々は知つてるでせうけれど……表向はまだ發表してないんです。一三日の中にはすつかり村會で決めて了ふつもりですから、來週からは出て戴けると思ひますが……』かう言つて、少し途切れて、『私の方の學校は皆な好いばかりで、萬事總て圓く行つて居ますから、始めて來た方にも勤め好いです。貴方も一つ大に奮發して戴きたい。俸給もその中には段々何うかかりますから……』

煙草を一服吸つて、トンと叩いて、

『貴下はまだ正教員の免狀は持つて居ないんですね？』

『ええ。』

『ぢや一つ、取つて置く方が、萬事都合が好いですな。中學の證明があれば、實科を少し遣れば譯はありやしないから……教授法はちつとは讀みましたか？』

『少しは讀んで見ましたけれど、何うも面白くなくつて困るんです。』

『何うも教授法も實地に當つて見なくつては面白くないものです。遣つて見ると、これで中々味が出て來るものですがな。』

學校教授法の實驗に興味を持つ人間と、詩や歌にあこがれて居る青年とがかうして長く相對して坐つた。點心には大きい鹽煎餅が五六枚盆に載せて出された。校長の細君は挨拶をしながら、顔の蒼白い、鼻

の高い、眉と眉との間の遠い客の姿を見て、弱々しい人だと思つた。次の間では話をして居る間、今年生れた子が間斷なしに泣いたが、しかし主はそれを喧しいとも言はなかつた。

襪裾が四邊に散らばつて、火鉢の鐵瓶はカラ／＼煮え立つて居た。

中學の話が出る。師範校の話が出る。教授上の經驗談が出る。同僚になる人々の噂が出る。清三は思はず興に乗つて、理想めいたことやら、家庭の爲の犠牲と言ふことやら、其他いろ／＼のことを打明けて語つて、一生小學校の教員をする氣はないといふやうなことでほのめかした。清三は昨日學校で逢つた時に似ず、この校長の存外性質の好き／＼な處のあるのを發見した。

校長の語る處によると、此三田ヶ谷といふ地は村長や子弟の父兄の権力の強い處で、その楯を取つて行くのが中々難かしさうである。それに人氣も餘り好い方ではない、發戸、上村君、下村君などいふ利根川寄りの村落では、青縞の賃機が盛んで、若い男や女が出入するので、風俗も何うも悪い。七八歳の子供が卑猥極まる唄などを覚えて來てそれを平氣で學校で唄つて居る。『私が此處に來てから、もう三年になります、其時分は生徒の風儀はそれは随分酷かつたものです。初めは私もこんなところにはとてもつとまらないと思つた位でした。今では、それでも大分よくなつたがな、』と校長は語つた。

歸る時に、

『明日は土曜日ですから、日曜にかけて一度行田に歸つて來たいと思ひますが、お差支はないでせうか？』

かれはかう訊ねた。

『ようござんすとも……それでは來週から勤めて戴くやうに……』

其夜は矢張役場の小使室に寝た。

四

朝起ると春雨が蕭々と降つて居た。

濡れた麥の緑と菜の花の黄とはいつもよりは際立つて美しく野を彩つた。村の道を蛇の目傘が一つ通つて行つた。

清三は八時過ぎに、番傘を借りて、雨を衝いて出た。それには三田ヶ谷村役場と黒々と大きく書き附けてあつた。

小川屋の傍の川縁の繁みからは、雨滴がはらく／＼と傘の上に亂れ落ちた。錆びた黒い水には蝶蠅が赤い腹を見せて居る。ふと街道の取つきの家から、小川屋のお種といふ色白娘が、白い手拭で髪を掩つたまゝ、傘もさゝずに、大きな雨滴の落ちる木蔭を急いで此方に遣つて來たが、二三歩前で、清三と顔見合せて、鳥渡會釋して笑顔を見せて通り過ぎた。

學校はまだ授業が始まらぬので、門から下駄箱の見える邊には、生徒の傘がぞろぞろと續いた。男生徒も女生徒も多くは包を腰の處に負つて尻を牽けて歩いて来る。雨の降る中を濡れそぼちながら、傘を車の輪のやうに地上に廻して来る頑童もあれば、傘の柄を頸の處で押へて、編棒と毛糸とを動かして歩いて来る十二三の娘もあつた。この生徒等を來週からは自分が教へるのだと思つて、清三は其前を通つた。明方から降出した雨なので、路はまださう大して悪くなかつた。車や馬の通つた處はグシヨクシヨクして居るが、拾へば泥濘にならぬ處がいくらもある。道の縁の乾いた土には雨がまだ僅かに浸込んだばかりであつた。

井泉村の役場に助役を訪ねて見たが、まだ出勤して居なかつた。道に沿つた長い汚い溝には、藻や藓や葦の新芽や澤瀉がたくたくと生えて、淡竹の雨を帯びた藪がその上に蔽ひ冠さつた。雨滴がばらばら落ちて落ちた。

路の畔に軒の傾いた小さな百姓家があつて、壁には鋤や犁や古い籠などがかけてある。髪の毛の亂れた肥つた鼻が柱に凭り懸つて、今年生れた赤兒に乳を舂ませて居ると、亭主らしい鬚面の四十男は雨に仕事の出來ぬのを退屈さうに、手を伸して大きな欠をして居た。

鎮守の八幡宮の茅葺の古い社殿は街道から見える處にあつた。華表の傍には社殿修繕の寄附金の姓名と額とが古く新しく並べて書いてある。周囲の樺の大木にはもう新芽が萌し始めた。賽銭箱の前には、額髪を手拭で巻いた子守が一人、子守歌を調子よく唄つて居た。

昨日の賣残りのふかし甘薯が不味さうに並べてある店もあつた。雨は細く糸のやうに其低き軒を掠めた。

畑には漸く芽を出しかけた桑、眼もさめるやうに黄い菜の花、れんげや菫や草の生えて居る畔、遠くに杉や檜の森に圍まれた豪農の白壁も見える。

青縞を織る音が處々に聞える。チャンカラチャンカラと忙しさうな調子が絶えず響いて来る。時には四邊にそれらしい人家も見えないのに、何處で織つてるのだらうと思はせることもある。唄が若々しい調子で聞えて來ることもある。

發戸河岸の方に岐れる路の角には、此處等で評判だといふ鱧鮓屋があつた。朝から大釜には湯が沸つて、主らしい男が、大きなのべ板にうどん粉をなすつて、せつせと玉を伸して居た。赤い襷を懸けた若い女中が馴染らしい百姓と笑つて話して居た。

路の曲つた處に、古い石が立てゝある。維新前からある境界石で、『これより羽生領』としてある。

ひろい長い榛の片側並木が田圃の間に一しきり長く續く。それに沿つて細い川が流れて、萌出した水草のかげを小魚がちよろ／＼泳いで居る。羽生から大越に通ふ乗合馬車が泥濘を飛して通つて行つた。

來る時には、路傍のこけら葺の汚いだるま屋の二階の屋根に、襟垢のついた蒲團が春の日ののどかな

光に干されて、下では蒼白い顔をした女がせつせと張物をして居たが、今日は障子がびつしやりと閉ぢられて、日當りの悪い處には青ごけの生えたのが汚なく眼に着いた。

段々道が悪くなつて來た。拾つて歩いててもピシヤ／＼しないやうな處はもうなくなつた。足の踵を離さないやうにして歩いてても、摩滅した駒下駄からは絶えずハネが揚つた。風が出て雨も横しぶきになつたので袖も濡れて了つた。

羽生の町は淋しかつた。時々番傘や蛇の目傘が通るばかり、庇の長く出た廣い通りは森閑として居る。郵便局の前には爲替を受取に來た若い女が立つて居るし、呉服屋の店には番頭と小僧とが固まつて話をしてゐるし、足袋屋の店には青縞と雲齋織とが積重ねられた中で、職人がせつせと足袋を縫つて居た。新式に硝子戸の店を造つた唐物屋の前には、自轉車が一箇、半は軒の雨滴に濡れながら置かれてある。

町の四辻には半鐘臺が高く立つた。

そこから行田道は岐れて居る。煙草屋、うどん屋、醫師の大きな玄關、塀の上に聳えてゐる形の面白い松、吹井が清い水を噴いて居る豪家の前を向うに出ると、草の生えた溝があつて、白いペンキのはけた門に、羽生分署といふ札がかゝつて居る。巡查が一人、劍をぢやらつかせて、雨の降頻る中を出て來た。

それからまた裏町の人家が続いて、多くはこけら葺の古い貧しい家並である。馬車屋の前に、乗合馬車が一臺あつて、もう出ると見えて、客が二三人乗込んで居た。清三は立留つて聞いたが、生憎一杯で

乗せて貰ふ餘地がなかつた。

清三の姿は猶暫く其裏町の古い家並の間に見えて居たが、ふと、ある小さな家の大和障子を明けて入つて行つた。中には中年の上さんが居た。

『下駄を一つ貸して頂きたいんですが……彌勒から雨に降られて閉口して了ひました。』

『お安い御用ですとも。』

上さんは足駄を出して呉れた。

足駄の齒はすれて曲つて、歩き憎いこと一通でなかつた。駒下駄よりは好いが、ハネは矢張少しづつあがつた。

かれは遂に新郷から五十錢で俵に乗つた。

五

家は行田町の大通から、昔の城址の方へ行く横町にあつた。角に柳の湯といふ湯屋があつて、其れと對して、綺麗な女中のゐる料理屋の入口が見える。棟割長屋の一軒仕切つたといふやうな軒の低い家で、風雨に曝されて黒くなつた大和障子に糸のやうな細い雨が斜に降り懸つた。隣には繭の仲買をする人が住んでゐて、其時節になると、狭い座敷から臺所、茶の間、入口まで、白い繭で一杯になつて、朝か

ら晩までごたくと人の出入するのが例であるが、今は建附の悪い障子がびつしやりと閉つて、四邊がしんとして居た。

清三は大和障子をがらりと明けて中に入つた。

年の頃四十位の品の好い丸髻に結つた母親が、裁物板を前に、四邊に鋏、糸巻、針箱などを散らかして、せつせと賃仕事をして居たが、障子が明いて、息子の顔が其處に顯はれると、

『まア、清三かい。』
と呼んで立つて來た。

『まア、雨が降つて大變だつたねえ！』

濡れそぼちた袖やら、はねの揚つた袴などをすぐ見て取つたが、言葉を續いで、

『生憎だつたねえ、お前、昨日の具合では、こんな天氣にならうとは思はなかつたのに……ずつと歩いて來たのかえ。』

『歩いて來ようと思つたけれど、新郷に廉いかへり俵があつたから乗つて來た。』
見馴れぬ足駄を穿いて居るのを見て、

『何處から借りて來たえ、足駄を？』

『峯田で。』

『さうかえ、峯田で借りて來たのかえ……本當に大變だつたねえ。』かう言つて、雑巾を勝手から持つて來ようとする時、

『雑巾では駄目だよ。母さん、バケツに水を汲んで下さいな。』

『そんなに汚れて居るかえ。』

と言ひながら勝手からバケツに水を半分ほど汲んで來る。

乾いた手拭をも其處に出した。

清三は綺麗に足を洗つて、手拭で拭いて上にあがつた。母親は其間に、結城縞の綿入と、自分の紬の着物縫ひ直した羽織とを揃へて其處に出して、脱いだ羽織と袴とを手ばしこく衣紋竹にかける。

二人はやがて長火鉢の前に坐つた。

『何うだつたえ？』

母親は鐵瓶の下の火をあらけながら、心にかゝる其様子を訊く。

かいつまんで清三が話すと、

『さうだつてねえ、手紙が今到着したよ。どうしてそんな不都合なことになつて居たんだらうねえ。』

『何あに、少し早く行き過ぎたのさ。』

『それで、話は何う定つたえ？』

『來週から出ることになった。』

『それは好かつたねえ。』

喜悅の色が母親の顔に上つた。

それからそれへと話は續いた。校長さんは何ういふ人だの、やさしさうな人か何うかの、彌勒といふ處は何んなところかの、下宿する好い處があつたかのと、いろ／＼なことを持出して母親は聞いた。清三は一々それを話して聞かせた。

『お父さんは？』

少時して、清三がかう訊いた。

『鳥渡下忍まで行つて來るつて出かけて行つたよ。何うしても少しお錢を拵へて來なくつてはつてね……。雨が降るから、明日にしたら好いだらうと言つただけけれど……。』

清三は黙つて了つた。貧しい自分の家のことが今更に頭腦に繰返される。父親の働きのないことが齒痒いやうにも思はれるが、一方にはまた、好人物で、善人で、人にだまされ易い弱い鈍い性質を持つてゐながら、贋物の書畫を人にはめることを職業にして居るといふことに甚しく不快を感じた。正直なこれの心には、父親の職業は人間のすべき正業ではないやうに常に考へられてゐるのである。

編みこられさへしなければ、今でも相應な呉服屋の店を持つて居られたのである。かう思ふと、何も知らぬ母親に對する同情と共に、正業でない職業とは言ひながら、かうした雨の降る日に、纒か五十錢か二圓の錢で、一里もある處へ出懸けて行く老いた父親を氣の毒に思つた。

やがて鐵瓶がチン／＼音を立て始めた。

母親は古い茶箆筒から茶の入つた罐と急須とを取つた。茶はもう粉になつて居た。火鉢の抽斗の紙袋にも鹽煎餅が二枚しか残つて居なかつた。

清三は夕暮近くまで、母親の裁縫する傍の暗い窓の下で、熊谷にゐる同窓の友に手紙を書いたり、新聞を讀んだりして居た。友への手紙には戀のことやら詩のことやら明星派の歌のことやら我ながら若々しいと思ふやうなことを野紙に二枚も三枚も書いた。

四時頃から雨は霽れた。路はまだグシャ／＼して居る。父親が不成功で歸つて來たので、家庭の空氣が何となく重々しく、親子三人黙つて夕飯を食つて居ると、『御免なさい』といふ聲を先きに立て、建附の悪い大和障子を明けようとする人がある。

母親が立つて行つて、

『まア……さあ、何うぞ。』

『いゝえ、鳥渡、湯に參りましたのですが、歸りにねえ、貴女、お宅へ上つて、今日は土曜日だから、清三さんがお歸りになつたか何うか郁治が伺つて來いと申しますものですから……。いつも御無沙汰ばか

り致して居りましたねえ、まア本當に。』

『まア、何うぞお懸け下さいまし、……おや雪さんも御一緒に、……さア雪さん、此方へお入りなさいませよ。』

と女同士は頻りに饒舌り立てる。郁治の妹の雪子は瘦削なすらりとした田舎にはめづらしい好い娘だが、湯上りの薄く化粧した白い顔を夕暮の暗くなり懸けた空氣にくつきりと浮き出すやうに見せて、ぬれ手拭に石鹼箱を包んだのを持って立つて居た。

『さア、こんな處ですけど……』

『いゝえ、もうさうは致しては居りませんから。』

『それでもまア、烏渡おかけなさいましな。』

この會話にそれと知つた清三は、箸を捨て、立つて其處に出て來た。母親共の挨拶し合つてゐる向うに雪子の立つて居るのを烏渡見て、すぐ眼を外らした。

郁治の母親は清三の顔を見て、

『お歸りになりましたね。郁治が待つて居りますから……』

『今夜上らうと思つて居ました。』

なると、あれも淋しくつて仕方がないと見えましてね……それに、外に仲の好いお友達もないものから……』

郁治の母親はやがて歸つて行く、清三も母親も再び茶湯臺に向つた。親子は矢張黙つて夕飯を食つた。湯を飲む時、母親は急に、

『雪さん、大變綺麗になんすつたな！』

と誰に向つて言ふともなく言つた。けれど誰もそれに調子を合せるものはなかつた。父親の茶漬を搔込む音がさら／＼と聞えた。清三は澤庵をガリ／＼食つた。日は暮れかゝる。雨はまた降り出した。

六

加藤の家は五町と隔つて居らなかつた。公園道の半から左に折れて、裏町の間を少し行くと、やがて一方麥畑一方垣になつて、夏は紅と白の木槿が咲いたり、胡瓜や南瓜が生つたりした。綠蔭の重つた夕闇に螢の飛ぶのを、雪子やしげ子と追ひ廻したこともあれば、寒い冬の月夜を歌留多に更かして、からころと足音高く歸つて來たこともあつた。細い荳路の杉垣の奥の門と瓦屋根、それはかれに取つてまことに少なからぬ追憶がある。

今日は櫻の葉を透して洋燈の光がキラ／＼と雨に濡れて光つて居た。雪子の色の白い取澄した顔や、

しけ子のあどけなく莞爾と笑つて迎へるさまや、晩酌に酔つて機嫌よく話しかける父親の様子などがまだ訪問せぬ中からはつきりと目に見えるやうな気がする。笑聲がいつも絶えぬ平和な友の家庭を羨しく思つたことも一度や二度ではなかつた。

郡視學と謂へば、田舎では随分こはもてのする方で、難かしい、理窟つほい、取附きにくい質のものが多いが、郁治の父親は、物の解りが早くつて、優しくつて、深切で、そして口を利く方に懸けてもかなり重味があると人から思はれて居た。鬚は半ば白く、髪にもチラ／＼交つて居るが、氣はどちらかと言へば若い方で、青年を相手に教育上の議論などを飽かずにして聞かせることもあつた。清三と郁治と話して居る室に来ては、二人を相手に種々なことを語つた。

門を明けると、ベルがチリ／＼と鳴つた。踏石を傳つて、入口の格子戸の前に立つと、洋燈を持つて迎へに出たしけ子の笑顔が浮き出すやうに闇の中に居る清三の眼に映つた。

『林さん？』

と、覗くやうにして見た。

『兄さん、林さん。』

と高い無邪氣な聲を立てる。

父親は今日熊谷へ行つて不在であつた。子供が居ないので、室が綺麗に片附いて居る。掃除も行き届

いて、茶の間の洋燈も明るかつた。母親は長火鉢の前に、晴れやかな顔をして坐つて居た。雪子は勝手に跡仕舞をして居たが、丁度それが終つたので、白い前懸で手を拭き／＼茶の間に來た。

挨拶をしてゐると、郁治は奥から出て來て、清三を其まゝ自分の書齋へつれて行つた。

書齋は四疊半であつた。桐の古い本箱が積重ねられて、綱鑑易知録、史記、五經、唐宋八家文などと書いた白い紙がそこに張られてあつた。三尺の半床に草雲の蘭の幅のかゝつてゐるのが洋燈の遠い光に朧ろけに見える。洋燈の載つた朴の大きな机の上には、明星、文藝俱樂部、萬葉集、一葉全集などが亂雑に散らばつて置かれてある。

一年も逢はなかつたやうにして、二人は熱心に話した。いろ／＼な話が絶間なく二人の口から出る。

『君は何う決つた？』

少時して清三が訊ねた。

『來年の春、高等師範を受けて見ることにした。それまでは、唯居つても仕方がないから、此處の學校に教員に出て居て、そして勉強しようとおもふ……』

『熊谷の小畑からもさう言つて來たよ。矢張高師を受けて見るつて……』

『さう、君の處にも言つて來たかえ、僕の處にも言つて來たよ。』

『小島や杉谷はもう東京に行つたつてねえ。』

『さう書いてあつたね。』

『何處に入るつもりだらう?』

『小島は第一を志願するらしい。』

『杉谷は?』

『先生は何うするんだか……何うせ、先生は學費になんか困らんのだから、何うでも好きに出来るだらう。』

『此の町からも東京に行くものはあるかね?』

『さう、』と郁治は考へて、『佐藤は行くやうなことを言つて居たよ。』

『何ういふ方面に?』

『工業學校に入るつもりらしい。』

同窓に關する話が盡きずに出た。清三の身にしては、將來の方針を定めて、てんでに出たい方面に出て行く友達が此上もなく羨しかつた。中學校に居る中から、卒業して後の境遇を豫め想像せぬでもなかつたが、其時はまた其時で、思はぬ運が思はぬ處から向いて來ないとも限らないと強ひて心を安んじて居た。けれどもそれは空想であつた。家庭の餓は日にく、其身を實際生活に近づけて行つた。かれはまた母親から優しい温かい血を受け繼いで居た。幼い時から小波のぢさんのお伽噺を読み、

小説や歌や俳句に若い思を湧かして居た。體の發達するにつれて、心は燃えたり冷えたりした。町の若い娘達の眼色をも讀み得るやうにもなつた。戀の味もいつか覺えた。あるデザイナーに促されて、人知れず汚い業をすることもあつた。世間は自分の前に面白い楽しい舞臺を展げて居ると思ふこともあれば、汚い醜い近づくべからざる現象を示して居ると思ふこともある。自己の満し難い欲望と美しい花のやうな世界と如何になり行くかを知らぬ自己の將來とを考へる時は、いつも暗い佗しい堪へ難い心になつた。熊谷に居る友人の戀の話から、Artの君の話が出る。

『僕は苦しくつて仕方がない。』

『何うかする方法がありさうなもんだねえ。』

二人はこんなことを言つた。

『昨日公園で逢つたんさ。鳥渡浦和から歸つて來たんだつて、先生、徒に肥えてるつて言ふ形だつた。』

郁治はかう言つて笑つた。

『徒に肥えてるは好いねえ。』

清三も笑つた。

『君のシスターが友達だし、先生のエルダブラザアも居るんだし、何うにか方法がありさうなもんだねえ。』

『まア、放つて置いて呉れ、考へると苦しくなる。』

胸にひそかに戀を包める青年の苦しさといふやうな顔を郁治はして見せた。前に自からも言つたやうに、郁治は好男子ではなかつた。男らしいきつぱりとした處はあるが、體格の大きい、肩の怒つた、眼の鋭い、頬骨の出た處など、女に好かれるやうな點はなかつた。

若い者の苦しむやうな煩悶はかれの胸にもあつた。清三に比べては、境遇も好かつた。家庭も好かつた。高等師範に入れぬまでも東京へ行つて二二年は修業するほどの學費は出して遣る氣が父親にもある。それに體格が好いだけに、思想も健全で、清三のやうにセンチメンタルの處はない。清三が今度の彌勒行を、此上もない絶望のやうに——田舎に埋れて出られなくなる第一歩であるかのやうに言つたのを、『だつて、そんなことはありやしないよ、君。人間は境遇に支配されるといふことは、それはいくらかはあるには違ひないが、何んな境遇からでも出ようと思へば出て來られる、』と言つたのでも、郁治の性格の一部は解る。

其時、清三は、

『君はさういふけれど、それは境遇の束縛の恐ろしいことを君が知らないからだよ。つまり君の家庭の幸福から出た言葉だよ。』

『そんなことはないよ。』

『いや、僕はさう思ふねえ、僕はこれつきり埋れて了ふやうな氣がしてならないよ。』

『僕はまた、假に一步譲つて、人間がさういふ種類の動物であると假定しても、さういふ消極的な考には服従しては居られないねえ。』

『ぢや、何んな境遇からでも、其人の考一つで抜け出ることが出來ると謂ふんだねえ。』

『や、や。』

『つまりさうすると、人間萬能論だね、何んなことでも出來ないことはないといふ議論だね。』

『君はぢきさう極端に言ふけれど、それは其處に取除けもあるがね。』

其時いつもの單純な理想論が出る。積極的な考と消極的な考とがごたくと混合して要領を得ずに終結になつた。

かれ等の群は學校に居る頃から、文學上の議論や人生上の議論などをよくした。新派の和歌や俳句や抒情文などを作つて、互に見せ合つたこともある。一人が仙骨といふ號をつけると、皆な骨といふ字を用ゐた號をつけようぢやないかといふ動議が出て、破骨だの、酒骨だの、露骨だの、天骨だの、古骨だのといふ面白い號が出來て、暫くの間は手紙を遣るにも、話をするにも、皆なその骨の字の號を使つた。古骨と言ふのは、矢張郁治や清三と同じく三里の道を朝早く熊谷へ通つた連中の一人だが、その本當の號は機山と謂つて、町でも屈指の青縞商の息子で、平生は角帯などを締めて、常に色の白い顔に銀縁の近眼

鏡を懸けて居た、田舎の青年に多く見るやうな非常に熱心な文學好で、雑誌といふ雑誌は大抵取つて、始めはいろ／＼な投書をして、自分の號の活字になるのを喜んで居たが、近頃ではもう投書でもあるまいといふ氣になつて、毎月の雑誌に出る小説や詩や歌の批評を縦横に其夥伴にして聞かせるやうになつた。それに、投書家交際をすることが好きで、地方文壇の小さな雑誌の主筆と常に手紙の往復をするので、地方文壇消息には、武州行田には石川機山ありなどとよく書かれてあつた。時の文壇に名のある作家も二三人は知つて居た。

矢張骨の字の號をつけた一人で——これは文學などは餘り解る方ではなく、同じ夥伴におつき合ひつけて貰つた組であるが、かれの兄が行田町に一つしか無い印刷業を遣つて居て、其前を通ると、硝子戸の入口に、行田印刷所と書いたインキに汚れた大きい招牌が懸つて居て、舊式な手刷が一臺、例の大きなハネを巻返し繰返し動いて居るのが見える。廣告の引札や名刺が主で、時には郡役所警察署の簡單な報告などを頼まれて刷ることもあるが、それは極めて稀であつた。棚に並べたケイスの活字も少なかつた。文選も植字も印刷も主が皆な一人で遣つた。日曜日などには其弟が汚れた筒袖を着て、手刷臺の前に立つて、刷れた紙を翻して居るのを常に見懸けた。

金持の息子と見て、その小遣を見込んで、それでそゝのかしたといふ譯でもあるまいが、この四月の月の初めに、機山がこの印刷所に遊びに来て、長い間その主人兄弟と話して行つたが、歸る時、『それぢや毎月七八圓づつ損する積なら大丈夫だねえ。原稿料は出さなくつたつて書手は澤山あるし、それに三十部は賣れるアね、』と言つた顔は、新しい計畫に對する喜悅に輝いて居た。『行田文學』といふ小雑誌を起すことに就いての相談が其の連中の間に持上つたのはこれからである。

機山が其相談の席で、

『それから、羽生の成願寺に山形古城が居るアねえ。あの人はあれで中々文壇には聞えて居る名家で、新體詩ぢや有名な人だから、先づ第一にあの人に賛成員になつて貰ふんだね。あの人が頼んで貰へば、原杢花の原稿も貰へるよ。』

『あの古城つていふ人は此處の士族だつて言ふぢやないか。』

『さうだつて……。だから、賛成員にするのは譯はないさ。』

丁度清三が彌勒に出るやうになつた時なので、彼が先づ其寺を訪問する責任を仲間から負はせられた。其夜、『行田文學』の話が出ると、郁治が、

『寄つて見たかね?』

『生憎、雨に逢つちやつたものだから。』

『さうだつたね。』

『今度行つたら一つ寄つて見よう。』

『さう言へば、今日萩生君が羽生に行つたが、逢はなかつたかねえ。』

『萩生君が?』と清三は珍らしがる。

萩生君と謂ふのは、矢張其仲間で、熊谷の郵便局に出て居る同じ町の料理屋の息子さんである。今度羽生局に勤めることになつて、今俾で行くといふ處を郁治は町の角で逢つた。

『これからずつと長く勤めて居るのかしら。』

『無論さうだらう。羽生の局を遣つてるのは萩生君の親類だから。』

『それは好いな。』

『君の話相手が出来て、好いと僕も思つたよ。』

『でも、そんなに親しくはないけれど……』

『ぢき親しくなるよ、あゝいふやさしい人だもの……』

其處へしげ子が、『晝間拵へたのですから、不味くなりましたけれど……』とお萩餅を運んで、茶をさして來た。其まゝ兄の傍に坐つて、無邪氣な口振で二言三言話して居たが、今度は姉の雪子が丈の高い姿を其處に顯はして、『兄さん、石川さんが』といふ。

やがて石川が入つて來た。

座に清三が居るのを見て、

『君の處に今寄つて來たよ。』

『さうか。』

『此方に來たつてマザアが言つたから。』かう言つて石川は坐つて、『先生が旨くつとまりますかね?』

清三は笑つて居る。

郁治は、『まだ出来るか出来ないか、遣つて見ないんだとさ。』

と傍から言ふ。

雪子もしげ子も石川の顔を見ると、挨拶してすぐ引込んで行つて了つた。郁治と清三と話して居る間は、話が氣が置けないので、よく長く傍に坐つて居るが、他人が交るとすまして了ふのが常である。それほど清三と郁治とは交情が好かつた。それほど清三と此家庭とは親しかつた。郁治と清三との話し振も石川が來ると宛で變つた。

『愈々來月の十五日から一號を出さうと思ふんだがね。』

『もうすつかり決つたかえ。』

『東京からも大家では麗水と天隨とが書いて呉れる筈だ。……それに地方からも大分原稿が來るから大丈夫だらうと思ふよ。』

かう言つて、地方の小雑誌やら東京の文學雑誌やらを五六種出したが、岡山地方で發行する菊版二十

四頁の『小文學』といふのを特に抜出して、

『大抵かういふ風にしようと思ふんだ。澤田（印刷所）にも相談して見たが、それが好いだらうと言ふんだ。けれど何うも中の體裁は餘り感心しないから、組み方なんかは別にしようと思ふんだがね。』

『さうねえ、中は餘り綺麗ぢやないねえ、』と二人は『小文學』を見てゐる。

『これは何うだらう。』

と二段、十八行二十四字詰のを石川は見せた。

『さうねえ。』

三人は數種の雑誌を翻へして見た。郁治の持つて居る雑誌も其處に参考に出した。洋燈は額を集めた三人の青年と其處に亂雑に散らかつた雑誌とをくつきり照した。

やがて其中の一つに大略定まる。

石川の持つて來た雑誌の中に、『明星』の四月號があつた。清三はそれを手に取つて、初めは藤島武二や中澤弘光の木版畫の鮮かなのを見て居たが、やがて晶子の歌に熱心に見入つた。新しい『明星派』の傾向が清三の渴いた胸にはさながら泉のやうに感じられた。

石川はそれを見て笑つて、

『もう見てゐる。遣つたもんだね、崇拜者は！』

『だつて、實際好いんだもの。』

『何が好いんだか、國語は支離滅裂、思想は新しいかも知れないが、譯の解らない文句ばかり集めて、それで歌になつてゐる積なんだから、明星派の人達には閉口するよ。』

いつかも遣つた明星派是非論、それを三人はまた繰返して論じた。

七

夜はもう十二時を過ぎた。雨滴の音はまだして居る。時々ザツと降つて行く氣勢も聞取られる。城址の沼のあたりで、むぐりの鳴く聲が寂しく聞えた。

一室には三つ床が敷いてあつた。小さい丸髻と禿けた頭とが床を並べて其處に寢て居た。母親はつい先程まで眼を覺して居て、『明日眠いから早くおやすみよ、』と幾度となく言つた。『ランプを枕元につけて置いて、つい寢込んで了ふと危いから、』とも忠告した。その母親も寢て了つて、父親の躰に交つて、微かな呼吸がスウ／＼聞える。さらぬだに紙の笠が古いのに、先程心が出過ぎたのを知らずに居たので、ホヤが半分ほど黒くなつて、光線が厭に赤く暗い。清三は借りて來た『明星』を殆どわれを忘れるほど熱心に讀耽つた。

椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃に見る

わが罪問はぬ色桃に見る。桃に見る、あの赤い桃に見ると歌つた心がしみぐくと胸に沁みだ。不思議なやうでもあるし、不自然のやうにも考へられた。又この不思議な不思議な處に新しい泉が滾々として湧いて居るやうにも思はれた。色桃に見ると四の句と五の句を分けた處に言ふに見はれぬ匂ひがあるやうにも思はれた。かれは一首毎に一頁毎に本を伏せて、湧いて来る思を味ふべく餘儀なくされた。此瞬間には昨夜役場に寝た佗しさも、彌勒から羽生まで雨にそほぬれて来た辛さも全く忘れて居た。ふと石川と今夜議論をしたことを思ひ出した。あんな粗い感情で文學などを遣る氣が知れぬと思つた。それに引かへて、自分の感情のかく鮮かに新しい思潮に觸れ得るのをわれと自から感謝した。澁谷のさびしい奥に住んで居る詩人夫妻の佗住居のことなども想像して見た。何だか悲しいやうにもあれば、羨しいやうにもある。かれは歌を読むのをやめて、體裁から、組み方から、表紙の繪から、總て新しい匂ひに満されたその雜誌に憧れ渡つた。

時計が二時を打つても、かれはまだ床の中に眼を大きく明いて居た。鼠の天井を渡る音が騒がしく聞えた。

雨は降つたり霽れたりして居た。人の心を他界に誘ふやうにザツとさびしく降つて通るかと思ふと、びしょくくと雨滴の音が軒の樋を傳つて落ちた。

何時まで憧れて居たつて仕方がない。『もう寝よう』と思つて、起上つて、暗い洋燈を手にして、父母

の寢て居る夜着の裾の處を通つて、剛に行つた。手を洗はうとして雨戸を一枚明けると、縁側に置いた洋燈がくつきりと闇を照して、濡れた南天の葉に雨の降りかゝるのが光つて見えた。

障子を閉てる音に母親は眼を覺して、

『清三かえ?』

『あゝ。』

『まだ寢ずに居るのかえ。』

『今、寢るところなんだ。』

『早くお寢よ……明日が眠いよ、』と言つて、寢反をして、

『もう何時だえ。』

『二時が今鳴つた。』

『二時……もう夜が明けて了ふぢやないか。お寢よ。』

『あゝ。』

で、蒲團の中に入つて、洋燈をフツと吹消した。

翌日、午後一時頃、白縞の袴を着けて、借りて来た足駄を下けた清三と、半禿けた、新紬の古ぼけた縞の羽織を着た父親とは、行田の町はづれを伴れ立つて歩いて行つた。雨あがりの空は稍曇つて、時々思ひ出したやうに薄い日影が射した。町と村との境を劃つた川には、葦や藪や白楊がもう青々と芽を出して居たが、家鴨が五六羽ギャア／＼鳴いて、番傘と蛇目傘とが其岸に並べて干されてあつた。町に買物に來た近所の百姓は腰を懸けて頻りに饅頭を食つて居た。

並んで歩く親子の後姿は、低い庇や地焼の瓦で葺いた家根や、襷袢を干しつらねた軒や、石屋の工作場や、鍛冶屋や、娘の青縞を織つて居る家や、子供の集つて居る駄菓子屋などの兩側に連つた間を靜かに動いて行つた。と、向うから頭に番臺を載せて、上に小旗を無數にヒラ／＼さしたあめ屋が太鼓を面白く叩きながら遣つて來る。

父親は近在の新郷といふ處の豪家に二三日前書畫の幅を五六品預けて置いて來た。今日行つていくらかにして來なければならぬと思つて、午後から彌勒に行く清三と一所に出懸けて來たのである。

此處まで來る間に、父親は町の懇意な人に二人逢つた。一人は氣の措けない夥伴の者で、「何處へ行くけん？」さうけん、新郷へ行くけん、あそこは何うもな、客音な人間ばかりで、ねつから將が明かんない、

と言つて聲高く其中年の男は笑つた。一人は町の豪家の書畫道樂の主人で、それが向うから來ると、父親は丁寧挨拶をして立留つた。「此間のは、何うも悪いやうだねえ、何うもあやしい、」と向うから言ふと、「いや、そんなことは御座いませぬ、出所がしつかりして居りますから、折紙つきですから、」と父親は頻りに辯解した。清三は五六間先から振り返つて見ると、父親が頻りに腰を低くして、頭を下けて居る。其禿けた額を、薄い日影がテラ／＼照した。

加須に行く街道と館林に行く街道とが町のはづれで二つに岐れる。それから向うは潤々した野になつて居る。野の處々にはこんもりとした森があつて、其間に白堊の土藏などが見えて居る。まだ犁を入れぬ田には、けんげが赤い毛氈を敷いたやうに綺麗に咲いた。商家の若旦那らしい男が平坦な街道に滑かに自轉車を輾らして來た。

路は野から村に入つたり村から野に出たりした。櫛の高い生垣で家を圍んだ豪家もあれば、青苔が汚く生えた溝を前にして荒壁の崩れかけた家もあつた。鶏の聲が處々にのどかに聞える。街道のおろし菓子屋が荷を下して居ると、髪を茫々させた村の駄菓子屋のかみさんが、帯も締めずに出て來て、豆菓子や鐵砲玉をあれの是れのと云つて入用だけ置かせて居る。

新郷への岐れ路が近くなつた頃、親子はかういふ話をした。

『今度はいつ來るな、お前。』

『此次の土曜日には歸る。』

『其までに少しは何うかならんか。』

『何うだか解らんけれど、月末だから少しは呉れるだらうと思ふがね。』

『少しでも手傳つて貰ふと助かるがな。』

清三は返事をしなかつた。

やがて別れる處に來た。新郷へはこれから一田圃越せば行ける。

『それぢや氣をつけてな。』

『あゝ。』

其處には庚申塚が立つて居た。禿頭の父親が猫脊になつて歩いて行くのと、茶色の帽子に白縞の袴を着けた清三の姿とは、長い間野の道に見えて居た。

九

其夜は役場にとまつた。校長を訪ねたが不在であつた。かれは日記帳に、『あゝわれ終に堪へんや、あわれ遂に田舎の一教師に埋れんとするか。明日！ 明日は萬事定まるべし。村會の夜の集合！ 噫！ 一話以て後日に密す。』と書いた。猶詳しく其心持を書かうと思つたが、到底充分に書き現はし得ようとも

思へぬので、記憶に留めて置くことにした。

翌日、朝九時に學校へ行つて見た。けれど其平田といふのがまだ居たので、一先づ役場に引返した。一時間ばかりして又出かけた。

今度はもう其教員は居なかつた。授業は既に始まつて居た。生徒を教へる教員の聲が各教場から分ると聞えて來る。女教員の冴えた聲も聞えた。清三の胸は何となく躍つた。教員室に入ると、校長は卓に向つて、何か書類の調物をして居たが、

『さア、入り給へ、』と言つて、清三の入つて來るのを待つて、傍にある椅子をすゝめた。『お氣の毒でした。漸くすつかり決りました。中々面倒でしてな……昨夜の相談でもいろくの話が出ましてな。』かう言つて笑つて、『何うも村が小さくつて、それで喧しい學務委員が居るから困りますよ。』

校長は言葉をついで、

『それで家の方は何うするつもりです。毎日行田から通ふといふ譯にも行くまい。まア、當分は學校に泊つて居ても好いけれど……考がありますか。』

『何處か寄宿する好い處が御座いますまいか、』とこれをきつかけに清三が問うた。

『何うも此處は田舎だから、恰好な處がなくつて……』

『此處でなくつても、少しは遠くつても好いんですけれど……』

『さうですな……一つ考へて見ませう。何處かあるかも知れません。』

二時間済んだ處で、清三は同僚になるべき人々に紹介された。關といふ准教員は、莞爾と氣が措けぬやうなところがあつた。大島といふ校長次席は四十五六位の年恰好で、頭はもう大分白く、鳥渡見ると窮屈さうな人であるが、笑ふと、顔にやさしい表情が出て、初等教育にはさもなく熟達してゐるやうに見えた。『はア、此方が林さん、私は大島と申します。何分宜しく、』と云つた言葉の調子にも世馴れた處があつた。次に狩野といふ顔に疣のある訓導と杉田といふ肥つた師範校出とが紹介された。師範校出は何だかそつ氣ないやうな挨拶をした。女教員は下を向いてにこ／＼してゐた。

次の時間の授業の始まる前に、校長は生徒を第一教室に集めた。かれは卓の處に立つて、新しい教員を生徒に紹介した。

『今度、林先生と仰しやる新しい先生がお出になりました、皆さんの授業をなさることになりました。新しい先生は行田のお方で、中學の方を勉強して居らしやつて、よくお出来になる先生で御座いますから、皆さんもよく言ふことを聞いて勉強をするやうにしなければなりません。』

校長の脇に立つて、少し低頭加減に、顔を赤くしてゐる新しい先生は、何となく困つたやうな恥しさうな様子に生徒には見えた。生徒は黙つて校長の紹介の言葉を聞いた。

次の時間には、其の新しい先生の姿は、第三教室の卓の前に顯はれた。其處には高等一年生の十一二三

の児童がずらりと前に並んで、何か頼りにがや／＼言つて居たが、先生が入つて來ると、いづれも眼を其方に向けて黙つて了つた。

新しい教師は卓の前に來て椅子に腰を掛けたが、その顔は赤かつた。讀本を一冊持つて來たが、卓の上に顔を低れたまゝ、少時の間は、其教科書の頁を翻して見て居た。

後の方で私語く聲がをり／＼した。

教室の硝子戸は埃に塗れて灰色に汚なくよごれて居るが、其處に丁度日影が黄ろく射して、戸外では雀が百囀をしてゐる。通りを荷車の輾る音がガタ／＼聞えた。

隣の教室からは、女教員の細く尖つた聲が聞え出した。

少時して思切つたといふやうに、新しい教師は顔を擧げた。髪の延びた、額の廣い眉の濃い其顔には一種の努力が見えた。

『第何課からですか。』

かう言つた聲は廣い教室にひろがつて聞えた。

『第何課からですか、』と繰返して言つて、『何處まで教はりましたか。』

かう言つた時には、もう赤かつた顔の色が褪めて居た。

答が彼方此方から雜然として起つた。清三は生徒の示した讀本の頁をひろげた。もう此時は初めて教

場に立つた苦痛が餘程薄らいで居た。何うせ教へずには濟まされぬ身である。何うせ自分のベストを盡すより外に仕方がないのである。人が何と言はうが、何う思はうが、そんなことに頓着して居られる場合でない。かう思つたかれの心は軽くなつた。

『それでは始めますから。』

新しい教師は第六課を讀み始めた。

生徒は早いしかし滑かな流るゝやうな聲を聞いた。前の老朽教師の低い蜂の唸るやうな活氣の無い聲に比べては、大變な違ひである。しかし其聲は兎角早過ぎて生徒の耳に留まらぬ處が多かつた。生徒は本よりも先生の顔ばかり見て居た。

『何うです、これで解りますか。』

『今少しゆつくり讀んで下さい。』

いろくゝな聲が彼方此方から起つた。二度目には、つとめてゆつくりした調子で讀んだ。

『何うです、此位なら解りますか。』

にこくと笑顔を見せて、馴々しげにかれは言つた。

『先生、後のはよく解りました。』

『今少し早くつても好う御座います。』

などと生徒は言つた。

『今までは先生に幾度讀んで貰ひました。一度ですか、二度ですか？』

『二度。』

『二度です。』

といふ聲が其處にも此處にも起つた。

『それぢやこれで好いですな、』と清三は生徒の存外無邪氣な調子に元氣づいて、『でも、初めのが早過ぎましたから、今一度讀んで上げませう。よく聞いてお出なさい。』

今度のは一層はつきりして居た。早くも遅くもなかつた。

讀める人に手を上げさせて、前の列に居る色の白い可愛い子に讀ませて見たり何かした。讀めるのもあれば讀めぬのもあつた。清三は文章の中から難かしい文字を拾つて、それを黒板に書いて、順々に覚えさせて行くやうにした。殊に難かしい字には圈點をつけて其傍に片假名でルビを振つて見せた。卓の前に始めて立つた時の苦痛はいつか拭ふが如く消えて、自分ながら遣りさへすれば遣れるものだといふ快感が胸に溢れた。やがて時間が來てベルが鳴つた。

晝飯は小川屋から運んで來て呉れた。正午の休みに生徒等は皆運動場に出て遊んだ。鞞轡に乗るものもあれば、鬼事をするものもある。女生徒は男生徒とはおのづから別に組をつくつて、緩を取つたり、

お手玉を弄んだりして居る。運動場を縁取つて、白楊の緑葉が疎らに並んで居るが、其間から廣い青い野が見えた。

清三は廊下の柱に凭り懸つて、無心に戯れ遊ぶ生徒等に見惚れて居た。其處に遣つて來たのは關といふ教員であつた。

やさしい眼色と、莞爾した圓滿な顔には、初めて逢つた時から、人の好きさうなといふ感を清三の胸に起させた。此人には隔てを措かずに話が出来るといふ氣もした。

『何うでした、一時間おすみにになりましたか。』

『え……』

『何うも初めてといふものは、具合の悪いものでしてな……私等もつい三月程前に此處に來たのですが、始めは弱りましたよ。』

『何うも馴れないものですから。』

この同情を清三も嬉しく思つた。

『私の前に勤めて居た方は何ういふ方でした。』

『あの方はもう年を取つたから罷めさせられるといふ噂が前からあつたんです。今泉の人で、随分古くから教員は遣つて居るんだ相ですが……矢張若いものがずん／＼出て來るものだから……それに教員

をやめても困るつて言ふ人ではありませんから。』

『家には財産があるんですか。』

『財産といふこともありませんが、息子が荒物屋の店をして居りますから。』

『さうですか。』

こんな普通の會話もこの若い二人を近づける動機とはなつた。二人はベルの鳴るまで其處に立つて話した。

午後には理科と習字とを教へた。

夜は宿直室に泊つた。宿直室は六疊で、其隣に小使室があつた。小使室には大きな圍爐裏に火が活々と起つて、自在鍵に吊した鐵瓶は常に煮えくりかへつて居た。其向うは流元で、手桶の傍に茶碗や箸が置いてあつた。棚には桶と播鉢が伏せてあつた。

其夜は大島訓導の宿直で、いろ／＼打解けた話をした。かれは枋木縣のもので、久しく宇都宮に教鞭を取つて居たが、一昨年埼玉縣に來るやうになつて、鳥渡浦和に居て、それから此處に赴任したといふ。家は大越在で、十五になる娘と九歳になる男の兒がある。初めて逢つた時と打解けて話し合つた時と感は丸で違つてゐた。大島先生は一合の晩酌に眞赤になつて、教育上の經驗やら若い者の爲めになるやうな話やらを得意になつてして聞かせた。

湯屋が通りにあつた。細い煙筒から煙が青く黒く颯つて居るのを見たことがある。格子戸が男湯と女湯とにわかれて、入ると其處に番臺があつた。湯氣の白く一杯に籠つた中に、箱洋燈がボンヤリと暗くついて居て、笥から落ちる上り水の音が高く聞えた。湯殿は掃除が行届かぬので、氣味悪くヌラ／＼とすべる。清三は湯につきりながら、自分の新しい生活を思ひ浮べた。

十

ある朝、授業を始める前に、清三は卓の前に立つて、眞面目な調子で生徒に言つた。

『今日は皆さんにお目出度いことを一つお知らせ致します。皇太子妃殿下節子姫には去る二十九日、新たに親王殿下を易々と御分曉遊ばされました。これは皆さんも新聞紙上でお父様やお母様から既に聞きなされたことゝ存じます。皇室の御榮えあらせらるゝことは、我々國民に取つてまことに喜悅に堪へませんことで、千秋萬歳、皆さんの毎日お歌ひになる君が代の唱歌にもさゞれ石の殿となりて昔のむすまでと申して御座います通りであります。然るに、一昨日其親王殿下の御命名式が御座いまして、迪宮殿下裕仁親王と名告らせらるゝといふことが御發表になりました。』

かう言つて、かれは後向きになつて、チョオクを取つて、黒板に迪宮裕仁親王といふ六字を大きく書いて見せた。

十一

『何うぞ一つ名譽賛成員になつて戴きたいと存じます……それに、何か原稿を。どんな短かいものでも結構ですから。』

清三はかう言つて、前に坐つて居る成願寺の方丈さんの顔を見た。兼ねて聞いて居たよりも風采の揚らぬ人だとかれは思つた。新體詩、小説、其名は東京の文壇にもかなり聞えて居る。清三は曾て其の詩集を愛讀したこともある。雑誌に載つた小説を讀んだこともある。一昨年此處の住職になるに就いても止むを得ぬ先住からの縁故があつたからで、羽生町で屈指な名刹とは言ひながら、かうした田舎寺には惜しいといふことも噂にも聞いて居た。それが、かうした脊の低い小づくりな弱々しさうな人だとは夢にも思ひがけなかつた。

かれは土曜日の家への歸途に、羽生の郵便局に荻生秀之助を訪ねたが、秀之助が丁度成願寺の山形古城を知つて居ると言ふので、それで伴立つて、訪問した。

『それは面白いですな……それは面白いですな。』

かう繰返して主僧は言つた。『行田文學』に就いて話が三人の間に語られた。

『無論、御盡力ませうとも……何か、まア、初めには詩でも上げませう。東京の原にもさう言つて

遣りませう。』

主僧はかう言つて軽く挨拶した。

『何うぞ何分——』

清三は頼んだ。

『荻生君もお仲間ですか。』

『いゝえ、私には……文學など解りやしませんから、』と荻生さんは何處か町家の息子と謂つたやうな風で笑つて頭を搔いた。中學に居る頃から、石川や加藤や清三などとは違つて、文學だの宗教だのといふことには餘り携はらなかつた。随つて空想的な處はなかつた。中學を出るとすぐ前から手傳つて居た郵便局に勤めて、不平も不満もなく世の中へ出て行つた。

主僧の室は十疊の間で、天井は高かつた。前には伽羅や松や躑躅や木犀などの點綴された庭が展げられてあつて、それに接して、本堂に通ずる廊下が長く續いた。瓦屋根と本堂と離れの六疊の障子の黒くなつたのが見えた。書箱には洋書が一杯入れられてあつた。

主僧はめづらしく調子づいて話した。今の文壇の不眞面目と黨閥の弊とを説いて、『とても東京に居ても勉強などは出来ない。田園生活などと言ふ聲の聞えるのも尤なことです、』などと云つた。風采は揚らぬが、言葉に一種の熱があつて、若い人達の胸をそゝつた。

詩の話から小説の話、戯曲の話、それが容易に盡きようとはしなかつた、明星派の詩歌の話も出た。主僧も矢張晶子の歌を賞揚して居た。『さうですとも、言葉などを餘り喧しく言ふ必要はないです。新しい思想を盛るには矢張新しい文字の排列も必要ですとも……』かう言つて林の説に同意した。

ふと理想といふことが話題にのほつたが、これが出ると主僧の顔は俄かに生々した色を着けて來た。主僧の早稻田に通つて勉強した時代は紅葉露伴の時代であつた。所謂『文學界』の感情派の人々とも往來した。ハイネの詩を愛讀する大學生とも親しかつた。麻布の普洞宗の大學生から早稻田の自由な文學社會へ入つたかれには、冬枯の山から綠葉の野に出たやうな氣がした。今ではそれがかうした生活に逆戻りした位であるから、餘程鎮靜はしてゐるが、それでも何うかすると昔の熱情が逆つた。

『人間は理想が無くつては駄目です。宗教の方でもこの理想を非常に重く見て居る。同化する、惑溺するといふことは理想がないからです。美しい戀を望む心、これも矢張理想ですから……普通の人間のやうに愛情に盲從したくないといふところに力がある。それは佛も如是一心と言つて靈肉の一致は説いて居ますが、何うせ自然の力には従はなければならぬのは解つて居ますが——そこに理想があつて物にあこがれる處があるのが人間として意味がある。』

持前の猫脊を愈々猫脊にして、蒼い顔に稍々紅を潮した熱心な主僧の態度と言葉とに清三は其儘引入られるやうな氣がした。其言葉はヒシ／＼と胸にこたへた。曾て書籍で讀み詩で讀んだ思想と憧憬、そ

れはまだ空想であつた。自己の周囲を見廻しても、そんなことを口にするものは一人もなかつた。養蠶の話でなければ金儲の話、月給の多い寡いといふ話、世間の人は多くバンの話で生きて居る。理想などといふことを言ひ出すと、まだ世間を知らぬ乳臭兒のやうに一言の下に言ひ消される。

主僧の言葉の中に『成功不成功は人格の上に何の價値もない。人は多くさうした標準で價値をつけるが、私はさういふ標準より理想や趣味の標準で價値をつけるのが本當だと思ふ。乞食にも立派な人格があるかも知れぬ』といふ意味があつた。清三には自己の寂しい生活に對して非常に有力な慰藉者を得たやうに思はれた。

主客の間には陶器の手爐が二箇置かれて、菓子器には金米糖が入られてあつた。主僧とは正反對に體格のがつしりした色の黒い細君が注いで行つた茶は冷たくなつたまゝ、黄ろく濁つて居た。

一時間の後には、二人の友達は本堂から山門に通ずる長い敷石道を歩いて居た。鐘樓の傍に扉を閉め切つた不動堂があつて、その高い縁では、額髪を手拭で卷いた子守が二三人遊んで居る。大きい銀杏の樹が五六本、其幹と幹との間にこれから織らうとする青縞のはたをかけて二十五六の櫛卷の細君が頻りにそれを綜て居た。

『面白い人だねえ。』

清三は友を顧みて言つた。

『あれで中々好人ですよ。』

『僕はこんな田舎にあんな人が居ようとは思はなかつた。田舎寺には惜しいつて言ふ話は聞いて居たが、本當に左様だねえ……』

『話相手が無くつて困るつて言つてゐましたねえ。』

『それは左様だらうねえ君、田舎には百姓や町人しか居やしないから。』

二人は山門を過ぎて、榛の木の並んだ道を街道に出た。街道の片側には汚い溝があつて、歩くと蛙が幾疋となく叢から水の中へ飛込んだ。水には黒い青い苔やら藻やらが浮いて居た。

大和障子を半明けて、色の白い娘が横顔を見せて、青縞をチャンカラチャンカラ織つて居た。その前を通る時、

『あのお寺の本堂に室がないだらうか？』

かう清三は訊いた。

『ありますよ。六疊が。』

と友は振返つた。

『何うだらうねえ、君。あそこで置いて呉れないかしらん。』

『置いて呉れるでせう……此間まで巡査が借りて自炊をして居ましたよ。』

『もう其巡查は居ないのかねえ。』

『此間岩瀬へ轉任になつて行つたつて聞きました。』

『一つ、君は懇意だから、頼んで見て呉れませんか。自炊でも何でもして、食事の方は世話をかけずに、室さへ貸して貰へば好いが……』

『それは好い考ですなえ、』と荻生君も賛成した。『此處からなら彌勒にも二里に近いし……土曜日に行田へ歸るにも餘り遠くないし……』

『それにいろいろ教へても貰へるしねえ、君。彌勒あたりの下らん處に下宿するよりいくら好いか知れない。』

『本當ですなえ、私も話相手が出来て好い。』

荻生さんが來週の月曜日までに聞いて置いて遣るといふことに決めて、二人の友達は分署の角で別れた。

十二

昨日の午後、月給が半月分渡つた。清三の財布は銀貨や銅貨でガチャ／＼して居た。古いとちの切れ

で働いて初めて取つたのだと思ふと、何となく異つた意味がある。母親が勝手に立たうとするのを呼留めて、懐から財布を出して、かれは其處に紙幣と銀貨とを三圓八十錢並べた。母親はさも／＼喜ばしさに堪へぬやうに息子の顔を見て居たが、『お前がかうして働いて取つて呉れるやうになつたかと思ふと本當に嬉しい、』と心から言つた。息子は残りの半分は今四五日経つと下る筈であるといふ事を語つて、『何うも田舎はそれだから困るよ。何でも三度四度位に下りることもあるんだつて。けち／＼してるから。』母親は其金をさも尊さうに押戴く眞似をして、立つて神棚に供へた。神棚には躑躅と山吹とが小さい花瓶に生けて上げられてあつた。清三は後向になつて母親の小さい丸髻に白髪の此頃多くなつたのを見て、其のやさしい心のいかに生活の嵐に吹荒まれて居るかを考へて同情した。こればかりの金にすらかうして喜ぶのが親の心である。かれは中學からすぐ東京に出て行く友達の噂を聞く度に燃した羨望の情と、かうした貧しい生活をしてゐる親の慈愛に對する子の境遇とを考へずには居られなかつた。

其の土曜日は愉快に過ぎた。母親は自分で出懸けて清三の好きな田舎饅頭を買つて來て茶を煎れて呉れた。母親の小皺の多い莞爾した顔と息子の青白い弱々しい淋しい笑顔とは、久しく長火鉢に相對して坐つた。

清三は來週から先方の都合さへよければ羽生の成願寺に下宿したいといふ話を持出して、若い學問のある方丈さんのことや、やさしい荻生君のことなどを話して聞かした。母親はそれまでには夜具や着物

を洗濯して遣り度い、それに拾を一枚拵へ度いなどと言つた。父親の商賣の不景氣なことも續いて語つた。清三の幼稚い頃の富裕な家庭の話も出た。

夜は菓子を買つて郁治の家へ行つた。雪子が莞爾と笑つて迎へた。書齋での話は容易に盡きようともしなかつた。同じことを繰返して語つても、それが同じことゝは思へぬほど二人は親しかつた。相對して互に顔を見合せて居るといふことが二人に取つて此上もない愉快である。『行田文學』の話も出れば山形古城の話も出る。其處に郁治の父親が折よく昨日歸つて來て居たと出て來て『林さん、何うです。學校の方は旨く行きますか、』などと言つた。

『あそこの學校は軋轢がなくなつて好いでせう。校長は二十七年の卒業生だが、割合にあれで話が解つて居る男でしてな……村の受けも好いです。』

郡視學はこんなことを語つて聞かせた。

雪子が茶をさしに來た時、袂から繪端書を出して、『浦和の美穂子さんから今、私の處にこんな手紙が來てよ、』と二人に示した。美穂子はかのトムの君である。雪子はまだ兄の心の祕密を知らなかつた。

繪端書は女學世界について居た『初夏』といふ題で、新緑の陰にハイカラの女が細い流行の小傘を携へて立つて居た。文句は別に變つたこともなかつた。

雪子さんお變り御座いませんか。此處に參つてからもう二月になりました。寄宿の生活——それ

は他からは想像が出来ない位で御座います。此の春、御一緒に楽しく遊んだことなどををり／＼考へることが御座いますよ。御無沙汰のお詫までに……美穂子

清三は其端書を疊の上に置いて、

『今度は貴嬢も浦和にいらつしやるんでせう？』

『私など駄目。』

と雪子は笑つた。其笑顔を清三は歸路の闇の中に思ひ出した。相對して居たのは僅かの間であつた。其横顔を洋燈が照した。常に似ず美しいと思つた。ツンと澄したやうな處があるのをいつも不愉快に思つて居たが、今宵はそれが却つて品があるかのやうに見えた。美穂子の顔が續いて眼前を通る。雪子の顔と美穂子の顔が重つて一つになる……田の畔に蛙の聲がして、町の病院の二階の灯が窓から洩れた。

*

*

*

*

町の裏に小さな寺があつた。門を入ると、庫裡の藁葺屋根と風雨に曝された黒い窓障子が見えた。本堂の如來様は黒く光つて、木魚が赤いメリンスの敷物の上に載せてある。其裏にある墓地には、竹藪が隣の地面を仕切つて、墓石にはなめくじの這つた痕があり／＼と残つて居た。其多い墓石の中に清三の弟の墓があつた。弟は一昨年春十五歳で死んだ。其病は長かつた。次第に瘦せ衰へて顔は日に／＼蒼白くなつた。醫師は診斷書に肺結核と書いたが、父母はそんな病氣が家の血統にある譯がないと言つて、

その醫師の診断書を信じなかつた。清三は時々其幼ない弟のことを思ひ起すことがある。死んだ時の悲哀——それよりも、今生きて居て呉れたなら、話相手になつて、何んなにかうれしからうと思ふ。其度毎にかれは花を携へて墓參をした。

日曜日の朝、かれは櫓と山吹とを持つて出懸けた。庫裡で、手桶を借りて、水を汲んで、手づから下けて裏へ廻つた。墓石はまだ建て、なく、風雨に曝されて黒くなつた墓標が土饅頭の上にさびしく立つて居る。父母も久しくお参りをせぬと見えて、花立は割れて居た。水を入れても甲斐がなかつた。

清三の姿は久しく其前に立つて居た。もう五月の新緑があたりを鮮かにして、老鶯の聲が竹藪の中に聞えた。

午後からは、印刷所に行つたり石川を訪問したりした。今日、彌勒に歸らぬと、明日は少くも朝の四時に家を出なければ授業時間に合はぬと知つては居るが、何うも歸るのが厭で——親しい友人と物語る樂みを捨て、碌々話す人もない處へ歸つて行くのが厭で、われ知らず時間を過して了つた。

夕飯を食つてから、湯に出かけたが、歸りに再び郁治を訪ねて、明かな夕暮の野を散歩した。

城址は鳥渡見てはそれと思へぬ位昔の形を失つて居た。牛乳屋の小さい牧場には牛が五六頭モウくと聲を立て、啼いて居て、それに接した青縞機業會社の細長い建物からは、機を織る音に交つて女工の唄ふ聲がはつきり聞える。夕日は昔大手の門のあつたといふあたりから年々田に埋立てられて、里川のやう

に細くなつた沼に畫のやうに明かに照り渡つた。新に芽を出した蘆荻や茅や蒲や、それに錆びた水が一杯に満ちて、或處は暗く或處は明るかつた。沼に架つた板橋を渡ると、細い田圃路がうねくと野に通じて、車を曳いて來る百姓の顔は夕日に赤く彩られて見えた。

麥畑と桑畑、其間を縫ふやうにして二人は歩いた。話は話と續いて容易に盡きようともしなかつた。路はいつか士族屋敷のあたりに出た。

家はところ／＼にあつた。今日まで踏留つて居る士族は少なかつた。昔は家から家へと續いたものであるが、今は晨の星のやうに島と島の間に一軒二軒と残つて居る。昔風の黒いシタミや白い壁や大きい栗の木や柿の木や井字形の井戸側や疎らな生垣からは古い縁側に低い庇、文人畫を張つた襖なども明かに見透された。夏の日など其處を通ると、垣に目の覺めるやうな紅い薔薇が咲いて居ることもあれば、新しい青簾が縁側にかけてあつて、風鈴が涼しげに鳴つて居ることもある。秋の霧の深い朝には、桔槔のギイと鳴る音がして、荔子の黄ろいのが垣から口を開いて居る。琴の音などもをり／＼聞えた。

この士族屋敷には矢張もとの士族が世に後れて住んで居た。役場に出て居るものもあれば、小學校の先生をしてゐるものもある。財産があつて無爲に月日を送つてゐるものもあれば、小規模に養蠶などをやつて暮して居るものもある。金貸などをしてゐるものもあつた。

士族屋敷の中の金持の家が一軒路の畔にあつた。珊瑚樹の垣は茂つて、分明と中は見えないが、そ

れでも白壁の土藏と棟の高い家屋とは解つた。門から中を見ると、立派な玄關があつて、小屋の傍に鶏が餌をひろつて居る。

二人は其垣に添つて歩いた。

垣が盡きると、水の充ちた幅の狭い川が氣持よく流れてゐる。岸には楊が其葉を水面に浸して漣をつくつて居る。細い板橋が川の折曲つた處に架つて居る。

美穂子の家は其處から近かつた。

『行つて見ようか、北川は今日は居るだらう。』

清三はかう言つて友を誘つた。

其家は大きな田舎道を隔て、廣い野に向つて居た。古びた門があつた。矢張庇の低い藁葺の家で、土臺がいくらか曲つて居る。庭には松だの、檜だの、椿だのが茂つて居た。今年の一月から三月にかけて、若い人々はよく此家に歌留多牌を取りに來たものである。美穂子の姉の伊與子、妹の貞子、それに國府といふ人の妹に友子と言つて美しい人が居た。それ等の少女連と、郁治や清三や石川や澤田や美穂子の兄の北川などの若い人々が八疊の一間に一杯になつて、竹筒臺の五分心の洋燈の光の下に頭を並べて、夢中になつて歌留多牌を取ると、傍には半白の、品の好い桑名訛のある美穂子の母親が、眼鏡をかけて、高く微つた聲で若い人々の爲めに倦きずに歌留多牌を讀んで呉れた。茶の時には蜜柑と五目飯の赤藍とが

一座の眼を鮮かにした。歸りはいつも十一時を過ぎて居た。さびしい士族屋敷の竹藪の陰の道を若い男と女とは笑ひさゝめいて歸つた。

北川は湯に行つて不在であつた。『まア、よく入らしやいましたな……今、もうぢき歸つて参りますから……』母親はかう言つて、莞爾して二人を迎へた。郁治は其笑顔に美穂子の笑顔を思ひ出した。聲もよく似てゐる。

二人は庭に面した北川の書齋に通された。父親は何處に行つたか姿は見えなかつた。

母親は暫し二人の相手をした。

『林さんは彌勒の方にお出になりましたつてな、まア結構でしたな……母さん、さぞおよろこびでしたらうな。』

こんなことを言つた。

浦和に居る美穂子の噂も出た。

『女がそんなことをしたつて仕方がないつて父親は言ひますけどもな……當人が中々言ふことを聞きませんでな……何うせ女のすることだから、碌なことは出來んのは知れてるですけど……』

『でもお變りはないんでせう。』

清三はかう訊くと、

『え、もう……お轉婆ばかりして居るさうでな、』と母親は笑つた。すぐ言葉を續いで、今度は郁治に、

『雪さん何うして御座るな。』

『相變らずぶら／＼して居ます。』

『ちと、遊びにおつかはし、貞も退屈して居りますで……』

それこれする中に、北川は湯から歸つて來た。脊の高い頬骨の出た男で、手織の綿衣に紺の羽織を着て居た。話の最中にけた、ましく聲を立て、笑ふ癖がある。石川や清三などとは違つて、文學に對しては餘り興味を持つて居ない。學校に居た頃は、有名な運動家で、ベースボールなどに懸けては級の中でかれに匹敵するものはなかつた。軍人志願で、卒業するとすぐ熱心に勉強して、この四月の士官學校の試験に應じて見たが、數學と英語とで失敗した。けれども餘り失望もして居らなかつた。九月の學期には、東京に出て、然るべき學校に入つて、充分な準備をしようと云つて居る。

三人は胸襟を開いて語り合つた。けれど此處で語る話と清三と郁治と話す話とは、大に異つて居た。同じ親しさでも單に學友としての親しさであつた。打解けて語ると言つても、心の底を互に披瀝するやうなことはなかつた。

此處では、學校の話と將來の希望と受験の準備の話などが多く出た。北川は東京で受けた士官學校入

學試験の話と二人にして聞かせた。何うも試験に餘裕がなくつて困つた。英語の書取など一度しか讀んで呉れないんだから困るよ。それに試験の場所が大きく廣すぎて、聲が散つてよく聞取れないんだから、ドマ／＼して了つたよ。おまけに代數が馬鹿に難かしかつた。』

代數の二次方程式の問題を渠は手帳に書き附けて來た。それを机の抽斗やら押入の中やら文庫の中やら彼方此方とさがし廻して、漸く捜し出して二人に見せる。成程問題はむつかしかつた。數學に長じた郁治にも出來なかつた。

北川は漢學には長じて居た。父親は藩でも屈指の漢學者で、漢詩などをよく作つた。今は町の役場に出るやうになつたので止したが、三年前までは、町や屋敷の子弟に四書五經の素讀を教へたものである。午後三時頃から日没前までの間、蜂の唸るやうな聲は常にこの家の垣から洩れた。其頃美穂子は赤いメリンスの帯を緊めて、髪をお下けに結つて、門の前で近所の友達と遊んだ。清三は其時分から美穂子の眼の美しいのを知つて居た。

郁治と清三が暇を告げたのは、夜の九時過であつた。若い人々は話が無いと言つても話がある。二人は其處を出てしばしの間黙つて歩いた。竹藪のガサ／＼する陰の道は暗かつた。郁治の胸にも清三の胸にも此際浦和の學校に居る美穂子のことが浮んだ。『あの時——郁治がそれと打明けた時、何故自分もラヴして居るといふことを思切つて言はなかつたらう』と清三は思つた。けれど友の戀はまだ美穂子に通

じてある譯ではない。戀された人の知らぬ前に戀した人の心を自分は其人から打明けられた。それだけかれは苦しかつた。またそれだけかれは其問題に突き詰めて居なかつた。時には『まだ決つたと言ふ譯ではない、打突つて見て、何うなることか解らない。……希望がすっかり破れて了つたといふ譯でもない……』などと思ふこともある。友の爲めに犠牲になるといふ氣は無論ある。友の戀の成らんことを望む念もある。かれの性質から言つても、家庭の事情から言つても、現在の戀の情態から言つても、烈しく熱するにはまだ大分距離もあり餘裕もあつた。

しかし其夜は二人とも不思議に胸が躍つて居た。黙つて歩いて居ても、其心はいろ／＼なことを語つて居た。野に出ようとする、昨日の雨に路の悪くなつてゐるところがあつた。低い駒下駄はズブズブ入つた。

『悪い路だね。』

二人は互にかう言ひ合つた。しかし心では二人とも美穂子のことを考へて居た。

郁治にしては、女に對する煩悶、それを残す處なく此の友に語り度いと思つた。打明けて話したならいくらか此胸が靜まるだらうとも思つた。しかし何故かそれを打明けて語る氣にはならなかつた。

二人は矢張黙つて歩いた。

城址の森が黒く見える。沼がところ／＼闇の夜の星に光つた。蘆や蒲がガサ／＼と夜風に動く。町の

灯が其處にも此處にも見える。

公園から町に入つた。もう其頃は二人は黙つて居なかつた。郁治は低い聲で、得意の詩吟を始めた。心の感激の餘波がそれにも残つて聞かれる。別れる道の角に來ても、かれ等は何だか此ま、別れるのが物足らなかつた。『僕の家へ寄つて茶でも飲んで行かんか。』清三がかう誘ふと、郁治は跟いて來た。

清三の母親は裁物板に向つてまだせつ／＼と賃仕事をして居た。茶を煎れて貰つてまた一時間位話した。語つても語つても盡きないのは若い人々の思ひであつた。十二時が鳴つて、郁治が思ひ切つて歸つて行くのを清三はまた湯屋の角まで送る。町の大通りはもうしんとして居た。

翌日は母も清三も寢過して了つた。時計は七時を過ぎて居た。清三は慌て、茶漬を搔込んで出懸けた。いくら急いでも四里の長い路、彌勒に着いた頃はもう十時を餘程過ぎた。學校の硝子窓には朝日が既に長けて、校長の修身を教ふる聲が高く明かに四邊に聞える。急いで行つて見ると、受持の級では生徒がガヤ／＼と騒いで居た。

十三

熊谷町にもかれの同窓の友はかなりにある。小畑といふのと、櫻井といふのと、小島といふのと。——殊に小畑とはかれも郁治も人並すぐれて交情が好かつた。卒業して逢はれなくなつてからは毎日のやう

に互に手紙の往復をして、戯談を言つたり議論をしたりした。月に一二度は清三は屹度出懸けた。

行田町から熊谷町まで二里半、其路は綺麗な豊富な水で満された用水の縁に沿つて駛つた。一田圃毎に村があり、一村毎に田圃が開けるといふ風で、夏の日には家の前の廣場で麥を打つて居る百姓家や、南瓜の見事に熟して居る畑や、豪農の白壁の土藏などが續いた。秋の晴れた日には、田圃から村に稻を満載した車が輾つて、黄ろく熟した田には、頬被りをした田舎娘が、鎌の手を止めて街道を通つて行く旅人の群を眺めた。其街道にはいろ／＼なものが通る。熊谷行田間の乗合馬車、青縞屋の機廻りの荷車、其頃流行つた豪家の旦那の自轉車、それに俵にはさまざまの人が乗つて通つた。よほ／＼の老いた車夫が町へ買物に行つた田舎の婆さんを二人乗に乗せて重さうに挽いて行くのもあれば、黒鴨仕立の立派な俵に町の醫者らしい鬚の紳士が威勢よく乗つて駛らせて行くのもある。田植時分には、雨が蕭々と降つてこねかへした。田の泥濘の中に低頭いた饅頭笠がいくつとなく並んで見える。好い聲でうたふ田植唄も聞える。植ゑ終つた田の緑は美しかつた。田の畔、街道の兩側の草の上には、をり／＼植ゑ残つた苗の束などが捨て、あつた。五月雨晴には白い繭が村の人家の軒下や屋根の上などに干してあるのを常見懸けた。

用水の傍に一軒涼しさうな休茶屋があつた。楡の大きな木が宛で冠さるやうに繁つて、店には土地で出来る甜瓜が手桶の水の中に浸けられてある。平たい半切に心太も入れられてあつた。暑い木蔭のない

路を歩いて来て、此處で汗になつた詰襟の小倉の夏服を脱いで、瓜を食つた時の旨かつたことを清三は覚えて居る。其店の婆さんに娘が一人あつて東京の赤坂に奉公に出てることも知つて居る。

關東平野を環のやうに繞つた山々の眺め——其眺めの美しいのも、忘れられぬ印象の一つであつた。

秋の末、木の葉が何處からともなく街道を轉つて通る頃から、春の霞の薄く被衣のやうにかゝる二三月の頃までの山々の美しさは特別であつた。雪に光る日光の連山、羊の毛のやうに白く靡く淺間ヶ嶽の畑、赤城は近く、榛名は遠く、足利附近の連山の複雑した巒には夕日が繪のやうに美しく光線を漲らした。行田から熊谷に通ふ中學生の群はこの間を笑つたり戯れたり走つたりして歸つて來た。

熊谷の町はやがて其瓦屋根や煙筒や白壁造の家などを廣い野の末に顯はして來る。熊谷は行田とは比較にならぬほど賑かな町であつた。家並も整つて居るし、富豪も多いし、人口は一萬以上もあり、中學校、農學校、裁判所、稅務管理局なども置かれた。汽車が停車場に着く毎に、行田地方と妻沼地方に行く乗合馬車が各自に客を待受けて、町の廣い大通りに喇叭の音をけた、ましく漲らせてガラ／＼と通つて行つた。夜は商家に電氣が點いて、小間物屋、洋物店、呉服屋の店も晴々しく、料理屋からは陽氣な三味線の音が賑かに聞えた。

町は清三に取つて第二の故郷である。八歳の時に足利を出て、通りの郵便局の前の小路の奥に一家は其の落魄の身を落附けた。其小路は渠に取つていろ／＼な追憶がある。其處には郵便局の小使や走り使